
紅い翼と白の少年

黒猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅い翼と白の少年

【Nコード】

N1679W

【作者名】

黒猫

【あらすじ】

「俺は《バケモノ》なんだ」

自分にそう言い聞かせ、それでも誰かの為に生きようとする少年、
終夜

平々凡々と過ごしながらも、人一倍優しい心を持つ普通高校生、優一

今まで接点のなかった2人だが
とある事件で2人は出会う

「《バケモノ》の俺でも誰かを救いたい」
その一心に終夜は歩き続ける

「終夜は《バケモノ》なんかじゃない。僕の友達だ」
優一は終夜の友達であり続けることを望む

日常生活を送りながらも2人は否応なしに戦い巻き込まれていく

終夜の本当の力とは？

優一の隠された力とは？

2人の少年と2人の少女の紡ぎ出す運命は一体どこへ向かうのか？

悲しき幻想の夢の果て

そこには何が広がっているのか？

注意

残酷な表現があります

そういった表現の苦手な方はご注意ください

戦闘描写が苦手なのでうまく表現出来ないかもしれませんが頑張ります

とあるサイトで投稿していましたが、此方に転載しようと思います

第0話

チャイムが鳴り響き、ホームルームの時間の終わりを告げる。

「起立、礼」

「さようなら」

その掛け声と共に、教室から出て行き帰る生徒もいれば、教室に残り話をする生徒達。

だが、大半の生徒は直ぐに帰ろうとはしなかった。

何故なら今日は高校二年生最後の日。

いわゆる、終業式ってやつだった。

大半の生徒はこの後にやってくる春休みの計画を友人達と話し合っていた。

溜め息をひとつこぼし鞆掴んで立ち上がる一人の生徒。

身長は少し高めで、やや痩せ型の身体、ボサボサに伸ばした髪。

天城終夜は一人教室をあとにした。

終夜には友達がいらない。

というより作ろうとしない。

彼、終夜には変わった力があつた。

そして彼も自分のことで線引きをしていた。

《自分は人間と関わりを持ってはいけない》のだと終夜は自分に言

い聞かせて生きてきた。

「バケモノである俺は独りがお似合いなんだよ」
自傷めいた笑みを浮かべ校門をくぐりきつた時、終夜はふと立ち止まる。

両目を閉じ、何かを感じ取っているようだった。

数秒後、彼は駆け出した。

何かに引き付けられるかのように、ただ走り続けた。

彼を育ててくれた人がこの高校に無理やり入学させたのだが、いつまで立つても終夜は独りであり続けた。

学校での終夜は、授業中は起きているが、基本的に眠っている。
周りの人に話しかけられても大抵は無視か、一言二言で会話を切る。

そんな彼に友達なんて出来るはずがない。

勿論、彼もそのことを知っているし、ワザとしている。

彼が独りであり続けるのにはある理由があった。

それは、

彼が《バケモノ》だから。

彼、終夜には変わった力があつた。

そして彼も自分のことで線引きをしていた。

《自分は人間と関わりを持ってはいけない》のだと終夜は自分に言い聞かせて生きてきた。

「バケモノである俺は独りがお似合いなんだよ」
自傷めいた笑みを浮かべ校門をくぐりきった時、終夜はふと立ち止まる。

両目を閉じ、何かを感じ取っているようだった。

数秒後、彼は駆け出した。

何かに引き付けられるかのように、ただ走り続けた。
その時新たな彼の運命は廻り始めた。

第1話 1

チャイムが鳴り響き、ホームルームの時間の終わりを告げる。

「起立、礼」

「さようなら」

その掛け声と共に、教室から出て行き帰る生徒もいれば、教室に残り話をする生徒達。

だが、大半の生徒は直ぐに帰ろうとはしなかった。

何故なら今日は高校二年生最後の日。

いわゆる、終業式ってやつだった。

大半の生徒はこの後にやってくる春休みの計画を友人達と話し合っていた。

溜め息をひとつこぼし鞆掴んで立ち上がる一人の生徒。

身長は少し高めで、やや痩せ型の身体、ボサボサに伸ばした髪。

天城終夜は一人教室をあとにした。

終夜には友達がいらない。

というより作ろうとしない。

彼、終夜には変わった力があつた。

そして彼も自分のことで線引きをしていた。

《自分は人間と関わりを持ってはいけない》のだと終夜は自分に言

い聞かせて生きてきた。

「バケモノである俺は独りがお似合いなんだよ」
自傷めいた笑みを浮かべ校門をくぐりきつた時、終夜はふと立ち止まる。

両目を閉じ、何かを感じ取っているようだった。

数秒後、彼は駆け出した。

何かに引き付けられるかのように、ただ走り続けた。

彼を育ててくれた人がこの高校に無理やり入学させたのだが、いつまで立つても終夜は独りであり続けた。

学校での終夜は、授業中は起きているが、基本的に眠っている。
周りの人に話しかけられても大抵は無視か、一言二言で会話を切る。

そんな彼に友達なんて出来るはずがない。

勿論、彼もそのことを知っているし、ワザとしている。

彼が独りであり続けるのにはある理由があった。

それは、

彼が《バケモノ》だから。

彼、終夜には変わった力があつた。

そして彼も自分のことで線引きをしていた。

《自分は人間と関わりを持ってはいけない》のだと終夜は自分に言い聞かせて生きてきた。

「バケモノである俺は独りがお似合いなんだよ」
自傷めいた笑みを浮かべ校門をくぐりきった時、終夜はふと立ち止まる。

両目を閉じ、何かを感じ取っているようだった。

数秒後、彼は駆け出した。

何かに引き付けられるかのように、ただ走り続けた。
その時新たな彼の運命は廻り始めた。

「起立、礼」

「さようなら」

教室を出て校門へ向かう生徒達。

その中の一人の少年。

望月優一も周りの友達と共に校門をくぐった。

「また、同じクラスだったらいいな」

「ああ、そうだね。っと僕こっちの道だから」

少年はそう言って友達と別れた。

望月優一、高校2年生。

今日は終業式だった。

そしてこれから来る「春休み」を楽しみにしていた。

少年は少し浮かれすぎていたのかもしれない。

だから、少年は、

(…あつ、こつちの道からの方が早く家に着くかも)

いつもと違う道を通ってしまった。

いつもと違う道を選んでしまった。

その些細な選択で、

少年の普通の毎日は静かに終わりを告げた。

1人のバケモノの少年の手によって。

1人のバケモノの少年に出会ってしまったことによって。

普通の世界が、

異常な世界へ、

鼻歌混じりに上機嫌で歩く少年。

望月優一がそんなことに気付くことはなかった。

「迷った…」

虚しさいっぱいのが響く。

その声の発生源、望月優一。

彼はいつも違うが舗装された道を歩いていた。
いた…はずなのだが。
いつの間にやら森の中。

そう、

彼は、極度の方向音痴だった…

うがーっと、声を上げ頭を抱える。

周りにあるのは木、木、木。

木しか見えなかった。

すでにどれだけ歩いたか分からない。

どっちから来たのかどうかも分からない。

つまり、彼は盛大に道に迷っていた。

高校生にもなつて迷子である。

彼は、おもむろに立ち上がった。

そして、そこらへんに落ちていている木の棒を一本拾い、地面に突き立てた。

そして、棒を持っている手を放す。

当然、棒は真つ直ぐに直立する事はなく

地面に倒れる。

そして、棒の倒れた方向を確認し、

「よしっ、こっちな」

意気揚々とその方向へ歩き始めた。

…ベタもいいところだった。

あまりにもベタ過ぎているが。

彼はそんなことお構いなしに進んで行く。

ある程度進んでは、
また棒を倒し、また進んでは、また棒を倒し
その作業をひたすら繰り返したが、当然ながら森の外に出ることは
なかった。

そして、しばらく時間経ち、
日もだいぶ傾き始めた。

方向音痴の少年は一人焦っていた。

棒を倒しても倒しても。

森の出口らしきもの一向に見えてこない。

…こんな適当なやり方で大丈夫なわけがない。

だが彼は、ひたすら棒を倒し続けた。

幾つもの棒を交換し。

何度も何度も倒し続けた。

倒した数が3桁に差し掛かった頃、木と木の間、土や木の茶色で
はなく、葉っぱの緑でもなく、真っ白なものが見えた。

それを確認すると同時に優一は駆け出した。

だんだんとその白いものに近づく。

近づくにつれ、そのものが大きいことに気が付き。

それが、コンクリートであることに気が付いた。

つまり、建物である。

ようやくこの「迷いの森」（優一が命名した）から出られる。
その気持ち一つに彼は走る。

建物の前までたどりつき。
建物の全貌を見渡し。
彼は両膝を着いた。

窓ガラスは全て叩き割られ、
壁には沢山の凹みやひび割れが生じており、このような建物を一言
で言うのであれば「廃墟」そのものであった。

今まで下に伏せられていた目が、ふと正面の廃墟に向けられた。
そして、勢いよく立ち上がる。

その瞳には強い光が灯っていた。

（建物があるってことは…森の出口も近いつてことだ！！）
なんの根拠もないが、彼を立ち直せるものとしては十分だった。

「…とは言えどうしたもんかなあ」
はあくつと彼は溜め息を吐き、
「…とりあえず、この建物の周り歩いて見るか」
彼は、辺りの詮索を始めた。

建物自体はそこまで大きくないものの、建物は壁の至るところにひ
びが入っており、窓ガラスは全て割られており
その窓から中を覗いてみても、
ところどころ窓からの光は入っているものの、暗闇が覆い尽くして
いた。

《不気味》

そんなことばがよく似合う建物だった。

「…うっわ、幽霊とか居そうだな…」

優一は幽霊という存在を否定している人間であったが、思わず口に出してしまった。

そして、それと同時に早くここから離れたいと思った。

とりあえず、建物の周りをぐるっと見てみたところ、この場所を特定するようなものは何一つなかった。

はあくつとまた溜め息を吐き、とりあえず、この建物の入り口に向かう。

歩を進めていた足がふと、止まった。

そして、彼はとっさに近くの茂みに身を隠した。入り口の前に誰かが立っている。

廃墟と言ってもいいようなこの建物の中に入っていかうとしているのだから優一は不信に思ったのだ。

もう随分使われていないような、街からも離れて森の中にあるような、そんな建物で何をするのか想像できなかった。

想像できたとしてもまああらかた悪い方のイメージしかなかった。

だから、優一は一度隠れて様子を見ようと思った。

隠れた茂みの葉っぱと葉っぱの間から入り口の前の人物を確認する。

「えっ…?」

優一は思わず声を漏らした。

見覚えのある鞆。

見覚えのある制服。

そして、見覚えのある、

いつも教室の隅で、

誰とも話すことなく、

ずっと一人で過ごしていた少年。

同じ高校に通い、クラスメイトの

天城終夜そのものであった。

呆気にとられている間に、終夜は建物の中に入っていった。

第1話 2

終夜が中に入って行くのを見た優一は慌てて茂みから飛び出しそのまま、入り口に向かった。

終夜が中で何をしているのか。

悪いことをしているとは思えたくないが、確認しようと思ったからだ。

そして、帰り道を教えてもらおうと思ったからだった。

…どちらかと言えば、後者の方に重点を置いている。

建物の入り口まで後数歩というところで優一は立ち止まる。

キィインと金切り音が優一の頭の中に響き渡る。

脳をグチャグチャに掻き回されるような感覚。

あまりの気持ち悪さに優一は頭を抑え地面に両膝を着く。

あまりの不快感に意識が刈り取られそうになりながらも、ぐっとこらえる優一の耳に

「…めよ…は……て…だ…」

途切れ途切れではあったが、優一の耳に声が聞こえた。

いや、頭の中に直接響いた。

はつきりとは分からないが、まるでテレパシーのような声。

しかも、声だけ聞く限り、少女の声だった。

声が聞こえながらも、頭をグチャグチャにされるような不快感が続

いた。

優一が再び両足でしっかり立ったのはそれから、5分後のことだった。

優一は、ふらふらとした足取りながらも、建物の入り口をくぐり中に入った。

建物の中は窓から入る光の他にはなにも光源はなく、薄暗かった。その薄暗いなかでも、足元に積もる埃の山や、ボロボロなコンクリートの壁は確認できた。

ただ、風化してボロボロになったコンクリートの壁の他に、鋭利な刃物で傷付けられた痕があったり、切り裂かれたテーブルやイスが転がっていて、優一の中では不気味な感じが増していた。

早くここから出たい。

この場から180。ターンをして真っ直ぐ外に飛び出したい、と思った。

しかし、ここには、この建物には、クラスメイトの終夜が居る。自分が家に帰るための手掛かりが居る。

二つの思いがぶつかり、
せめぎ合い、
出した結論は…

「…行くしかないでしょ!!!」
パンパンと両手で顔を叩き気合いを入れた。

そして比較的窓が多く明るそうな部屋に入ろう一歩踏み出した途端。

その部屋の入り口の天井が崩れ通れなくなってしまった。

突然天井が崩れたことに大いに驚きながらも。

自分の上の天井が崩れないことを確認し、ほっと息を吐いた。

しかし、唯一明るそうな部屋に行けなくなってしまったために、真っ暗で少し先も見えないような部屋に入らなくてはいけなくなったため優一は落ち込んだ。

真っ暗闇な部屋が、おいで、おいで、と言っているみたいだった。

優一は震える両膝をポンと叩き、部屋に入ることを決意した。

そして、

(意外と僕って度胸ないなあ)
自分のことを再発見していた。

優一は意を決めて部屋に飛び込んだ。

飛び込んだといっても、恐る恐る一歩ずつゆっくりだった。

…心の中で優一が己の不甲斐なさに泣いていた。

部屋の中は予想通り真っ暗闇で、窓はあるが板で塞がれており、光は差し込まてはいなかった。

部屋に入って直ぐの場所で、優一は思った。

(何か灯りがあればなあ…)

暗闇で目を凝らしても何も見えず。
いつまで経っても目が慣れることはなかった。

「あつ!!」

優一は大声をあげてポケットに手を入れ
あるものを探した。

そして、そのあるものを開きライトを付けた。

今では、ほぼ全員の人が持っていて、最近では小学生にまで普及している携帯電話だった。

明るさ的には明るいと言いつい辛い感じだが、真っ暗闇の中を照らすには十分だった。

「…何なんだ、コレは」

ポツリと優一はことばをこぼした。

優一の携帯電話の灯りは、そこまで高くない天井に向けられていて、そこには、

沢山もの鋭利な刃物の傷と、

真っ赤に染まった天井が広がっていた。

ピリピリと部屋の中に緊張感が充満していた。

携帯電話の微かな明かりを使い、優一真っ赤な天井を見る。

真っ赤とはいっても、その色は軽く黒ずんでいて、まるで、血のよ
うだった。

その天井を見てしまったが故か、優一はその天井から目を離すことができなかった。

しかし、前には進めていた。

「うわっ!？」

優一は間抜けな声を出しながら、視界を反転させた。

反転させられた。

つまり、派手に転んだということ。

「イテテ、一体何が…」

自分が転ぶ原因になったであろう。
躓いたものをケータイの明かりで照らす。

「手」だった。

しかも、人間の。

「っごめんなさい、怪我はないで…」

優一は直ぐに何度も謝る。

だけど、一向に向こうからの返事はない。

「ちょっと、だいじょ…」

優一は手を掴みふつと持ち上げた。

「うわああああ」

「手」は持ち上がった。

しかし、持ち上がったのは「手だけ」だった。

それより先のついているはずのものは一切なく、無惨にも、身体から切り離された「手」だけが残っていた。

優一の顔はみるみるうちに真っ青になり、両膝はガクガクと震えながらも。

その手を見詰めた。

筋肉質な手で恐らく大人の男の手。

その結合部は、鋭利な刃物で刈り取られていた。

だが、1カ所おかしいところがあった。

「血が…出てない…？」

刈り取られた結合部からは一滴の血も出ていなかった。

優一の中である仮説が浮上した。

(これは、良くできたマネキンの手なんかじゃないか?)

その考えが浮かんだ瞬間、安堵の表情を浮かべた。

(そうだよ。これは良くできたマネキンだ)

まったく人騒がせな、と溜め息を吐き、それを持ち上げた。

だが、直ぐにそれを落とした。

「なんで…、なんでっ!!」

優一が持ち上げたその手は。

触った感触は本物と変わらない感触で、手自身が熱を持ち暖かった。

そう、まるで、ついさっきまで生きていたかごとく。

そのことに打ちのめされながらも、優一はその手を奥にある「もの」を見つけた。

見つけてしまった。

「っっ!!」

彼は全力で目を逸らすがもう遅かった。

そこには、バラバラにされた、人であったものが転がっていた。

危険

優一の中にある本能が、

優一の頭にある理性が、

優一の中にある細胞一つ一つが、

優一に危険を知らせた。

ここは危険だ。

今すぐ、ここを離れないと。

その考えが優一の中で溢れ出す。

歩いて来た道を180。ターンをし、ほのかに明かりが見えるこの建物の入り口に走った。

いや、走ろうとした。

しかし後ろから聞こえた轟音に優一立ち止まった。

そして、その音の方向を見た。

壁に大きな穴が開き、むこうの部屋からの明かりが真っ暗なこの部屋に入り込む。

その開いた壁の穴の中に1人立っていた。

1人の少女が立っていた。

恐らく、優一と同じ位の年ぐらいの、

背丈は優一より少し低く、

腰まで伸ばした綺麗な黒髪、

真っ赤なワンピースを着た、

世間一般的にみたら、かわいいと言われてもよさそうな少女。

だが、

腰にはあるものがついていて。

ハサミである。

ハサミはハサミでも、少女の身長と余り変わらない大きさの漆黒の柄のハサミ、刃にはベッタリと血がついていた。

「あなたは…誰？」

少女は優一に尋ねる。

だが、少女の瞳に明かりは灯っていない。

優一は答えない。

否、恐怖によって答えられない。

「あなたも…私を殺しに来たの…？」

両膝はガクガクと震え、頭では逃げると叫んでいるのに身体は全く動かない。

動けない。

まるで金縛りにでもあつたかのようにだった。

「やっぱり…そう…なんだ…」

少女は俯きながら呟く、

そして、腰にある大きなハサミを手に取り

「なら、私はあなたを殺す」

ハサミを構えた。

「だって、まだ…まだ私は…私は…！」

少女は優一に向けて駆け出した。

狂気に満ちたハサミが襲いかかってくる。

狂気の刃が優一の身体を切断するために近づいてくる。

速度としては年相応の少女の走る速度と大差はなかった。

優一が全力で走れば恐らく逃げられる。

剣道で鍛えた動体視力で十分に避けられる。

だが、優一は動かない。

いや、動けなかった。

普段の生活の中では有り得ないような、

狂気に当てられ、

殺気に当てられ、

動けないのだった。

優一と少女の距離がおよそ3メートルのところまで優一は目を瞑った。目を瞑り、次に来る感触に恐れおののいていた。

そして、
「…僕の人生って呆気ないものなんだな」と、自分の終わりを悟り
呟いた。

それから何十秒もの時が過ぎた。
いつまで経っても自分の死の感触はやってこない。

優一は不信に思い、恐る恐る目を開けた。

《紅》

目の前には紅色が広がっていた。
紅はあかでも、血のようなあかではなく、うっすらと明るいあか色
だった。

少し心を落ち着かせ、少し遠目でみる。
よく見ると、それは翼だった。
紅き翼をはやした人の背中だった。

「天使…？」
優一は呟いた。

「違うね」
紅き翼をはやした人は答えた。
声からするに恐らく少年。
しかし、どうかで聞き覚えのある声。

優一はしっかりと少年を見た。

手には紅色のプレートが埋まっているグローブをはめ、

紅の翼を背中からはやし、
優一と同じ学校の制服を着た、

「俺は…バケモノだよ」

クラスメイトである《天城終夜》がそこに立っていた。

第1話 2 (後書き)

ご意見、ご感想をいつでもお待ちしております m ((m

第1話 3

天城終夜は両手にはめたグローブで少女の狂気の刃であるハサミを受け止めていた。

なんで？

優一の中で沢山の疑問が生まれた。

なんで終夜がここにいるんだ？

なんで終夜の背中に翼がはえているんだ？

なんでこの狂気の中で、殺気の中で、普通に動いていられるんだ？

「…なんで、僕を助けたんだ？天城。」

最後の疑問は口に出てしまっていた。

「…なんで？そんなもんないな」

終夜は頭だけこちらを向け、

「誰かを助けるのに理由なんているか？」あっけらかんと、終夜は答えた。

「…それに、助けを求められて助けられないほど俺の心は腐ってないさ」

助けを求める？

優一は助けて、だなんて叫ぶどころか口にすらしてない。

訳が分からなかった。

終夜が喋っている間にも、少女は何かハサミを動かそうとしたが、終夜がしっかり掴んでいたためピクリとも動かなかった。

「わっしょ…」

終夜は少女を見る。

そして、終夜はハサミから手を離れた。

「これから、どうするんだ？」

終夜は言った。

少女は一旦距離とる。

「あなたも私を殺しにきたのね…」

少女は呟いた。

「でもっ私はまだ死にたくないっ！！」

少女は独り思考を勝手に進め、叫ぶ。

「まだ生きていたいっ！！生きていたいっ！！」

少女の叫ぶに呼応するようにハサミが黒いオーラを纏う。

「だから…あなたを…あなたを殺すわ！！」少女はハサミを大きく振りかぶったまま駆け出した。

少女は終夜に近付き、両手で持ったハサミを振り下ろす。

風切り音が聞こえた次の瞬間に轟音が響き渡る。

終夜の周囲に砂埃が舞い終夜の姿を隠した。

さっきまでの少女とは違う。

黒いオーラを纏ったハサミは少女の身体能力を数倍に上げ、人間の力を大きく上回った。

その上回った力の全身全霊で一撃を加えた。

砂埃が晴れていく。

そこに終夜の立っている姿はなかつ…

「その程度じゃ無理だな」

いや、立っていた。

両手をクロスさせその一撃を耐えきった

足元の床はに陥没していてその衝撃を表している。

「俺は…バケモノだからな」

自分に言い聞かせるように呟いた。

その瞳は深い悲しみに包まれていた。

少女は自分の一撃を受け止められたことに驚いたが、

「そのバケモノが一体なんなの？何しに来たの」

少女は敵意を向けながら尋ねる。

「正義の味方…の真似事かな？」

臆することなく終夜は答えた。

その会話のやり取りの間も、終夜の両手と少女のハサミとの押し合いは続けられていた。

「いや…俺の単なる自己満足かもしれないな」

「ふざけないで」

少女が終夜の言葉に被せる。

「自己満足の為にあなたは人を殺すのね」少女からはさつき以上の迫力を纏っている。

「あなたの自己満足に私に死ねと言うのね」

少女の音量が大きくなっていく。

少女の思考の独り歩きも加速していく。

「あの人と同じように…ならば私はあなたを殺す」

少女のハサミから更に黒いオーラが溢れ出す。

「あなたを殺す！！死ねっ！！死ねっ！！死ねえええ」

少女は更にハサミを振り下ろす速度と力を上げて何度も何度も振り下ろした。

何度何度も轟音が響き渡り、多量の砂埃が宙を舞う。

先ほどよりも更に強い力の一撃ではなく
多数も打ち込まれる。

だが、

「バケモノだから…誰かの為に生きるんだ」
嵐のような攻撃を全て受けきり終夜は言う。

「誰かを救ってみたいんだ!!」

終夜は叫びながら振り下ろされたハサミに合わせるように己の拳を
振り上げる。

鈍い金属音と共に少女の身体がふわりと浮き後ろにハサミごと飛ば
された。

受け身がとれるはずもなく。

少女はゴロゴロと地面を転がった。

「天城っお前!!」

半分空気のような存在になっていた優一が終夜に叫ぶ。

少女の心配をしたのではない。

先ほどのいくつもの重い一撃一撃を受けて、両足が血で真っ赤に染
まっていたのだ。

「大丈夫だ、心配するな」

終夜は答える。

そして、

「もう少し俺から離れてる。じゃないと、巻き込まれる」
優一の身体をそっと後ろに押しやった。

「でもっ!!」

優一は叫ぶ。

「黙って下がっててくれ、頼むから」

終夜は弱々しく呟いた。

「もう誰も傷付いて欲しくないんだ」

どこか遠い目をした終夜は呟いた。

終夜の言葉に優一は嫌々終夜から離れた。

「誰も傷付いて欲しくない？ふざけないでよ」

少女はゆらゆらと立ち上がる。

「救いたいのはその人だけでしょう!!その人のために私を殺すのでしょう」

少女は吠える。

「私を殺せばみんな助かるものね。でもね…私だって生きていたいっ!!」

少女はまたハサミを両手で構えて走り出した。

「違うっ!!そういう意味じゃないっ!!」

終夜が叫ぶ。

「違わないっ!!あなたもあの人と同じで私を殺そうとするんだから」

だが、すぐに少女に否定される。

少女は終夜との距離を詰まった瞬間にハサミを振り下ろす。

これ以上の足のダメージは不味いと思ったのか、終夜はハサミを避けた。

何度も何度もハサミを少女は振る。

それをどれも紙一重で避ける。

周りからは何も音はせず、少女の振るうハサミの風切り音だけが聞こえていた。

だが、終夜がずっと避け続けることは無理だった。攻撃の軌道やタイミングはしっかりと分かっている。

だが、足に怪我をしている。足を怪我をしているために徐々にスピードが落ちていた。

一瞬、終夜の顔が苦痛に歪む。

終夜の足が完全に止まる。

その一瞬を少女が見逃す筈もなかった。

ハサミを開き、その刃の部分で終夜に斬りつけた。

少女のハサミはとても強力で、切れ味も半端ではない。厚いコンクリートも簡単に切れてしまう。

例え鉄でも切れてしまう。

そんな強力なハサミを終夜に躊躇いなく斬りつけた。

ハサミが終夜に迫る。

終夜のスキを見事に捉え、振り抜かれたハサミは終夜が避けること

を許さない。

終夜も避けることは不可能だと瞬時に理解した。

鋭い金属音が当たりに響く。

避けられないのなら受け止める。

終夜は自分の手に付けたグローブの手の甲側に付いたプレートで受け止めた。

ただ素直に受け止めるとプレートごと切断される可能性があったから、正確には受け流したに等しい。

少女のハサミは終夜を斬ることが出来ず、宙の空気を切り裂くのみだった。

少女はここぞとばかりに攻め込んで来たために、この一撃で決めるつもりだったために攻撃後の体制は圧倒的に悪かった。

形勢が逆転した。

それも、圧倒的なまでに。

終夜の後ろで見ていた優一は終夜の勝利は確定したと思った。

少女も自分の失態を理解し、目を瞑った。

すぐに終夜の拳が来ると思ったから。

少女の攻撃を全て受けきったあの強靭な拳に自分が貫かれると思ったから。

終夜は、

足を勢いよく踏み込んだ。
そして、拳が少女を捉え…る事はなかった。
逆に少女との距離を取った。

恐らく、終夜の拳一発で少女を無力化することが出来たはずだった。
だが終夜はその決定的なまでのスキを見逃した
いや、わざと見逃したのだ。

終夜の顔には何の迷いの顔もなかった。なんで、攻撃してこ（し）
なかった。

優一と少女の共通の疑問が浮かんだ。

終夜は何度もつま先で地面を叩き足の様子をうかがっている。

先ほどの最大のチャンスを棒に振った事など全く気にしていないようだった。

優一は考える。

見るからに戦い慣れている終夜が素人でも分かるようなスキをつけない筈がない。
かと言って、「女は殴らない」なんて考えるような人間だとも思えない。

優一は終夜の言葉を思い出す。

（誰かを救ってみたいんだ！！）

まさか、終夜は、

「あの子も救うつもりなのか…？」

優一は思わず呟いていた。

でも、それはあってはならない。

何故なら、少女は

優一の近くに転がる人を殺して

優一人を殺そうとして

終夜までも殺そうとしているのだから。

そんな人間救われなくてもいい。

救われる権利もない。

「救う必要なんでないんだよ…天城…」

優一はひっそりと言葉にしていた。

少女は驚いた顔をしていたが

すぐに元の顔に戻った。

「ゆっくり、なぶり殺すつもりなのね？」

少女は呟いた。

「でも、その拳では無理でしょう？」

少女が歪に笑う。

まるで、勝利を確信したかのように。

終夜の両手に付けたグローブのプレートは大きく罅が入っていた。

たった一撃しか受けていないのに、いや、受け流していないのに、

大きくひびが入っていた。恐らく、後一撃であるプレートは粉々に

砕け散る。

少女はそのことを理解していた。

そして、プレートにひびが入っていたから殴れなかったのだと理解した。

つまり、形勢逆転なんてしていなかった。

少女は思わず口端を吊り上げた。

攻撃し続けたら勝てるのだ。

勝利を確信したからである。

(あなたは死んで、私は生き残る)
そう思い込んでいた。

終夜は自分のグローブを見た。
プレートに大きくひびが入っている。

「ああ、確かにこのままじゃ無理だな」

終夜は抑揚のない声で言った。

「けどな、これならどうだ？」

言葉と同時に終夜は拳を力一杯握りしめた。

その時、終夜の拳が輝いた。

まるで、全てを包み込む暖かい光。

そして、その光は終夜のグローブの損傷箇所であるプレートのひびを直していった。

完全に直るまでにそんなに時間は掛からなかった。

少女は驚愕の表情を浮かべていたが

「また、壊せばいい話じゃない」

と、言っていた。

「まだ、続けるのか？」

終夜訪ねる。

「当たり前でしょっ！！私は生き残るの！！」

少女はすぐに叫ぶように答えた。

「…なら、少しくらい本気の出すかな」

終夜の周りの空気が一瞬にして変わった。終夜は周りからピリピリとした空気を放つ。

終夜は少し本気を出す、と言っていたが、

終夜の放つ空気はあまりにも強烈だった。

胸を押し潰さんとする強烈なプレッシャーに優一は膝を着いた。

少女は真っ直ぐ終夜を見ることが出来ず、身体を震えさせていた。

《殺気》

終夜の殺気によってもたらした光景だった。

終夜のことを心配していた優一も終夜に恐怖した。

つい先ほどまでいた同じクラスメートの顔ではなかった。

まるで、たくさんもの戦場を渡り歩いてきた、

「鬼」のようだった。

高校生の、

同じクラスメートの人間の姿をした鬼。

つまり、《バケモノ》だと思ってしまった。

優一も少女も同じような顔をしている。

終夜はこの顔がなんなのか知っている。

その目はバケモノを見る目だった。

終夜の遠い過去に同じような顔をした人達をたくさん見た。

そして、その人達はこう言い放った。

「このバケモノ!!!」

終夜にあの日の記憶が鮮明に映し出される。

(そうだ、俺はバケモノなんだ)

終夜は自分に言い聞かせた。

そうじゃないと、自分の心が折れてしまう。

自分の精神が崩壊してしまう。

(自分はバケモノ、だけど誰かを助けてみたい)

その気持ち一つでここまで来た。

なら、最後までやり遂げよう。

終夜には迷いはなかった

終夜は静かに、そしてしっかりと拳を握りしめた。終夜は拳を握り締め力を込める。

背中に生やした紅の翼が金色に輝き、その光に同調されるように拳が金色に輝き始めた。

まるで、全てを焼き尽くすかのような強い光。

真っ暗な部屋の中にまるで太陽があるような、そんな存在感。

終夜は考えて出た結論はこうだった

(あのハサミにきつと秘密が隠されている)

少女の背はそこまで高くはなく、力があるようにも到底ない。

なら何故少女は自分と背丈の変わらないぐらいの大きいハサミを振り回せるのか？

それはきつと、ハサミに秘密があるから。

終夜はそう考え、

「ならば、そのハサミを打ち砕く、それだけだ」

終夜は聞こえるかわからないほど小さな声で呟き、更に拳に力を込める。

ハサミを破壊することには2つの意味があった。

一つ目は、少女の攻撃の無力化。

唯一の武器であるハサミを破壊することによって攻撃手段をなくす。ハサミさえなければただの少女だ。

戦う力なんてあるわけがない。

2つ目は、少女がハサミに操られている可能性があった。

物に何かが取り憑くと言うのはよくある話で、その持ち主に悪影響を与える。

この場合は、少女が何かの理由でこのハサミに触れ、操られてしまったということ。

つまりハサミを破壊することによって洗脳を解くということだった。

そして、何より少女を傷付けなくて済む。

これが一番の理由だった。

「傷付くのはバケモノだけでいいんだよ」終夜は呟いた。

少女を助けて、俺はさっさと失せよう。

バケモノはバケモノらしく、人間の前から居なくなるう。

終夜は思った。

幸いなことに優一が居るので、少女を助けた後、優一に少女のことを頼もう。

終夜はそう考えた。溢れんばかりの光が終夜の翼と拳から出ている。その光は真っ暗だった部屋中を明るく照らして、隅々までよく見えた。

優一はいまだに動くことが出来ず、少女もまた震えることしか出来なかった。

「もう、終わりにしようか」

終夜は小さい声で言い、一歩前に足を踏み出した。

「…いや」

少女は口をガタガタと震わせながらに言う。

「いや、いやあ…」

終夜はまた一歩近付く。

右手を黄金に輝かせながら

「イヤイヤイヤ」

少女は頭を左右に振り近付かれるのを拒む

少女もあの輝く右手が恐ろしかった。

あの翼が恐ろしかった。

あの、バケモノの少年が、恐ろしかった。

その時、少女の頭の中にある映像が広がった。

「いやあああああ」

少女は絶叫し、ハサミを全開まで開いた。

そして、思いつきりハサミを放り投げた。

ハサミは高速回転を繰り返しながら飛んでいった。

終夜は少女の思いも寄らない行動に驚いた。

だが、避けれない速さではなかった。

終夜は身体を捻りハサミを避ける。

後は、そのハサミの動きが止まった後にハサミを破壊すればいい。

そう考えていた。

その時には

終夜の後ろで、いまだに動くことが出来ない優一のことにもまだ気が付いていなかった。

終夜は避けたハサミの飛んでいく方向を見る。

もちろん、ハサミ破壊するためにであった。
振り向いたその先に、ハサミと、その飛んでいくハサミの進路上に
いる優一の姿が目に入った。

終夜は駆け出す。

だが、スタートが圧倒的に遅かったために、間に合わないことは目
に見えていた。

「傷付くのは：バケモノの役目だつ！！」

終夜の背中の紅い翼が更に輝いた。

優一の目の前に高速回転しているハサミがあった。

そして理解した。

恐らく、少女が終夜に向けてハサミを放り投げて、終夜がそのハサ
ミを避けた。

そしてそのハサミの飛行線上に自分がいたのだと。

コンクリートをも意図もたやすく切断するハサミ。

あんなものが自分に飛んできている。

終夜が自分が次の瞬間にはどうなるのか容易く想像が出来た。

そして、終夜は目を閉じた。

（僕の人生って呆気なかったなあ）

目を閉じた。

次の瞬間に来る痛みに耐えるかのように。

目閉じたのに、目の前にはある光景が広がっていた。

恐らく、ついさっきいた場所と同じ場所。

だが、目の前にはハサミではなく男が1人立っていた。
男は不敵に微笑む。

手には日本刀を持ち、振り上げていた。

そして、狂気に満ちた顔で言った。

「さようなら、お嬢ちゃん」

男は日本刀を振り下ろした。

優一は再び目を閉じた。

しかし、しばらく経っても痛みは来ない。

優一は恐る恐る目を開けた。

そこには、

白一色に塗りつぶされた世界があった。

周りを見渡してみても、何も無い。

白い空間が広がっている。

後ろに何かの気配を感じ優一は振り返った。

そこには、

真っ黒のドレスのような服を纏い

ウェーブがかかった長い真っ白な髪

周りの景色に溶けてしまいそうなほどの白い肌

真紅の瞳を持った

優一よりも2〜3歳ほど年下にみえる少女の姿があった。

「あの、ここって」

「駄目なの、あなたにはここには来てはいけない」

どこですか？と続ける前に少女に言葉を被せられてしまった。

少女は指をパチンと鳴らす。

その瞬間、優一の視界はぐらつき、立っていられなくなった。

「私とあなたは会ってはいけないの」
少女は呟いた。

「だって、私は…バケモノなんだから」

優一の目に悲しそうな顔をした少女がみえた。
目には涙を浮かべている。

優一はその少女の涙を拭おうとしたが、その手が少女の顔に触れる
前に優一は意識を失った。

ベタベタつと顔に何か液体が付く感触で優一は意識を取り戻した。手で拭き取りそれを見た。赤い色をした液体だった。

それが、血液だと気が付くまでにそう時間は掛からなかった。ただどこから飛んできたのか分からず、1人パニックに陥っていた優一は正面に立っている人物に気が付かなかった。

「もち、づき、だ、いじょうぶ、か？」
途切れ途切れの紹介の声。

優一は前を見上げた。
「ぶ、じだな、よかつ、た」
荒い呼吸をしながら終夜が立っていた。

「何が：何がよかつたんだよ！！」
優一は叫んだ。

終夜の肩の辺りから深々と巨大なハサミが突き刺さっている。優一の顔に付いた血液は終夜のものだった。今もなお、その傷口からはおびただしい量の血が流れ出ている。

「これ、で、いい、んだ」
途切れ途切れに言葉を紡ぎ出す終夜。
「傷付、くのはバケモノ、の、俺のやく、めだから、な」

終夜の言葉に優一は愕然とした。
自分がバケモノだから、人間である自分を助けた？

この目の前で意識を保っているので精一杯の、自分と同じ学校のクラスメートを、そして、自分を命がけで助けたくれた少年を、「バケモノ」なんて呼ぶことなんて出来ない。

優一はこの惨状を作り出した少女を見た。少女はガタガタと震えているだけであった。

（お前が…！！）

優一の中で黒い何かが溢れ出した。黒い何かは胸の中でぐるぐると渦を巻き、やがて手に移り更に集まり始めた。

優一は何かをその黒い何かから取り出した。

それは、黒く塗りつぶされた酷く湾曲した一本の剣。

優一は何かに取り憑かれたかのような目で一歩足を踏み出した。その剣は《黒》でできていた。

その剣は何よりも《黒》かった。

その剣から新しく《黒》が生まれ、

全てを《黒》く染め上げていた。

全てを闇に葬る剣。

現に少しづつ部屋の中に闇が広がり始めていた。

ストンと少女は膝を落とした。

身体が動かない。

動くことを許さない。

先ほどの終夜の殺気を当てられた時はまだ動けた。

だが、今回は動けない。

終夜とは比べられないほどの殺気。

ただただ純粹の殺気。

まるで心臓を握られているかのような感覚。

少女はただ、震えることしか出来なかった。

優一の顔からは表情が消え去り、

目は光を失い、濁りきった目をし、

先ほどとは別人でもあるかのように、

人間では有り得ないほどの殺気を放っていた。

右手に握られていた黒の剣の引きずりながら優一は一步前に踏み出す。

黒の剣が通った所は、

まるでそこには何も存在しないように、

存在出来ないように、黒く塗りつぶされていた。

優一の濁りきった目は少女に向けられていた。

ゆっくりとかつしつかりと、

優一は少女に近付いた。

この惨状を引き起こした犯人を殺すために。

この惨状を引き起こした犯人の少女を壊すために。優一の頭の中は黒い感情で覆い尽くされていた。

ヤツヲユルスナ

ヤツヲコロセ

ヤツヲコワセ

そういった言葉で頭が埋め尽くされる。
いつの間にか握っていた剣に何の疑問も持たず、
少女を切り裂くためだけに、優一は一步ずつ近づく。

ある程度少女に近付いたところで優一の身体が止まる。

いや、止められた。

「天城…」

優一は呟いた。

優一の片手を握り、引き止めたのは他ならぬ満身創痍の終夜であった。

優一の目に少し光が灯る。

だが、それは一瞬の事だった。

「その手を離せ、天城…」

低い声で脅すように言った。

「離さ、ない」

相変わらずの声は途切れ途切れだが、強い口調で言った。

「何故だ？ヤツは殺さなければならぬ、ヤツは罪を重ね過ぎたのだ。」

優一の口調が今までとは変わっていた。

そして、先ほどよりも強く言った。

「分かった、んだ。何もかも。だが、らここは、俺にまか、せてくれ。」

終夜はゆっくりとだがしつかりと言った。

「だからなんだ？ヤツはもう許されないのだ。救う価値などないのだよ。」

優一は終夜の言葉を一蹴した。

終夜は優一の手を離した。

そして、

「つつ、うおおおお」

肩に突き刺さったハサミを握り締め、引き抜き始めた。

肩に深々と刺さったハサミが抜けていくと同時に血が止めどなく溢れ出す。

「何をやってるんだ、天城！！」

優一も終夜の突然の行動に慌てふためいた。

そこには先ほどの濁りきった目した優一の姿はなかった。

そして、優一が握り締めていた黒の剣もいつの間にか消えていた。

「ああああああ！！」

優一の制止も聞かず、終夜は一気にハサミを引き抜き、そのハサミを地面に投げた。

終夜の肩からは止めどなく血が流れ、地面に血溜まりを作る。

「なんで、こんなことを…」

優一は先ほどとは別人のような姿で、終夜に訪ねた。

「救う、んだ、何もかも、俺は、そのために、生きて、きた、んだから」

肩で呼吸をしながら終夜は唱えるかのように言う。

「俺は、約束、したんだ、全てを守る、ように、救える、ようになるって」

声は小さいながらもしつかりと響く声で

「だから、ここは任せてくれ」

終夜は言い放った。

優一は言葉が出なかった。

何故他人のためにここまでするのか。

終夜自身を殺そうとした人間までをも何故救おうとするのか。

優一には到底分かることが出来なかった。

終夜がゆっくりと少女に近付く。

少女はまだ身体を震わすのみで動くことが出来ない。
ただ頭を左右に振ることしか出来ない。

そして、終夜は少女の前にたどり着いた。少女は目からは涙が溢れ、
身体を震わすことしか出来ない
声も発することも出来ない。

終夜の右手が持ち上がる。

それに反応し少女はぎゅっと目を閉じた。

そして、終夜は、持ち上げた右手を少女の頭の上に置いた。

「すまなかつたな、もう大丈夫だ。」

少女は目を開き、終夜を見る。

そこにはとても優しい表情をした終夜の姿があった。

そして、終夜は両手で少女を抱き締め

「もう独りにはさせないから、俺がそばに居てやるから」

優しく、優しく少女に言った。少女には何が起こった理解が出来な
かった。

自分を殺そうとし、少女自身も殺そうとした人間に今、抱き締めら
れている。

そして、こう言った。

「もう独りにはさせないから、俺がそばに居るから」

少女は訳が分からなかった

何故彼は優しい表情をしているのか。

何故彼は私を抱き締めてくれるのか。

何故彼は私を救おうとしているのか。

何故彼は、私の苦しみを、理解してくれて、それでいて、一番欲し
い願望を、叶えてくれるのか。

「うわああああ」

少女は泣き出した。

それは、ハサミを振り回していた時の狂気に満ちた顔ではなく、年相応の少女の顔だった。

終夜はひたすら、なだめるように少女の頭をなで続けた。

まるで、壊れ物を扱つかのように、優しく、優しくなで続けた。

しばらく、少女は泣き続けた後、まるで全てを洗い流したような顔をして眠っていた。

終夜はゆっくりと、少女を地面に寝かせた。

そしておもむろに立ち上がり、あるものを探し始めた。

第1話 4 (後書き)

短めでごめんなさいです m ((m

終夜が探しているもの。

それは、この騒動の一番の原因であろうハサミだった。

終夜はハサミを見つけ、手で拾い上げ、少女の近くまで行き、床に座った。

「じゃあ、全てのことを話してくれるか？」

終夜は唐突に切り出した。

優一は何がなんだか分からなかった。
が、すぐにその答えは出てきた。

「いつから、私の存在に気が付いた。」

無機質な男性の声。

その声が発せられているのは、まぎれもないハサミだった。

ハサミが言葉を発している。

目の前に起きた摩訶不思議な光景に優一は目を点にする事しか出来なかった。

「俺の肩にあんたが突き刺さった時だ、そんな時にあらかた、あんたと少女の過去をみたがな」

そんな優一にお構いなしに、終夜は続けた。

「そうだったのか…では、改めて礼を言わせてもらおう
ハサミは続けて

「あの子を救ってもらってありがとう」
そう言った。

「まだそれを言われるのにはちと早い」

終夜は手をひらひらとさせながらそう言つと

「では、過去にこの子とあなたに何が起こったのか教えてくれ」

終夜は頭を下げ、そう言つた。

「…そうだな、そうするとしよう」

少し間を空けてハサミは言つた。

「だが、まずは私の正体を教えよう」

終夜もいつの間にか近くにいる優一もそのことは気になるので素直に頷いた。

「では、単刀直入に言わせて頂く。我は神だ」

ハサミはそう言つた。

優一は隣で「か、神様あ!？」と、驚きの声をあげた。

「神と言えど、たくさん居てな、我は全てを断ち切ることが出来るのだ」

他にも、死を操る神や、幸福を司る神なども居るのだ、とハサミ兼神様はそう言つた。

「んで、なんでその神様がこの子と一緒に居るんだ？」

終夜が少女の方を指差しながら言つた。

少女はよっぽど疲れていたのか、いまだ小さな寝息を立てていた。

「もしかして、この子も神様？」

優一は自分の仮説を立てたが、

「それは、違う」

と、直ぐに否定された。

「その少女と我が出会つたのは、五年ほど前のことだ」

ハサミはゆっくりと過去について語り出した。

とある街にある事件が立て続けに起きていた。

その手口は、人を廃墟の中に連れ込み、バラバラに切断して殺すと言った、残虐かつ冷酷な手口だった。

それも、一度に数人の時があった。

そして、その日がやってきた。

「いやあ、お父さんっ！お母さんっ！！」

少女の声が響く。

少女の目の前には少女の両親だった。「もの」が転がっていた。

そして、その横には男が一人立っている。

その手にはその少女の両親命を奪ったであろう一本の日本刀が握られていた。

その時の少女の声でハサミは目が覚めたのだった。

もともとここは遠い昔に神を奉っていた祠があり、その上に作られた建物だった。

そこで奉られていたのが、その神様だった。

「なんで、なんでこんなことするの！！」

少女は涙で顔をくしゃくしゃにしながらかんだ。

男が少女の方に振り向いた。

「なんでかって？そんなの聞くまでもないだろ」

男の顔が狂気に歪む。

「楽しいからに決まってるだろう」そう、男は殺人狂。

人を殺すことを芯から楽しんでる人間。

人を殺すことに躊躇いのない人間。

自己満足のために人を殺す。

快樂のために人を殺す。

そういう男だった。

「んにしても、つまんねえなあ、もう死にやがった」

男は少女の両親だった「もの」を蹴飛ばした。

「次は、お前かな、お嬢ちゃん」

ゆらりと、男は少女に近付いた。

少女は逃げようとジタバタするが、手足を縄で縛られているため動くことが出来ない。

「やだやだやだあ、誰か、誰か助けてっ！！」

少女は泣き叫ぶ。

その声に神は心揺すぶられていた。

（彼女を助きたい。だが、そんなことをすれば…）

神という地位を失うことになる。

神は力を使つて人間に手を貸してはならない。

そういう法律みたいなものがある。

もし、それを破れば神という立場を失い、違う何かに姿を変えられて長い生涯を過ごさなければならぬ。

神の中で心が揺れている間に、男は少女の目の前にまで立っていた。

「やだあ、やだああ！！」

ガタガタ身体を震わし、
両目からは涙が溢れ、
少女はただ叫ぶことしか出来なかった。

「良いねえ、その声」

男は笑顔で言う。

「でもねえ、お嬢ちゃん、君は死ぬんだよ」

男の顔が狂気で埋め尽くされた顔で日本刀を振り上げる。

「さようなら、お嬢ちゃん」

男が日本刀を振り下ろそうとした瞬間、一瞬時が止まった。
男の身体に沢山の線が走る。

そして、男の身体はバラバラに切り裂かれた。
だが、血は出ない。

少女の目の前に大きなハサミが突き刺さる。

「お前には痛みもやらぬ、その姿で永遠にさまよい続けるがよい」
機会的な男の声が響く。

「と言っても、我に切り裂かれたもの時は止まるのだから」
それは、他にもならぬ、その様子を見ていた神のなれの果ての姿だった。

男の身体を神の力で切り裂いた途端に姿をハサミに変えられてしまったのだ。

そして、自分の力では動くことも許されない、ただの道具になり果てた。

ただ、普通の に比べると大きい。

だが、神はなんの後悔もなかった

「そして、そなた」

ハサミは少女に語りかける。

少女の瞳には光はすでない。

「そなたは、何を望む？」

ハサミは少女に語りかけた。何を、望む…？

少女の頭の中は絶望で染まっていた。

自分は助かった。

自分は助かったのだが、

両親は、もう、この世にはいない。

もう、あの暖かった笑顔も温もりも感じることは出来ないのだ。

誰も、少女の隣にはいない。

存在、しない。

「もう…やだ…」

少女は嫌だった。

独りで生きていくことが、

隣に誰もいないことが、

こんな世界要らない。

独りぼつちで生きる世界なんて要らない。

「こんな世界…もう要らない。」

少女は静かに呟いた

「…そうか、ならば我を手を取れ」

ハサミはそう言う

とても大きなハサミだったが、ハサミを少女が握った途端に少女にハサミの力が多少なりとも宿り、簡単に地面から引き抜くことが出来た。

「我は何でも断ち切るハサミ」

ハサミは続ける。

「そなたは、いったい何から断ち切る？」ハサミは少女に再び訪ねた。

「私は…この世界との繋がりを断ち切る」

少女は静かにハサミを開き、ゆっくりと閉じた。

少女は世界と切り離され、少女の時間が止まった。

ハサミはこの結果に不満はなかった。

きつとこの少女は立ち直ってくれると信じていたから。

だが、思うようにことは進まず。

少女の心は荒れに荒れ、

事あるごとに廃墟のなかで暴れた。

やがては、自分の名前すら忘れ、

世界との繋がりが断ち切りながらも、生きることが渴望した。

死を恐れた。

独りを恐れた。

だがいつまで時が経とうともずっとひとりだった。それから、いくつもの月日が流れた。

少女は、世界から切り離されていたので、年をとらず、成長もせず、あの日と変わらぬ姿のままだった。

ただ、心は違っていた。

独りということの本気で恐れ、

死を本気で恐れ、

少女の心は完全に壊れてしまった。

独りではないと、いくらハサミが言ったとしても、所詮無機物。

少女の心の隙間を埋めることは出来なかった。

そして、少女は一つずつ忘れていった。
最初にこの事件のことを。
次に自分の両親のことを。
最後に自分自身のことを。

そうしなければ、少女は、
少女の心は爆発してしまっていた。

「そして、五年の時間が流れ少年、君に救われたのだ」
そうハサミは話に終わりを告げた。

優一は開いた口が塞がらなかった。
知らなかったのだ。

少女がこんなにも苦しんでいたことを。
少女は何も悪くないということ。

「済まなかった」

謝ったのは終夜である。

「もつと俺が早く気が付いていれば…」

終夜は唇をかみしめた。

「いや、いいのだよ、現に君は彼女を救ってくれたのだから」
ハサミは優しく呟いた。

終夜は随分前から気が付いていた。

この廃墟の中で何かが起きています。

だが、廃墟に入るための予定が合わず、
今日やっと乗り込むことが出来たのだった。

「これで我もやっと眠ることが出来る」

ハサミはそう続けた。これでやっと我も眠ることが出来る

ハサミの言った言葉にすぐに言い返したのは、

「ふざけるな!!!」

他でもない終夜だった。

眠ることが出来る？

なんで眠る必要がある？

なんで、5年もの長い月日を共に過ごして来た、少女と離れられなきやいけないのか？

終夜には理解出来ない。

「我が誤っていたのだ。我がすっかりしていればこんなことにはならなかったのだ」

機械的な男性の声のだけど、そこには悔しさが感じ取れた。

「それに、名前もない神もどきの我と一緒に居てはならぬのだ」

「^{ぜっ}絶、それがお前の名だ」

終夜がいきなりハサミに言い放った。

何でも断ち切る、^{ぜっ}絶つ事から「^{ぜっ}絶」

「今更、名をもらったところで我は所詮神もどきな…」

「そんなの関係ないつ!!!」

終夜は絶に言い放った。

「絶が神だろうがなんだろうが俺は知らない。だかなっ!!!世界とは切り離されていたとしてもこの子と過ごした時間は本物だ!!!」

終夜は止まらない。

「その長い時間過ごしたあんたが居なくなったらこの子はどう思う？」

握り拳を振り回しながら終夜は叫ぶ。

「悲しむに決まっているだろっ！！そんなことも分からないのか！

」

確かに、周りからしてみたら絶は単なる大きなハサミかもしれない。だけど、少女からしてみたらかけがえのない存在なのだ。

ずっと、共に過ごしていたのだから。

ずっと、少女の隣にいたのだから。

第1話 終

「だが、もう無理なのだよ」
ハサミの絶は続けた。

「我は、長い間彼女の負の感情の近くにいた。そして、その負の感情をたくさん取り込んでしまった」

そこで一旦言葉を切る。
そして、

「彼女が我に触れた途端にその溜まりに溜まった負の感情が彼女に流れ込み…」

そこで、2人は息を飲み込んだ。

「恐らく、また暴走してしまっただろう」

絶は機械的な声で真実を言い放った。

「これは、運命なのだ。ここで我は眠り、彼女は生きる。」
優一は何も言えない。

口出し出来ない。

頭が混乱しきっていた。

「幸いなことに、我を破壊し眠りにつけてくれる力を持った者も現れたのだ」

絶の言葉に2人は驚き、2人で顔を見合わせる。

「終夜、君の力で我を眠りにつけてくれ」

終夜の目は点になる。

「気が付いていないのか？ならば説明するしかなさそうだな」

終夜の力は絶の力を上回っている。

その一番の証拠は肩に出来た傷。

普通、絶に切られたものは世界から切り離され、その時間が止まる。

あの優一の見つけた殺人鬼の体のように血を流すことが出来ず、時間が止まる。

だが、終夜は世界の時間から切り離されることなく、肩からは大量の血液が流れていた。

つまり、世界から切り離されてはいないと言ったこと。

そして、第2の証拠は少女である。

普通、世界から切り離されたら眠ることなどない。

何故なら疲労は溜まらず、眠る必要がないから。

少女も今までずっと眠ることはなかった。

だが、終夜に触れられたことによって世界とまた繋がったのだった。

つまり、終夜は絶の力を上回る力を持っていると言ったことになる。

終夜がハサミの絶を破壊する。

つまり、絶を殺すと言ったこと。

「そんなこと出来るわけないだろ！！」

終夜の怒声が部屋に響く。

終夜の力が絶を上回っていることは理解出来ている。

絶の望みは眠りにつくこと。

絶が、この世から消え去ること。

「これは、しょうがないこと、運命なのだよ。愚かな私の運命なのだよ」

絶はあくまでも、静かに言い放った。

優一も暗い表情をしている。

いくら自分が殺されるような思いをした身であっても、少女と絶が別れるのは、悲しいのだ。

そして、この状況の中何も出来ない自分を恥じていた。
(僕にも、全てを変えられる力があつたら)
優一は静かに唇を噛み締めた。

「一つだけ聞かせてくれ、絶」

終夜は唐突に言った。

「お前は、満足なのか？それで良いと思っているのか？」
絶の本心に触れるために。

「だから、言っているだろう。我は居なくなっ」

「そうじゃない。絶は、この子ともう会えなくなって悲しくないのかと聞いているんだ」

終夜は聞きたかった。

絶の本心を、

絶の心の声を、

絶は2、3秒考えた後、

「悲しいと言ったら悲しい。家族同然だと思っていたのだからな。だが、しょうがないことなのだ。」

機械的な声の筈なのだが少し声は震えているように思えた。

「そうか：その言葉だけさえ聞けば十分だ」

終夜は立ち上がり、

紅の翼を一度羽ばたかせた。

そして、震える両足に力を入れ、

怪我した肩からは血を流しながらも、
それを気にする素振りを一切見せず、

終夜は光を集め始めた。終夜の翼が輝き始める。そして、それに呼応するように右手が輝き始める。

「絶、お前は何でも断ち切ることが出来るんだよな？」

終夜は力を溜めながら聞いた。

「あ、ああ、我は何でも断ち切ることが出来る」

絶はいきなりの質問に驚きながらもそう応えた。

「なら…なら何故この子との繋がりを絶とうする?!」
終夜は吠えた。

「しょうがないのだ!!これしか方法がない…こうなる運命だったのだ」
負けじと絶も声を大きくする。

「お前が断ち切るのは少女の繋がりにじゃない。その運命だ!!その運命を断ち切れ、絶!!」
終夜は止まらない。

「お前は少女と別れを悲しいと言った。家族同然だとも言った。俺は…俺はみんなを救いたい。絶、お前もその中の1人なんだ」
終夜は肩で呼吸をする。

その中でも、終夜の翼と右手は輝きを増していく。

「我を救う手立てはあるのか?いくら何でも運命を断ち切るのは我でも不可能だ。」

絶は幾分落ち着いた声で言い放つ。

絶が何でも断ち切ることが出来ると言えど、運命なんて曖昧なものまでは断ち切れない。

「手立てならある。絶が断ち切るのはこの子の負の感情だ」
終夜は自信に満ちた声で言う。

少女の負の感情が絶の中にあるがために、絶は少女と共に居られない。

だが、その負の感情がなければ、また一緒に居られる。絶が死ぬ理由がなくなるのだ。

「それは出来ないことはないが、我から切り離された負の感情は思念体となつて体を得て暴れ出すぞ」

少女の溜め込んだ負の感情はとてつもなく強力で、

その強力な負の感情は思念体となり暴れ出す。

恐らく、終夜が戦った少女よりも遥かに強い。

そして、すぐに周りに居る人間を殺し始める。

「大丈夫だ」

終夜の声響く。

「俺がその思念体を打ち砕く、この右手で」

右手を前に突き出しながらそう言った。思念体を打ち砕く。

言葉にすれば、とても簡単だが、

少女の負の感情はとても黒く、強い。

絶の力を持ってしても、負の感情を完全に打ち消すことは不可能なのだ。

確かに、終夜は絶よりも強い力を持っている。

だが、少女の負の感情を打ち砕く力があるかは分からない。

それほど、少女の負の感情は強力なのだった

「ねえ、絶。」

優一は心配そうな顔で絶に尋ねる。

「もし、失敗したらどうなるの？」

絶対に成功するとは言い切れない。

だから、優一は聞いたかったのだ。

「失敗すれば、思念体は終夜の身体に取り憑き、終夜の身体を完全に破壊するまで暴れまわるだろう。」

「なっ!？」

優一は驚きの声をあげる。

失敗したら終夜は死ぬ。

だが、終夜は

「失敗したら、その思念体と共に俺は死ぬ。お前達には迷惑をかける
ない」

迷いはない目で言い放った。

優一は開いた口が塞がらなかった。

何故、終夜はそこまで必死になれるのだろうか？

何故、終夜は人のために自分の命を懸けられるのだろうか？

何故、終夜は自己犠牲をするのか？

「なん」

「俺はみんなを救いたい。みんなを護りたい。だったら俺はなんだ
つてする」

終夜は優一の目を見て言った。

「バケモノの俺の夢なんだ。みんなを護る、救ってみせるって」

そこで一旦言葉を区切り、

「正義の味方のバケモノになるんだって」

誰かを救うために、

誰かを護るために、

自己を犠牲にし続け、

自分を傷付け続ける。

そして、自分をバケモノと呼び、自分を苦しめ続ける。

英雄にはならない。

あくまでも、バケモノとして生きながらも、

誰かのためだけに生き続ける。

その夢は、あまりにも歪んでいた。終夜の翼を光が溢れんばかりに輝いている。

それと同じように、右手も溢れんばかりの光が出ている。

「我が拳は、誰かを傷付けるためのものではない」
まるで呪文でも唱えるかのように終夜は呟く。

「この拳は、護るための拳、救うための拳」
終夜は右手を突き上げる。

「ならば、今がまさにその時。光よ、我が右手につー！」
突き上げられた右手がさらに輝き、グローブに変化が起き始める。

手の甲にしかなかったプレートが肘の方向へ伸び、肘から下を全て覆った。

そして、辺り一帯を明るく照らすごとく輝いている。

ふーっと一度息を吐き、

「準備完了だ。いつでもいいぞ」

終夜は言った。

今更の中止はさせないと言った目をしていた。

「優一と言ったか、すまんが我を持ってくれ」

急に名前を呼ばれた優一は驚いたが、直ぐに絶を手を取った。

「すまん。」

一度礼を絶は言い、

「一度我を開き、また閉じてくれ」

絶はもう、自分の力では動けない。

ただのハサミになり果ててしまったのだから。

「そして、直ぐこの場から離れてくれ。我々も巻き込まれかねない」
絶は優一にそう伝えた。

優一は初めて絶を手を取ったが、思っていたよりも軽く、優一にでも、簡単に扱うことが出来た。

「それじゃ、いくよ」

緊張を隠しきれない表情をした優一が言う。

そして、ゆっくりハサミを開き、勢いよく閉じた。

次の瞬間、目の前は闇に包まれた。終夜の翼を光が溢れんばかりに輝いている。

それと同じように、右手も溢れんばかりの光が出ている。

「我が拳は、誰かを傷付けるためのものではない」
まるで呪文でも唱えるかのように終夜は呟く。

「この拳は、護るための拳、救うための拳」

終夜は右手を突き上げる。

「ならば、今がまさにその時。光よ、我が右手につ！！」
突き上げられた右手がさらに輝き、グローブに変化が起き始める。

手の甲にしかなかったプレートが肘の方向へ伸び、肘から下を全て覆った。

そして、辺り一帯を明るく照らすごとく輝いている。

ふーっと一度息を吐き、

「準備完了だ。いつでもいいぞ」

終夜は言った。

今更の中止はさせないと言った目をしていた。

「優一と言ったか、すまんが我を持ってくれ」

急に名前を呼ばれた優一は驚いたが、直ぐに絶を手にとった。

「すまん。」

一度礼を絶は言い、

「一度我を開き、また閉じてくれ」

絶はもう、自分の力では動けない。

ただのハサミになり果ててしまったのだから。

「そして、直ぐこの場から離れてくれ。我々も巻き込まれかねない」
絶は優一にそう伝えた。

優一は初めて絶を手にとったが、

思っていたよりも軽く、

優一にでも、簡単に扱うことが出来た。

「それじゃ、いくよ」

緊張を隠しきれない表情をした優一が言う。

そして、ゆっくりハサミを開き、

勢いよく閉じた。

次の瞬間、目の前は闇に包まれた。絶を閉じた瞬間に絶からたくさんの闇が溢れ出てきた。

「早く下がれ望月!!」

その様子に呆気を取られていた優一に終夜が怒鳴り、それで、正気に戻った優一は急いで後退した。

真っ黒な闇は渦を巻きみるみるうちに凝縮され、思念体は人の形になった。

その姿は、少女の姿に似ているが、何もかもが黒く染められている。

終夜は駆け出す。

その闇を打ち砕くために。

完全に取り込まれてしまった終夜の無事を祈ることしか彼らには出来なかった。

終夜は目を開ける。

目の前は真っ暗である。

終夜は自分の翼や右手を輝かせてみせるが、すぐに黒く塗りつぶされてしまった。

ダン、と勢いよく終夜が膝を着く。

カナシイ

クルシイ

シニタクナイ

コロシテヤル

ヤダ

終夜の頭の中に沢山の声が響く。

いくら耳を塞ごうともお構いなしにそれらの声は襲いかかって来る。

(これが、あの子の負の感情の塊)

終夜は理解した。

自分が思念体に取り込まれていることを

そして、その思念体が終夜に少女の負の感情を見せ付けているのだということ。

頭の中に直接叩き込まれる負の感情と少女の過去の映像。

終夜は頭を抑えて転げ回ることしかできなかった。

「アナタに私の感情が理解出来る？」

唐突に響く少女の声。

「私の苦しみ、悲しみ、怒り、痛み、全てが理解出来る？」

終夜はずっと流れる映像と声に頭を抑えながら声のする方を見た。

そこには、先ほどの真っ黒に塗りつぶされた少女の姿があった。

「私はあの子の苦しみ、悲しみ、怒り、痛み、そういった類いを総称したもの」

少女は淡々と告げる。

「あなたは、あの子を救いたいと言ったわね。なら、この全ての闇をあなたはどうか出来るの？」

そこで少女は一旦言葉を切る。

長い間、負の感情に当てられ続けて濁ってしまった目で終夜は少女を見た。

「無理ね。あなたには、この闇を打ち砕くことなんて出来ない。私を打ち砕くことなんて出来ない。あなたは」

「誰も救うことなんて出来ないのよ」

少女を終夜にそう言い捨てた。

ケテ

終夜は少女の話している最中にある言葉を聞いた。終夜は頭を抑えている両手を離し、おもむろに立ち上がった。

聞こえた。

それはとても小さい声だったが、周りの声に簡単にかき消されてしまうほど弱いものだったが、終夜はしっかりと聞こえた。

終夜は背中の紅の翼を一度羽ばたかせた。

そして、光を纏い始める。

「無駄よ」

少女の声が響く。

それと同時に終夜の翼には闇が纏わりつき、黒く塗りつぶす。

が、終夜はそれを超える速度で光を纏い続ける。

「沢山の感情で聞き取りづらかったけど、しっかりと聞こえた」
終夜は翼に纏った光を右手に移す。

光を纏い始めた右手に数滴液体が付いた。

「お前も、助けを求めていたんだな」

終夜の顔は涙で濡れていた。

たった一度しか聞こえなかった。

それも、とても小さな声だった。

だけど、確かに聞こえた。

少女の声で、

《助けて》と。

終夜の目の前にいる黒く塗りつぶされた少女は負の感情の集合体、思念体である。

その思念体の中にもある程度の感情はある。

ほとんどが負の感情で埋め尽くされてはいるが、

思念体は助けを求めている。

この負の感情の渦から逃れたかった。

「そんな訳、あるはずがないっ!!」

少女は、闇の中から大きなハサミを取り出し、終夜に殴りかかる。

鈍い音と同時に衝撃が辺り一面に広がる。

「な、なんで...?」

終夜はそれを頭で受け止めていた。
頭からは血が流れ出ている。

少女のがむしやらに仕掛けた一撃。

終夜であるなら、簡単に防ぐことも出来た。
避けることも出来た。

だが、終夜はそうしようとはしなかった。終夜は頭をハサミで殴られようと、全く動かなかった。

殴った張本人である少女は、未だに状況が理解できていなかった。

その時、終夜の左手がハサミを掴み、頭からハサミをどけ、思念体である少女の手を掴んだ。

そして、

「きゃっ!!」

少女は短い悲鳴をあげ、終夜に抱き寄せられた。

少女は終夜の腕の中でバタバタと暴れるが終夜は離さない。

「大丈夫だ。俺がこの暗闇から出してやる。俺が救い出してやる」
ゆっくりと少女に言い聞かせるように終夜は言った。

少女は、持っていたハサミを落とす。

「俺がお前を照らす明かりになってやる」

終夜はそう少女に言った。

「信じて…いいの？」

少女の声は震えていた。

「ああ、もちろんだ」

その言葉を聞いた少女の安心仕切った顔を終夜は見た。

「後で、お礼してあげるっ！！」

そこには、黒く塗りつぶされた少女ではなく、あどけないあの少女の顔がそこにはあった。

「なら、さっさとここから出るか」

終夜はそう言い、右手を正面に突き出す。

「少し、眩しいから目を閉じとけよ」

終夜は少女に言い、少女は素直に目を閉じた。

そして、一度深呼吸をし、思いつきり右手を正面の闇に殴り込んだ。

終夜の手からたくさんの光が溢れ出し、そして、

「うおおおおお！！」

終夜の叫び声と共に闇に沢山の罅が入り、崩れるように、闇の世界は終わりを告げた。

「ありがとう、私の」

英雄さん

少女の声はおそらく届いてはいない。終夜が思念体に取り込まれて、数十分経った。

だが、以前終夜を包み込む黒い闇は姿を変えずにいる。

「天城…」

優一の悔しさに満ちた声が響く。

黒い闇の球体状の思念体の中は全く見えず、何がどうなっているか分からない。

「ねえ、絶、僕達に出来ることは何かないの？」
終夜は絶に尋ねる。

だが、

「こうなってしまった以上、我らに出来ることは一つもない」
残念そうに絶は言った。

絶でも抑えておくのがやっとだった少女の思念体に終夜は完全に飲み込まれてしまった。

ただ、黙って見ていることしか優一達には出来ない。

「黙って見てることしか出来ないのか」
ダンつと優一は地面を殴った。

(僕にも力さえあつたら…)

そう考えた、その時、
黒い球体に罅が入る。

そこから沢山の光が溢れ出す。

そして、ガラスが割れるような音とまばゆい光と共に、黒い球体は砕け散った。

優一はあまりの眩しさに目を閉じる。

そして、目を開けたその先に、

「天城っ」

終夜の姿がそこにはあった。

ただ隣には、そこに寝ている少女と瓜二つの少女が立っている。

そして、その少女は終夜と一瞬目を合わせ、頷き、寝ている少女に

向け歩み出す。

「いかん、あれは思念体だ」突然の絶の叫び声。

「優一は我であれを斬れ。あの程度なら我でも壊せる」

そして、慌てた絶の声が響く。

絶は言っていた。

思念体が再び少女に取り憑けば、少女はまた暴走する、と。

優一は、その事を思い出し、慌てて絶を握りしめ少女に向け駆け出した。

だが、その前に両手を広げ立ちふさがる者が居た。

天城終夜、そのものだった。

「そこを退くのだ、終夜」

慌てた絶の叫び声が響く。

「そうだよ、あれがあの子に取り憑いたら…っ！！」

優一も終夜に言葉を投げかけるが、途中で言葉が止まる。

終夜は頭からダラダラと血を流していた。

「もう大丈夫なんだ。だから、見ていてくれ」

終夜はそう言い、優一達の前から退く気はないようだった。

そうしている間にも、思念体は少女に近付き少女の身体に触れた。

そして、氷が溶けるように姿を変え、少女の中へ入っていった。

少女の暴走が始まる。

優一達はそう思った、のだがいつまで経っても少女の暴走は始まらない。

いつの間にもやら終夜は自分の鞆を持っており、自分の傷の手当てをしている。

「終夜、一体思念体と何があったのだ？」

絶は優一と共通の疑問を聞いた。

「ああ、そうだな、中で何があったか話すとしよう。」
終夜は、キュッと頭に包帯を結び話し始めた。

終夜が一度、思念体に負けそうになったこと。
少女の負の感情のこと。

そして、思念体は本当は救いを求めていたこと。
負の感情の思念体からただの少女の思念体に変わったことを終夜は話した。

終夜は救いたかったのだ。
それがただの思念の塊だとしても。

そして、終夜は救い出した。
話をしながらも終夜は自分の傷の手当てを続け、話し終える頃にはあらかた手当ては終わっていた。

「さて、と。バケモノはここで退散するとする」
呆然としている優一達にそう終夜は言いつと鞆を乱暴に掴み立ち上がった。

そして、踵を返し、廃墟の出口へ向かう。
その途中で一度優一達の方を向き、

「その子のこと頼むな」
終夜はそう言いつと、再び歩みを進めた。「えっ、ちょっと、天城っ！？」

優一の驚くような声を振り切り、終夜は廃墟の外に出た。

「俺はバケモノだから」
いつの日からか分からないが、終夜の口癖になってしまった言葉。

背中の紅い翼。

常人離れした身体能力。

そして、終夜をバケモノと呼ばれる由縁となった過去の事故。

物心つく前から周りからバケモノと呼ばれ、肉親も全て失った少年は自らをバケモノと呼ぶようになった。

人を避け、一人で生き続けた。

人に関わってはならない。

人に触れてはならない。

俺はバケモノだから。

俺は人間ではないのだから。

「俺も少しは変わることが出来たかな。なあ、兄さん」

終夜の声が虚空に響く。

終夜は何年もの間一人で生き続けた

しかし、一人で生き続ける時間が増せばますますほど終夜の心は死んでいった。

だが、ある一人の人物によって終夜は救われた。

そして、生きる意味を教えてもらった。

夢を教えてもらった。

（俺はこの力で誰かを救う。そのために、俺は…）

その時、終夜の後方から足音が聞こえた。

終夜がその音に気付いた瞬間に終夜の右腕に何か絡み付く。

とっさのことに終夜はバランスを崩し、終夜は仰向けに倒れる。

その終夜に抱き付くように腕に絡みついたものも倒れる。

「つつ、なんだ？」

頭をさすりながら、終夜は抱き付いてくるものを見る。

「なんで…私を一人にするの？」

凜とした透き通る声。

(そうか、目を覚ましたのか…)

「そばに居てくれるって言うてくれたじゃない」

そこには、両目に涙を溜めた、

終夜が助けた少女が居た。

「独りにしないって言ったじゃない。そばに居てくれるって言ったじゃない」

終夜にの上に転がる形で抱き付いた少女は、その綺麗な長い黒髪を振り乱しながら何度も叫んだ。

「もう分かったから、降りてくれ」

終夜が少女にそう言ったもの少女は聞く耳持たず。

「やだやだあ、ずっと一緒なの」

と言い、終夜の上から降りる気配は一向にない。

「あれっ、この辺りから声が聞こえたような気がしたんだけど？」
と、終夜にとっては救いの神様とでも言っても過言ではない、優一の声。

少女の泣き叫ぶ声に、優一も直ぐに終夜の位置を断定できた。

「あ、いたいた、天城、探した…」

そして、終夜を見つけて、優一の動きが止まる。

さらに、優一の背中に背負った絶から痛々しいほどの殺気。

「…失礼しましたっ！！」

優一は両目を塞ぎながら（指の間からバッチリ見ているが）それは見事な回れ右をし、歩き出した。

「ちよつと待て、望月！！」

終夜は全力で叫ぶ。

「そうだぞ、優一。彼奴には一撃食らわせなければ私の気が済まぬ」
怒り心頭の絶の（あくまで人工的な）声。

「違う、これは断じて違う」

終夜の悲痛の叫び声が辺り一面に響き渡った。

それからしばらくの間まともに会話出来なかったことをここに記しておく。

「んで、なんで僕達の前から居なくなろうとしたのさ？」

もと居た廃墟に戻り、優一はそう終夜に切り出した。

勿論、終夜の腕には少女は絡みついて居る。

「そうだぞ、終夜。後、その子から今すぐ離れる」

と、絶は言った。

主に後半部分のほうが強調されていた気がするが。

「だから、絶、これはこの子が……」

とまで続け、終夜は言葉を切り、

「そう言えば、あんたの名前は？」

終夜はそう少女に聞いた。

そうである。

優一も絶も終夜も、誰一人、少女の名前を知らない。

そして、少女も覚えていないと思われるが、一応聞いてみたのだ。

「わたし？うーん、忘れちゃった」

少し暗めの少女の声。

予想通りの答えだった。

しかし、

「だから、終夜が決めて」

ここで終夜に爆弾が投げ込まれた。

「…ムリ。望月パス」

そして、すぐに優一に爆弾をパス。

爆弾を受け取った優一は、

「えっ僕？」

と、驚いていたが。

うーん、とうなり声をあげながら考え込み、少し経ったあと、

「結衣」

とぼそつと呟いた。

「「結衣」がいいんじゃない、今までは全てを切り離して生きていたけど、これからは未来を紡いでいく、結んでいくってことだし」
そう優一が言うと、辺り一面シーンとなる。

その反応に優一が困っていると、

「うんっわたし、その名前がいい」

と、満開の笑顔で少女は言った。

そして、

「よろしくね。優一、絶」

少女、結衣は優一と絶にお辞儀をし、

「これから末永く、よろしくお願ひします。終夜」

と、終夜の腕に再び抱き付く。

「なんか色々間違っているぞ」

と、終夜にでこぴんをもらい、

結衣はうっ、とうなり声をあげながら額を抑える。

本当に間違えたな。

それが、3人の共通に思ったことだった。

そして、それと同時に少女、結衣は本当に救われたのだと言うことを実感していた。「んで、なんで僕達の前から居なくなるうとしたのさ？」

さっきも聞いたようなことを再び聞いた。

今回は、先ほどとは違い結衣は終夜の腕に抱き付いてはいないが、隣に立っている。

終夜は溜め息を一つ吐き、

「だから言っただろう。俺はバケモノだ。バケモノはバケモノらしく、人間の前から姿を消すのが当然だろう。」

終夜がそう言い終わるぐらいに結衣は終夜の腕を引っ張り、

「やだ、私と一緒に居てくれるんでしょ」

と、結衣は言う。

「そうだよ、天城。結衣もこう言っているんだし」

優一も結衣の賛成と言わんばかりに言う。

「結衣については、望月に頼むって言っただろう？それに、お前達は人間、俺はバケモノ、一緒の世界にいるのは不味いだろう。それとも……」

そう言っていると、終夜は仕舞っていた翼をはためかせ、終夜の周りに纏う空気が変わる。

肌突き刺さるようにチクチクと痛く、心臓を握りしめられているかのような圧力。

優一も結衣も膝を地面に着き、肩で息をする。

「この俺が恐くないのか？」

殺気。

終夜の放つ強烈な、

人間離れした殺気に優一達は震えるしかない。

「分かっただろう。俺はバケモノ、人間と一緒にいてはいけない存在なんだ」

終夜はそう言うと、踵を返して廃墟の出口へ向かう。

(これで、いいんだ。俺と一緒に居ればあいつらも蔑まれる)

終夜は唇をきつく噛み絞めながら出口へ向かう。

「待つて!!」

その叫び声と共に終夜は腕を引つ張られる。

「なんだ、結衣。お前は俺が恐くないのか？」

先ほどよりもさらに強烈な殺気を結衣に浴びせながら、終夜は言った。

終夜の腕を掴む結衣の腕は震えている。

終夜を恐れているのは火を見るより明らかだった。「俺のことが恐いのだろう？恐ろしいのだろう？なら、俺と一緒に居ない方がいい」
終夜はさらに殺気を強める。

少女は全身で震えている。

「終夜のこと、確かに、怖い、よ」

少女は震えながら言う。

「なら一緒に……」

「でも!!」

居ない方がいい、と終夜が言う前に、少女が続ける。

「私は、私は!!独りになる方がずっと恐いつ!!終夜と離れる方がずっと恐いつ!!」

その結衣の叫びに終夜は呆気にとられる。

今まで、こんなこと言う人が居ただろうか？

いや、居なかった。だが、

だからこそ、一緒に居ない方がいい。

だからこそ、終夜は巻き込みたくない。

「結衣はもう独りじゃない、絶だって、望月だってい……」

「それに……！」

また、終夜の言葉は結衣に切られる。

「終夜だって、独りは嫌でしょう。だから、だから、一緒に居てよ」

結衣の目からは大量の涙が溢れている。

結衣は耐えきれず地面に座り込み、嗚咽を繰り返す。

「でも、俺は……」

「もう諦めなよ、天城」

いつの間にか、隣に居た優一にそう言われ、

「確かに、天城はバケモノなのかもしれない。でもね、僕達にして

みれば、命の恩人以外何でもない」

優一はそう言うのと、

「それに、僕は君と友達になりたい」

と言い、右手を差し出す。

「僕と友達になってくれ、終夜」

優一は初めて終夜を名前で呼んだ。

終夜には訳が分からない。

少女には目の前でもものすごい勢いで泣かれ、かたやクラスメイト以外何でもなかった奴からは友達になってくれと言われて。

（俺はこいつらと居ていいのか？兄さん）終夜は上を見る。

終夜の瞳から一筋の光が流れる。

その時、終夜の両手が握りしめられる。

そして、

「握手したから、今から友達だからな」

と、優一に言われ、

「もう、ぜっだいにはなざないんだから」と、鼻声の結衣に言われ、

「ああ、もう！！分かったよ」
終夜は上を向き泣いて居ることを必死に隠す。
それと同時に、
(ぜっだいにこいつらは守ってみせる)
と心の中で呟いた。

空には沢山の星が瞬いていた。

第1話 エピローグ

「それで、結衣をどうする？終夜」

また、先ほどまでいた廃墟に再び戻り、何故か終夜が持っていたラントンを囲むように座り、優一は終夜に訪ねた。

「どうするって言うてもな。結衣は自分の家の場所忘れてるだろうしな」

結衣はうんうん、と頷く。

もし、結衣が覚えていたとしても、それは五年も昔のことなので、恐らくもうその家は存在していないと思うが。

「かと言って、結衣と絶だけじゃ生きていけないだろうし」

今の時代、成人にもなっていない少女が部屋の借りることなどは不可能に近い。

「はい、良い考えが私浮かんだの」

結衣は勢いよく手を挙げる。

そして、

「私が終夜と一緒に暮らせば良いじゃない」

結衣は目をキラキラ輝かせながら、そう言い放った。

「終夜、終夜って家族居る？」

優一は数秒の沈黙の後、そう切り出した。

「いや、俺は独り暮らしだが…ってちよ」

「なら、結衣の考えでいいんじゃないかな」

優一は終夜の言葉を切りながら、結衣に言う。

それを聞いた結衣は

「やったー」

と、叫びながら喜び跳ねている。

「ちょっと待て。俺はまだいいとは言っていないぞ」
終夜は慌ててそう言う。

その言葉を聞き、少女は動きを止め

「ずっと一緒に居てくれるって言ってくれたじゃない」
両目に涙をたっぷり溜め、終夜に懇願する。

「そうは言ったけどな。年頃の女の子がそう言うことしないほうがいいと……」

「なら、他に良い案が終夜にはあるの？」再び、終夜の言葉を切りながら優一は言った。

「まあ、僕は家族と暮らしてるから無理だけどね」
と、さらに続けた。

しばらく、終夜は考え込みそして、

「だあああ、分かった俺が面倒をみてやるよ」

観念したかのように終夜は言った。

結衣は満面の笑みを浮かべ、

「わ〜い、終夜大好きい〜」

と言いながら、終夜に抱きついた。「勿論、我も共に暮らさせてもらおう」

絶も若干、苛々を押し隠しながら言う。

終夜は絶の苛々に戸惑いながらも

「そうだな、絶には色々教えて貰いたいしな。俺の力についてや、
と、ここで一旦言葉を切り、絶に近付き小声で

「望月の《あの》力についても」

それながらも真剣な声で言った。

優一の《あの》力

結衣の投げたハサミが終夜のハサミが突き刺さった時に、いつの間にか優一の持つていた黒い、湾曲した剣。

何もかもを、闇に染め、闇に飲み込み、絶対的な存在を放つ剣。

それをどこからか優一は取り出し、握り締めていた。

その時の優一は今の姿とはかけ離れていて、とても強烈な殺気を身に纏い、目標物を闇に葬り去る、そんな顔付きだった。

「すまないが、《あれ》については、何も分からぬ。あのようなのは我は一度もみたこともない、聞いたこともない」

絶は小声で終夜に言った。

「そうか…」

終夜はそう言い優一を見る。

優一本人は《あの》力については何一つ覚えていなかった。

「うん？僕の顔に何か付いてる？」

優一は終夜の視線に気付き終夜に聞いた。

「いや、何でもない」

終夜はそう言い、天井を見上げた。

(望月には教えられないな)

終夜は心の中でそう思った。

優一の《あの》力が目覚めて欲しくない。

優一には普通の人間で生きていて貰いたい。

優一にはこちら側の存在になっただけほしくない。

(《バケモノ》は俺ひとりで十分だ)

終夜はそう心で唱えていた。終夜は心に唱えていた時から、終夜自

身の身体をペタペタ触る存在に気付く。

「で、お前は何をやっているんだ？結衣」

終夜の身体の主に頭、肩、足を触っている結衣に終夜は聞いた。

「えっと…私が怪我させた所を確認しているの」

と、結衣は悲しそうな顔をしながら言いました。また終夜を触り始める。

結衣は後悔し、それと同時に心配でいる。

結衣が終夜を傷付けたのだから

「そつだよ、終夜、怪我は大丈夫？」

優一は急に心配そうな顔で終夜に聞いた。

終夜は自分の身体を触る結衣の手を握り、触るのを止めると、

「もうだいたいの処置は済んでるから大丈夫だ」

終夜はそう言い、包帯で巻かれている肩をポンツと叩いた。

「ホントに？」

「ああ、本当だよ」

終夜は、心配そうな顔で終夜を見る結衣の頭をくしゃっと撫で、そう言った。

「でも、あの出血量だよ？流石に不味いんじゃない？」

それでも、優一は終夜に聞いた。

優一は終夜の怪我を間近でみていてその傷の深さなども知っていた。肩の傷にいたっては、下手をすれば生死に関わるほどの傷。

優一は終夜が強がっているのだと思った。

「いや、大丈夫だ。俺は人一倍怪我の治りが早いんだ」

終夜はそう言うとおもむろに頭の包帯を取り、傷口を結衣と優一に

見せる。

優一と結衣の息の飲む音が聞こえる。

それもそのはず、終夜の頭の傷は殆ど塞がっていたのだ。

「俺は昔から一晩寝ればどんな傷も怪我も完治するんだ」

終夜はそう言い、頭に包帯を巻き直す。

超再生能力

終夜のバケモノの力の一つであった。終夜の頭の包帯が巻き終わると共に

「んじゃ、そろそろ帰るとするか」

終夜はポンツと頭に巻いた包帯を叩き、そう提案した。

「そうだね…って今何時？」

外はもう完全に日が暮れていて、大きな月が地面を照らしている。

「だいたい11時ってとこかな。って望月どうした？」

その言葉を聞き、顔が真っ青になる優一。

「うん、直ぐ帰ろう。直ぐに帰りましょう」

早口に一気に言い終える優一。

額は汗で濡れている。

(親に連絡入れるの忘れてた…やばい…)

優一は親と一緒に暮らしている。

こんなにも遅い時間まで連絡もせずには帰らずにいることは、優一に

とつていい状態とは言えない。

しかも、優一の携帯電話はずっと圏外になっており、今なお家に連絡する事ができない。

なので、少しでも早く家に帰りたかった。

「そうそう、早く家に帰る〜」

片手を上に突き上げ結衣も賛成した。

結衣にとっては、《家に帰る》と言う行為が凄く懐かしく、その嬉しさをいっぱいなのだ。

「そうだな、で、」

終夜も賛成した。

だが、その言葉の後で、

「街つてどっちに行けばいいんだ」

とんでもない爆弾を投下した。

「ええつ終夜、ここがどこだか分かってないの!？」

優一の驚いた声。

勿論、優一も森の中をさ迷ってようやくこの場所に着いたのだからここがどこだか分からない。

「私なら知ってるよ」

ここで、救世主と言っても過言ではない結衣の声。

五年前に彼女はここに連れてこられたのだが、その時に目隠しなどされてなかった為、ここがどこだかだいたい分かっているのだ。

「ホント!?良かった〜」

優一はホッと胸をなで下ろした。

それと同時に一つの疑問が浮かぶ。

「どうやって終夜はここまで来たの？」

ここがどこだか分からないのに何故終夜はここにこれたのか。

「そんなの簡単だ。気の流れがここは乱れていたからな」

堂々とした顔付きで終夜は言った。

「……どこの戦闘民族だよ」

優一は小さな声で言った。一つの一軒家の前に少年が立っている。

普通高校生少年こと、望月優一である。

そう、ここは優一の家である。

なんとか結衣の道案内で街へ帰って来ることができた。

そして、少し前に終夜達と別れ、家の前にいる。

時計の針はてっぺんを指しており、高校生が帰ってくる時間にはちよっと遅過ぎる。

優一は怒られるだろうと分かっていたので、少し身構えながら帰ってきたのだが、

(あれっ？電気が消えてる)

優一の家の中は真っ暗であった。

(もしかして寝てる?)

両親が寝ている。怒られないで済む

という方程式が頭に浮かび、優一は軽くガッツポーズを決めた。そして、両親を起こさないようにそっとドアを開けた。

ゆっくり、玄関に入りドアを静かに閉め、玄関の電気を点ける。靴を脱ぎ顔を正面に向ける。

そこには、《鬼》という言葉がよく似合う母親の姿があった。

「人間思うようにいかないものだね」

優一がこつてり絞られたのは言うまでもなかった。

「たっだいま」

結衣の嬉しそうな声がアパートの一角に響く。

「はいはい、夜遅いから静かにな」

終夜は結衣の頭をポンツと叩き言い聞かせる。

ここは所変わって終夜の家。

結衣は5年もの間、あの廃墟で独りとハサミで暮らしていたので、新しい自分の家が出来たことがよっぽど嬉しかったのか、結衣の頬は緩みぱっなしだった。

「んじゃ、飯作るからちよつと待って…っでどうした？」

終夜は結衣がずっとニコニコしているのを不思議に思い、結衣に聞く。

「んつとね、何だかとっても懐かしくて嬉しいの」

結衣の昔の記憶、両親と一緒に暮らし、笑いあっていたときの記憶と喜び、

その喜びを再び味わうことができ、とても嬉しいのだった。

「そうか…それじゃ少し待っていてくれ、直ぐに飯作るから」

終夜はそう言い、キッチンへ向かった。それから終夜と結衣は遅い晩御飯を取った。

その時、

「ナニコレ、美味しすぎるよお！！」

と結衣が絶叫していた。

終夜は小さい頃から1人で暮らしていたため自然に料理や掃除、洗濯、家事全般の作業が身に付いており、中でも料理が抜きん出てい

た。

ちなみに、出した料理は、昼に食べ残した（終夜は昼ご飯を食べてから廃墟に行った）ご飯で作った炒飯だった。

「そうか？このぐらいなら誰でも作れると思うぞ？」

ちなみに終夜は外食を全くしないので、終夜自身、自分の料理がどれほどのものか分かっていない。

終夜の料理がそこら辺りの料理屋よりも美味しいことを終夜は知りよしもなかった。

それから勢いよく結衣はご飯を食べ終え、レンゲを皿の上に置いた。その時、レンゲと一緒に一筋の雫が落ちる。

終夜は急に動かなくなった結衣が心配になり、

結衣の顔を覗き見る。

結衣は大粒の涙をこらえ、下を向いている。

「どうした？」

終夜は心配そうな顔で結衣に聞いた。

「ううん、私、もう独りじゃないんだって思って、それがとってもとっても嬉しくて嬉しくて、でも、」

そこで、一旦言葉を切り、終夜の顔を見て、

「嬉しいのに、涙が止まらないの」

そこまで言うと結衣は大泣きし始めた。

結衣は、両親からもらった愛情もぬくもりも全て忘れてしまった。

それを、結衣は思い出し始めたのだった。

「そうか…」

終夜はそう言うと立ち上がり、タンスに向かいタオルを取り出し、結衣に向かって放り投げ、

「…嬉し涙なら沢山流して良いからな」

そう言うと、食べた皿などを洗いにキッチンへ向かった。

結衣はしばらく泣き続けていた。終夜はすでに風呂の準備をして、結衣、終夜の順で風呂に入った。

終夜がずっとひとり暮らしたため、女性物の服を持っているわけがなく、結衣の服がない、という問題が発生した。

が、今日のところは少し大きい終夜の服を着てもらい、明日、買いに行くということで解決。

そして、何故か満足そうな顔したまま終夜ののベットで寝ている。何故、満足そうな顔をしていたのかは、結衣にしか分からない。

終夜は結衣のとは違う部屋に布団を敷いたのだが、眠らず、布団の上に乗って絶を握りしめている。

「絶、俺の《力》について知っていることだけでいいから教えてくれ」

終夜は自分の力について分からないことが多い。

なので、人間とは違う存在に位置する絶なら自分の力についてなにか知っているかも知れない。

そう思い、終夜は絶に切り出した。

勿論、結衣には聞かせたくない、聞かせられない。

結衣には普通の人間として生きてほしいから、あまり首を突っ込ませたくない。

なので、結衣が寝たのを見計らって終夜は切り出したのだった。

「あくまで、私の推測の話なのだが、」

そう絶は動かない口を動かした。

「終夜の《力》は恐らく、我々と同じ類いの力だとは思っているのだが、

我々《神》と言われる存在の中でも上位に当たる存在なのではないかと思われる」

無機質な声で絶は淡々と告げる。

終夜はある程度は予想していたのだが、驚きが隠せなかった。

自分の《力》が《神》達の力の中でも上位に存在していることなど考えていなかった。

だが、その後につけられた言葉はさらに驚愕させるものだった。「そして、その《力》は恐らく、まだ完全なものではない。まだ、終夜の《力》は完全に目覚めてはいない」

終夜は一瞬理解が出来なかった。

まだ終夜の《力》はまだ目覚めきっていない。

それは、終夜にはさらなる力が眠っていること。

さらに、終夜を《バケモノ》に近付ける、決定的なものであった。

「なんで、そう思うんだ？俺の《力》が目覚めてからずっと変化なんてなかったぞ？」

終夜は物心つく前から《力》が目覚めており、今までその力に変化などはなかった。

「終夜の背中にあった紅い翼。だが、その《紅》は本当の色ではない。本当の色に輝く時、終夜の力は完全なものになる」
絶はしっかりと告げる。

「そうか…俺はさらに《バケモノ》に近付くんだな」
終夜はそう言い、天井を仰いだ。

「確かに、終夜の中にはまだ力が眠っている。だがな、」

絶は言い聞かせるように、そつと言った。

「その《力》を使うのは、終夜だ。そして、その《力》は使い方によっては《バケモノ》にも《正義の味方》にもなれる。そして、終夜、お前は後者の存在になれる。我はそつ、信じておる」

これは絶の本心である。

終夜は現時点でも強過ぎる力を持っている。

だが、その力に囚われることなく、力を乱暴に扱う訳でもなく、誰かの為だけに力を使う。

そのような人間が《バケモノ》になることはない。

絶はそう思っている。

「…ありがとな、絶」

終夜はそう言々と絶の壁に立てかけ終夜は布団に入り目を閉じた。

(それでも、俺は…)

よほど疲れていたのか、終夜の意識はいとも容易く闇に落ちていった。

終夜はしっかりと寝息を立てている。

その横に座って居る人物が一人。

絶も眠っているのかその存在に気付かない。

そして、その一人の頭の影が終夜に近付き…

終夜と唇を重ねた。

「遅れちゃったけど、《お礼》は忘れなかったからね。」
少女の声がひっそりと響き、直ぐに少女は立ち上がった。

そして、

「それじゃあ、おやすみなさい。私の《英雄》さん」
少女はそう言い、部屋から出て行った。

終夜も絶も知らない一つ約束が果たされた瞬間だった。

第1話 エピソード(後書き)

なんだかんだ、第1話終了です(´・`・´)
今までお読み頂きありがとうございます
これからも宜しくお願いしますm(´`´)m

…あと、感想と批判いつでもお待ちしております

目を開けると目の前は真っ白な空間だった。

「ここはどこだろう?」

優一は思わず呟いた。

周りを見渡しても真っ白な空間がどこまでも広がるばかり。

しかし、優一は思い出す。

ここには一度来たことがある。

絶が見せた結衣の過去の映像の後に辿り着いた場所。

突如、優一の後ろから嗚咽が聞こえた。

声からするに恐らく《あの》少女。

真っ白な肌に真っ白な髪、紅の瞳の謎の少女。

嗚咽は徐々に大きくなり、しまいには少女の泣きじゃくる声に変わる。

優一は声のする方向へ向かった。

少女の服が真っ黒なこともあり、すぐに少女を見つけることができた。

少女に優一が近付くが、少女は泣きじゃくっているため優一に気が付かなかった。

「どうしたんだい?」

優一は後ろから少女の頭に手を置き話しかける。

その瞬間、少女はビクッと跳ねたが、優一の顔を見て驚愕の顔をした。

「なんで、あなたが…」

少女は消えそうな声で呟いた。

「えっと、気が付いたらここにいたんだ。…じゃなくて、一体どうしたの？」

優一は少女の顔に流れる涙を手で拭いながら言った。

「あなたとは出会ってはいけないのに…あなたとは関わってはいけないのに…一体どうしたらいいの？」

少女は天を仰ぎながら再び涙を流し始めた。

「わっわっ、ちょっと泣かないで」

優一は慌てながら、少女の涙を拭う。

そして、少女の涙が止まったところで、

「なんで、僕と出会ってはいけないの？」優一はそう切り出した。

少女はズズツと鼻噤ると

「だって私は《バケモノ》なのだから」

どこかで聞いたことある言い回しでそう少女は呟いた。

「バケ…モノ…？」

優一は思わず、少女の発したそのワンフレーズのみを繰り返してしまった。

「そう、私は《バケモノ》なの。だから人間のあなたとは出会ってはいけないの。関わってはいけないの。」

少女の紅い瞳にまた大粒の涙が溜まる。

「ううん、駄目だよ、自分のこと《バケモノ》なんて言っちゃ。」

優一の目の前に居る少女は肌が真っ白なことと紅の瞳以外は至って普通の人間に見えた。

「君は《バケモノ》なんかじゃないよ。…君の名前を聞かせてもらえる？」

優一は少女の瞳に溜まった涙を拭いながら少女に尋ねた。

「…ない」

「えっ…」

優一は思わず息を詰まらせた。

「そんなのないの。私は存在しない。両親も存在しない。存在してはいけない《バケモノ》なのだから」

少女は悲しそうにそう言っていると、少女はまた泣き出してしまった。

優一は困ったような顔をしたが、すぐに何かを決心した表情になり、少女の顔を両手で掴み、優一と少女が向き合う形になる。

「なら、僕が君に名前をあげる。…サクヤ、君の名前はサクヤだ」

優一はそう言い、さらに続けた

「《闇》の切り《裂く》真っ白な女の子だから、《裂く》と《闇》をくっつけて裂闇^{サクヤ}だ」

優一はそう言っていると、うんうんと頷く。

「でも私はバケ」

「バケモノじゃない。君はサクヤだ」

少女の否定させる間もなく、優一は続けた。

「《バケモノ》だなんて言わせない。そんなの僕が認めない」

優一は強く、強く、少女に言い聞かせるように言った。

途端に少女は大粒の涙を流し始めた。

「えっ、もしかして、名前気に入らなかった。」

優一は慌てた顔で少女に聞いた。

「私が…名前なんてもらっていいの？」

少女はそう眩き、優一の顔を仰ぎ見た。

優一は優しそうな顔で、

「当たり前じゃんか、君は《バケモノ》なんかじゃない。君は今日、いや、今この時から《サクヤ》だよ」

優一はそう言つと、小さな少女の身体を抱き寄せた。

少女、《サクヤ》は優一の胸の中で大きな声を挙げ泣いた。大声で泣き続ける少女、《サクヤ》を抱きしめながら、優一は思う。

自分のことを《バケモノ》と罵るからには理由があるはず、
終夜だつてそうだった。

人よりも強い力を持ち、背中には人ではないものを、《紅い翼》を生やしていた。

しかし、優一の目の前に居る少女には何ら不思議なところは見当たらない。

不思議なところを強いて言えば、
肌と髪が白すぎるくらい白く、瞳が紅いところだけだった。

(じゃあ、なんで…?)

優一が考えている間にサクヤはいつの間にもやら泣き止み、優一の顔を覗き込んでいた。

優一は少女と目が合い、

一体どうして自分のことをバケモノなんて言つたの？

なんて、言いそうになったが敢えてその言葉を飲み込み

「此処は一体どこなんだい？」

と、見当違いなことを言った。

《バケモノ》ワードを今はあまり使いたくなかったのだ。恐らく、その言葉を使えばまたサクヤは泣き出してしまう。優一としても、彼女に泣かれることは嫌だった。

それにあながち見当違いな話でもなかった。

優一はこの場所を知らない。

此処がどこなのか見当も付かない。

前来た時は気が付いたら意識を失い、元居た場所に戻っていた。なので、この場所に住んでいるであろう彼女、サクヤに尋ねてみたのだった。

「此処はね、えっと…優一と私の精神世界って感じかな。」

「えっ？」

優一の頭に「？」が沢山浮かぶ。

精神世界なんて言葉は聞いたことがない。どんなものかもしれない。

「それって一体…」

「それとね、」

優一の発言はサクヤにかき消される。

「私は此処からは自分の力じゃ出られないの」

彼女はそう言い、再び俯いた。優一の頭は混乱していた。

目の前に居る少女、サクヤが何を言っているのか理解できない。

なので、優一は困ったよう顔でサクヤの顔を見ることしか出来ない。

「出れないも何も、もともとここは優一だけの世界で、私が勝手に居るだけなだけどね。そして、もう、自分の力じゃ出られないの」
サクヤは俯いていた顔を上げ、困ったような顔で答える。
サクヤの両目には再びうつすらと涙が浮かんでいた。

「ねえ、サクヤ。ちょっと聞いてもいいかな？」

優一は真っ直ぐ顔を見据えてこう言った。
分からないことが多すぎたので、ひとつずつ片付けることにしたのだ。

「ええっと、うん。いいよ。」

サクヤはうつすら溜まった涙を拭き取りながら言った。

「サクヤ、君は一体何者なの？」

優一がそう聞くとサクヤの顔が強張った。

そのサクヤの反応に優一は直ぐに気付き、

「バケモノとか、そういう問題じゃなくて、サクヤのこと、何も知らないからさ。サクヤのことを知りたいって思ってね」

優一は優しく微笑みながら訂正した。

その言葉を聞き、サクヤは直ぐに顔の強張りは消え失せ、

「そうだよ。私のこと何も優一は知らないもんね。分かった。私のこと全部話すね」

サクヤは優一の前に上品に座り込んだ。

優一をサクヤにつられ、サクヤの目の前に胡座をかいて座り込んだ。

そして、サクヤはゆっくり語り出した。「私は、何もないとこから生まれたの。そして、私の中にある《力》は巨大すぎたの。その力を恐れた《ある者》は私は精神世界に閉じ込められた。」

とても、優一には信じられる話ではなかった。
とても目の前に居る少女にそんな危険な存在には思えなかった。

「そして、私は生まれてすぐに誰かの精神世界に閉じ込められたの。そして、その人の命が燃え尽きるまで私はその人の精神世界に閉じ込められる。そして、その人の命が燃え尽きる時、私はまた違う人の精神世界に飛ばされて、その精神世界に閉じ込められる。それのずっと繰り返しで来たの。そして、優一、あなたは159番目の人なの。」

優一は衝撃を受けた。

目の前に居る、明らかに自分より年下に見える少女が自分より遙かに、いや、考えられるのが馬鹿らしいほど年上であることに。だが、ひとつの疑問が浮かんだ。

「でも、さっき誰かの力を借りれば出られるようなこと言っただけだった？」

そうなのだ。

先ほど彼女は「自分の力では出られない」と言った。
つまり、誰かの力を借りれば良いということ。

「あつもしかして、とても強い力がないといけないことだった？」

サクヤは巨大すぎた《力》のせいで、精神世界に閉じ込められた。
つまり、そこから出してあげるためにはそれよりも巨大な力が必要だということ。

だが、サクヤから返ってきた返事は、優一の考えとかけ離れていた。

「ううん、そんなことないよ。寧ろ誰にだって出来るよ。もちろん、優一にだって出来るよ。それはとつても簡単なこと」「サクヤはそこで一旦言葉を切り、優一の瞳を真っ直ぐ見る。

「私の両手を握って、あなたが付けてくれた私の《名前》を呼んでくればいいの」

「…えっ？」

思わず優一は声を出してしまった。

優一が考えていたのとはかけ離れていたからだ。

「たったそれだけなの？」

優一はサクヤの言葉を信じることが出来ない。

先ほど彼女は、自分の力が巨大すぎたため閉じ込められたと言った。

ここからサクヤが出る方法も簡単だとも言った。

だが、あまりにも簡単すぎる。

出る方法がこれでは簡単にサクヤは出れたはずだ。

「それだけだよ」

サクヤは間髪入れずに頷いた。

サクヤの目には何の迷いもなく、疑う術ももつない。

なら、優一が出来ることはひとつ。

「なら、さつさとここから出よう。さつ両手前に出して」

優一はサクヤを早速両手を前に出して、サクヤの両手が出てくるのを待った。

だがなかなかサクヤの両手は出てこない。

いまだに、サクヤの横に握り拳を作って置いたままだった。そこで優一はサクヤの顔を覗き見る。サクヤはぐっと下唇を噛み締めて俯いている。

「えっ？どうかしたの、サクヤ？」

優一は声をかける。

その声にサクヤは身体をビクつかせながらも優一の顔を見た。そして、

「…もし、辛くなったら直ぐに手を放してね、そうすればきっと無事だから」

そう消えそうな声で言うと、サクヤはおずおずと両手を優一の前に出した。

「それってどういう意…まあいいや。んじゃ早速始めるよ」

優一は一瞬、サクヤの言った言葉に疑問を持った。

ただサクヤの両手を握って、名前を呼ぶだけなのだから何の危険もないはずなのだ。

なので、優一は何の躊躇いもなく、サクヤの両手を握った。

いや、《握って》しまった。真っ白な空間でドンツと音を立て、尻餅をつく人が1人。

全身に汗を掻き、肩で息をしている。

それは、紛れもない、優一だった。

「…な、にいま、の？」

息も絶え絶えに優一は視線をブレさせながらおもむろに口にした。

「やっぱり、優一でも無理なのよ」

サクヤはそう言うと両手で目を押さえ泣き出してしまった。

それは優一がサクヤの両手を握った瞬間に起こった。
サクヤの両手を握った瞬間優一の視界からサクヤが消える。
そして、優一の身体に異変が起こった。

右目に映る世界は明るい、いや明るすぎる真つ白な光に照らされ続ける。

そして、左目に映る世界は、先ほどの世界とは真逆の世界。

《黒》が覆い尽くされていた。

一寸先も見えない真つ暗闇。

優一の両目が別々の世界に放り込まれたような感覚。

そのそれぞれ別々の世界で、優一は両手を見た。

右手はその光に焼かれ燃えていた。

左手は闇に溶かされていた。まるで、アイスが溶けるように。

そして、沢山の感覚が頭に叩き込まれる。

痛い、苦しい、暑い、寒い。

それぞれ別々の感覚が次々に頭に叩き込まれ優一は悲鳴を上げながら後ろに倒れた。

そして、冒頭部分に戻る。

優一は理解した。

恐らく、この《現象》のせいでサクヤは出ることが出来ないのだと
いうことを。

そして、両手を握る前に言ったサクヤの言葉の意味を。

サクヤは両手に目を当て泣きじゃくる。

この前も、その前も、ずっとずっと前も、何人もの人がサクヤの前に現れてくれた。

そして、ここから出してあげるといい、サクヤの両手を握る。

その結果は失敗に終わる。

そして、サクヤをバケモノと罵り、逃げて行く。

そう言った人々を沢山見てきた。

なので、サクヤは自分を《バケモノ》だと理解していた。

だが、またも目の前に居る優一に期待してしまった。

今まで出会った人々とは少し違った少年、優一なら出来るかもしれないと思った。

だが、結果は同じ。

そして、その後にもまた《バケモノ》と呼ばれるとサクヤの頭に浮かんだ。

「お願い！！もう、私はここから出ないでもいいから、私のことを《バケモノ》って呼ばないで！！私から逃げないで！！私を…私を独りにしないでえ…」

最後は消えてしまいそんな声でサクヤは言った。呼吸を整え、優一は立ち上がる。

その優一が動いたことでサクヤは動揺する。

今までの人達と同じように自分のことを《バケモノ》と罵り逃げ出すのだと思った。

あんなにも懇願したのに、

今までの人達とは違うのだと思ったのに、

サクヤは悲しくてしょうがなかった。

なのでサクヤはさらに俯き大粒の涙を流す。

膝を抱えて涙を流す。

優一の顔を見ないのは、自分のことを恐怖いっぱいで見ている優一

の顔が見たくなかったから。
流れる涙が膝を濡らし、身体を冷やし始める。
自分がまたひとりになったのだと理解する。

「もう独りは嫌だよ。誰か、助けて……」
誰にも聞こえないであろう声でサクヤは呟いた。

その時だった。

サクヤの身体に《何か》が纏わりつく。

その《何か》は後ろから纏わりつく。

いや、誰かがサクヤに後ろから抱き付いている。

背中から暖かい《何か》が包み込んでくれる。

そして、《何か》の手がサクヤの顔に触れ、サクヤの涙を拭う。

サクヤはこの手を知っている。

サクヤはこの温もりを知っている。

「大丈夫。逃げはしない。《バケモノ》だなんて言わせない。もう、
独りになんてさせない。僕が君を助けるよ」

サクヤはこの声を知っている。

もう、いなくなったと思っていたのに、

もう、逃げてしまったと思っていたのに

「ひっく、ゆういちいいい……」

サクヤは《望月優一》に思いつきり抱き付いた。

優一の心の中は呼吸を整え終わった時にはすでに決まっている。

あの現象のせいで今までの長い間サクヤを助けることが出来なかったのだということは分かった。
そして、そのあの現象がサクヤの力であることも分かった。

恐らく、何人もの人達が自分と同じようにサクヤに触れて、左折したのだと、

そして、サクヤを《バケモノ》だと呼んだのだと優一は思った。サクヤは確かに巨大な力を持っている。

だけど、《バケモノ》なんかじゃない。

そう呼んできたのは今までの人達だ。

そして、サクヤはそのことをあまりにも真っ直ぐに受け止めすぎてしまった。

そのために、自分のことを《バケモノ》だと思い込んでいる。

この前出来た友達の、《天城終夜》と同じだと優一は直感的に理解する。

抱き付いてきたサクヤの顔に手を伸ばして、流れる涙を手で拭う。

だが、サクヤは終夜とはちがう。

サクヤはあまりに儂くて、脆い。

なので、サクヤ自身ではどうしようも出来ない。

そして、サクヤは助けを求めている。

独りは嫌だと泣いている。

ならば、優一はどうする？

そんなの考えるまでもなかった。

恐らく、ここから逃げ出すことは簡単だろう。

だが、その行動はサクヤを大いに傷付ける。

そして、サクヤは自分のことを《バケモノ》なのだと完全に思い込む。

心が完全に壊れる。

そんなこと、させたくない。

優一にはそれで十分だった。

目の前にいる出逢って間もない少女を救うのはそれだけで十分。いや、助けを求めているだけでもう十分だった。

「サクヤ、絶対に君を救ってみせるよ」

そう、サクヤに自分の決心を告げ、

驚いた表情のサクヤの両手を握り締めた。

そして、優一はまたこの異様な空間に戻ってきた。

相変わらず、左右の瞳が映す景色は違い、また、さまざまな感覚を頭に叩き込まれる。

だが、優一には考えがあった。

この感覚に頭が壊れる前に、サクヤの名前を言えばいいのだ。

叩き込まれる感覚を振り切り、優一は叫ぶ。

だが、優一の口からは何も発せられることはなかった。優一の口から《サクヤ》の3文字の言葉が出て来ない。

何回も何回も試すが、全く変わらない。

そして、やってくる感覚、感情の波が頭に叩き込まれる。

身体は痙攣を起こして、動かない。

頭は色んなものがごちゃ混ぜで何も考えられない。

優一が出来ることは、

「がああああっ!！」

叫び声をあげて、耐えることしかできなかった。終わることない、痛み、苦しみにずっと耐えることしかできなかった。

「もういい、もう私のことはいいから…お願い、もう止めて…」
優一の頭にサクヤの声が響いた。

「もう独りでもいいから、もうバケモノでもいいから、これ以上苦しめないで」

その声はサクヤが懇願しているように聞こえた。

「そ、んなこ、とでき、ない。僕は、止めな、いよ。」

優一は途切れながら言葉を紡いだ。

そして、さらに強くサクヤの両手を掴み、

「絶、対に救って、みせ、るから」

そう言い、優一は微笑んだ。

その優一の視界が暗転した。

今度は両目とも真っ暗闇の空間に放り込まれている。

だが、先ほどまでの痛みも苦しみもなにもなかった。

そして、いつの間にか優一の両手には2つの剣が握られていた。

一つは真っ黒に彩られた湾曲した剣。

もうひとつは真っ白一色の真っ直ぐ伸びた剣。

優一はいまいち状況が理解出来ず、目を白黒させていた。

「お主が握っているのは、あの女の《力》そのものだ。お主はそれ

を受け取ることが出来る。お主は我が試練に耐えきつたのだ。」
突然の低い男の声。

「それってどういう意味ですか？」

優一は少し驚いたが、直ぐに切り返すことが出来た。

「いわゆる《褒美》だ。お主はその力を得ることが出来る。その力があればお主は何でも願いが叶う。ただ、あの女は死ぬがな。」
感情のない声が当たり一面に響いた。

優一の両手に握られている力を使えば何でも夢が叶う。

「さあ、お主はどうする？」

そんなことはもう最初から決まっている。

両手の剣を頭上で合わせる。

「僕が今、叶えたいのはただひとつです。彼女を救う。それだけです。」

そして、優一は両手に力を込め、思いっきり叫んだ。

「サクヤアアアア！！」

その瞬間、真つ暗闇の空間に罅が入り崩れ出す。

「そうか…ならば、後は頼むぞ、少年。彼女を幸せにしてやってくれ」

最後に優一の耳に聞こえた声は、酷く優しい声だった。

完全に真つ暗闇の世界が崩れ、上から、サクヤが両手を広げ落ちてくる。

両手に持った剣を地面に刺し、優一も両手を広げ、サクヤを受け止

めようとして…

「あだあつ!!」

優一は落ちた。

慌てて優一は目を開ける。

そこはよく見覚えのある部屋、優一の部屋だった。

「…あれっ?」

優一は当たりを見渡してもいつもと変わらない自分の部屋。

あの真っ白な空間ではなく、自分の部屋。

そして、一つの仮定が生まれた。

あれば、全部《夢》だった。

いわゆる、夢オチ。

まあ、夢を見ながら、ベッドから落ちたので、こっちも夢オチだが…

頭をボリボリ掻きながら時計を見る。

現在、午前4時。

「…寝直そう」

優一はため息を吐きながらベッドに潜り込む。

何故だか、ベッドの中に何かが入っている。

抱き枕なんてなかったような気がするんだけどなあ、なんて考えていると、それが動き出し、優一に飛びついた。

その反動で再びベッドの下に落下。

お尻をさすりながら、飛び込んで来たものを見る。

雪のような真っ白の髪と肌、紅い瞳をもち、黒いドレスのような服を纏った、

「これから、ずーっとよろしくね。優一。」
あの《サクヤ》本人だった。

「えええええっ!?!」

優一の絶叫が優一の家にごだましていた
優一が絶叫したのにも関わらず、優一の両親が目覚めたような様子はみえず、優一はホッと胸をなで下ろした。

その後、優一はとりあえず自分が絶叫する事になった人物を見る。

目の前の人物、サクヤはこれ以上にならない笑顔になっている。

「んで、あれは全部本当だったんだ…」
思わず、優一は呟いた。

ほんの少し前までは、夢だったんじゃないかと思っていたことが本当のことだった。

目の前にいるサクヤはもう精神世界に縛られることは無くなったのだ。

現にサクヤは優一の目の前に居るのだから

「ずっと、ずっと、ずーっと一緒だよ。ゆーいち」

サクヤはそう喜びの声をあげ、優一に飛びつく。

「はいはい、出て来られて良かったね」
と、サクヤを片手で制しながら答える。

そんな時であった。

「一体どうしたの？」

と、間延びした声と共に、優一の部屋のドアが急に開く。入ってきた人物と優一は目が合い、しばし沈黙が生まれる。

「その子一体、誰？お兄ちゃん」

若干、声のトーンを下げながら、優一の正面に立つ人物、優一の妹、理沙は言い放った。

「えっと、その…なんていったらいいやら」

優一は動揺しまくりながら、受け答える。

「もう一度、聞くよ。お兄ちゃん。その子はいった…あれ？いない？」

その声を聞き、優一も先ほどサクヤがいた方を見る。

そこには誰もおらず、ベッドだけがあった

「あれっ？おかしいなあ？」

「きつと、何かの見間違いだって、さて、起きるのにはまだ早いし、もう一回寝直そうよ。」

優一は、そう言いながら、理沙を部屋から押し出し、ドアを閉める。あれっ？確かに見えたんだけどなあ、なんて言いながら理沙は自分の部屋に帰っていった。

理沙が自分の部屋に戻るのを確認して、ホッと一息を吐く。

「バレなかった？私としてはバレちゃっても良かったんだけど」

突然聞こえた声に、声をあげながら驚く優一。

それも、そのはず。

先ほどまで姿の見えなかったサクヤが優一の目の前に姿を表したのだから。優一が驚いていることが不思議に思い、サクヤは難しそうな顔をしている。

「えっと、サクヤ。今までどこに居たの？」

優一の質問に、サクヤはハツとした顔になり、

「そうだったね、言うの忘れてたね。」

サクヤは少し恥ずかしそうに頭を掻いた。

「えっとね、優一の精神世界に隠れてたんだよ。優一が精神世界からの呪縛を解いてくれたおかげで優一の精神世界と外の世界、つまりこの世界と行き来が自由になったんだよ」

「ああ、そう言うこと」

ポンツと手を叩き納得した優一。

だが、その力は万能とはいえず、多少の時間が掛かるらしい。現に、優一の妹の理沙には一瞬姿を見られてしまった。

その後に直ぐに精神世界に隠れたため、事なきを得た。

だが、出て来て最初の言葉の一部分が優一の頭に引つかかる。

「（バレちゃっても良かったんだけど）」

「でも、何で《バレちゃっても良い》なんて言ったの？」

その言葉を聞き、サクヤは少し頬を赤らめながら、指を弄くり始め、
「挨拶はやっぱりしとかないといけないかなあって思って」

小さな声でぼそぼそと呟く。

「んじゃ、今日の昼ぐらいに家族にサクヤのこと説明するよ。だから、サクヤも一緒に説明してね」

その言葉を聞きサクヤは笑顔を浮かべ、

「うん、優一の《お嫁さん》にしてももらえるようにがんばるね」
意気揚々にサクヤは応えた。

優一はガンツと頭を壁にぶつける。

「何で、そう言うことになるのかなあ？」

優一の顔は若干引きつっている。

「だって《ずっと一緒に居る》って言うてくれたじゃない。つまり、
け、結婚するってことだ…って優一どうしたの？」

優一は最後までサクヤの言葉を聞かずにベッドに飛び込み、

「僕、眠いから寝るねえ。オヤスミ」

優一は目を閉じる。

サクヤの猛抗議が続いているが、優一の頭の中には、

(さあ、どう説明しよう…)

という不安の気持ちでいっぱいだった。

第2話 1 (後書き)

ご意見、ご感想をいつでもお待ちしております。

第2話 2

優一がサクヤを無視して二度寝を始めた時間、つまり、午前5時頃、人の気配が全くしないような深い森の奥に、天城終夜いた。額にはうっすらと汗を滲ませて、一心不乱に拳を振り抜く。

天城終夜の朝は早い。

午前4時には目を覚まし、朝の鍛錬をする。

終夜の間離れした力を制御するためには日頃から鍛錬を重ねて、上手く扱えるようにしていた。

力の制御を誤れば、あらゆるものを破壊してしまう。

建物や車などの色々なものとそして、《人間》をいとも簡単に壊してしまう。

終夜が小さい頃は上手く制御が出来ていなかった。

だが、《とある人物》に終夜は鍛錬のしかたを教えてもらい、今なおそれを続けている。

勿論、その《とある人物》からは色々なことを教わった。

中学までの一般教養、終夜の力の使い方、そして、終夜の夢を見つけた。

人の優しさ、愛情をもらった。

終夜はその《とある人物》に敬意を払って「兄さん」と呼んでいる。

その人物に進められ、今通っている高校にも入学した。

しかし、今の終夜の近くにはその人物はいない。

少し前までは一緒に暮らしていたのだが、その人物は遠い所に行ってしまった。

先ほどまで額に汗が滲む程度だったのだが、今は汗をダラダラと流しながら、肩で呼吸をしている。

そして、不意に動きを止め、近くの木に立てかけてあった細長い袋を手に持った。

そして、その袋の中から二本の木刀を取り出す。

呼吸を整え構えをとる。

普通、剣道の二刀流の場合、一つは真つ直ぐに構え、もう一つをやや切つ先を自分の方へ傾けながら上段で構える。

そして、上段にある手で攻撃をすると同時にもう片方を上段に持つて行き、敵の攻撃を防御する。

それが、剣道の二刀流である。

防御をしながら攻撃出来るため、相手の攻撃を防ぎやすく、守りやすいのだが、片手で攻撃するので、圧倒的に力不足なため、一本をとりづらい。

負けることも少ないが勝つことも少ない。

しかし、終夜の二刀流の構えは普通とは違っていた。左手は真つ直ぐ正面に構える。

右手も普通の剣道の二刀流と同じく上段で構えるのだが、木刀の先が斜めしたの地面に向いている。

つまり、逆手に木刀を持っている。

剣道ではこの構え方、いや逆手なんて持ち方はしない。

おもむろに終夜は木刀を振り始める。

縦に横に斜めに、終夜はゆっくりと身体に馴染ませるように、流れるように両手で振るう。

数十回とそれを繰り返し、終夜はピタリと動きを止め、周り一帯を見渡した。

勿論、深い森の中のため人はひとりもいない。

「よし、誰もいない、なっ！！」

その言葉をきっかけに終夜の背中に紅き翼が生える。

そして、終夜は両手に力を込める。

それと同時に、木刀は姿を変えた。

木刀はまるで一枚の羽をかたどったような片手剣になっていた。

一旦終夜は深呼吸をして、再び構える。

勢いよく一步踏み出し、右手、つまり逆手に構えた剣をまるで殴るかのように斜め上から振り下ろす。

振り下ろした所で刃の向きを変え、両手を揃え斜め上に振り抜く。

振り抜くと同時に身体を捻り、右足で軽く跳躍し、右手を捻った身体を戻す同時に全体重を乗せ、地面に叩き込む。

それと同時に轟音と砂煙が舞う。

その砂煙で咳き込む。

ただし、咳き込んでいるのは終夜ではなかった。

終夜はその咳き込む声のする方を向き構えをとるが、直ぐに解いた。

何故なら、

「こほっこほっ、思いつきり砂吸い込んだじゃった」

涙目で咳き込む、結衣だったのだから。

「何でここに来たんだ？結衣」

結衣はこの間買ったばかりの服に付いてしまった砂埃を払いながら、

「だって、終夜が勝手にどこかに行っちゃうんだもん」

結衣は頬を膨らませながらそう応えた。「はいはい、俺が悪かったよ」

「ホントはそう思ってないでしょ。これで何回目だと思ってるの」
終夜は結衣を宥めようとそう言うが、結衣は終夜を睨みながら唇を尖らせる。

結衣の言うとおり、終夜は毎朝身体の鍛錬を行っている。

終夜は自分の都合のみで朝早くから結衣を起こすのは良くないと思
い、こっそり抜け出している。

一緒に暮らし初めて最初の頃は終夜が朝の鍛錬から帰って来るなり、
「どこ行ってたの！！」と、怒鳴られ、抱きつかれ、拳げ句の果て
に泣き出した。

その様子を見た絶が怒り、終夜に文句を永遠と言い続けるなりされ
て、終夜にとってはうんざりする事になった。

だが、朝の鍛錬を辞める訳にもいかず、何度も同じようにこっそり
家を抜け出している。

「でも、私から逃げようなんて百年早いわよ」

新しく買ったばかりの空色のワンピースにカーディガンを着た結衣が、ふふんと、鼻をならしながら、どうだと言わんばかりに胸を張る。

そうなのだ。

最近終夜の鍛錬場にまで結衣は終夜の後をこっそりつけてきている。

終夜も一度周り一带に人の気配がないかどうか確認するのだが、それでも結衣は見つけられない。

いや、見つけてはいるが、あえて声を掛けないだけなのかもしれない。

何故なら、終夜の鍛錬はとても集中力を必要とする。

特に、手にしていた、今は木刀に戻ってしまったあの羽をかたどった剣の精製には特に集中力を要する。

それに、しっかりあたたまった身体で唯一の家族と呼ぶべき人から教わった型をしっかりと練習したかったのだ。

「でもどうやって俺の後をつけてこれたんだ？俺はここまで走って来たんだぞ」

終夜はこの場所までウォーミングアップがてら走って来ている。

それも、少女ではとても追いついて来れないぐらいの速さで走っている。

朝の鍛錬をする場所は深い森の中と決めているだけなので、毎日同じ場所では行わない。

なので、ついて来ない限り終夜までにはたどり着けない。

だが、終夜の目の前にいる少女、結衣は終夜の所までたどり着いている。「…そりゃあ、…愛の力だよ」

終夜のその指摘に対し、結衣はほのかに頬を赤く染め、その頬に両手を当てながら、上目遣いで終夜を見ながら言った。

「……ふーん、そうなのか」

「なに、その言い方っ!!」

終夜のあっけらかんとした発言に、結衣は顔を真っ赤にしながら叫ぶ。

そして、終夜の頭をポカポカと叩く。

結衣は終夜のことが大好きである。

それは《家族》としての感情でもあるが、《異性》として好きという感情の方が強い。

終夜も薄々感づいてはいるのだが、《家族》として好きなのだろうと解釈をしている。

そして、終夜は自分は《バケモノ》なのだから、愛されてはいけないうい、好かれてはいけなうと思ひ、ついすぐに身を引いてしまふ。

「あー分かつたから、そろそろ頭叩くの止めてくれ」

「うそっ!!全然分かつてない!!」

終夜の懇願もあっさり切り捨てられ、結衣終夜の頭を叩き続ける。そこで、終夜は切り札を使う。

「今日の晩御飯、結衣の好きなもの作るから、もう止めてくれ」

その言葉と同時にピタリと結衣の動きが止まる。

「…ゼツタイだからね」

結衣はそう言うと、終夜から離れる。

終夜の作る料理はとても美味しいらしく、結衣曰わく、三つ星レストランのオーナーがひっくり返るほど、らしい。

ずっと昔から終夜は料理を作っていたらしく、作り始めた当初は料理本を片手に悪戦苦闘をしていたが、年を重ねることに上手になっていった。

だが、終夜自身、他の人の作った料理を余り食べないため、自分の料理の腕を余り分かっていない。

とりあえず、人並み程度に料理が出来ると終夜の中では結論付けてある。

とりあえず、結衣の攻撃が止んでくれたことに対し、終夜はほっと一息をついた。「それじゃあ、そろそろ帰るか」

終夜は木刀をしまい、結衣の頭をポンと叩く。

終夜はそのまま歩き始めようとするが、結衣が一点を見つめて全く動かない。

「終夜って《剣術》とかするの？」

結衣は木刀を指差しながら言う。

結衣と対峙した際は剣など使ってはいなかった。

「剣術は余りやらないが、昔、ある人に教えてもらってな。今でもたまにこうやって動きを思い出しているんだ」

頭を掻きながら、余り答えたくなさそうに答える。

「その《ある人》って？」

「俺のとても尊敬してる人だな。俺はその人に沢山のことを教えてもらって、生きる意味をくれた人だ。俺は本当の《兄》のように思ってる」

どこか遠い目をしながら終夜は応えた。

「そうなんだ、私も会ってみたいなあ、終夜のお兄さんに。ねえ、その人は今どこに居るの？」

結衣は、今まで知らなかった終夜の事を知れて少し嬉しそうな顔している。

そして、その人に会いたいのも確かである。

終夜の事をもっと知れると思ったからだ。

「もう、いない」

「…えっ？」

終夜がバサリと言葉で切り捨てたことに驚き結衣は終夜の顔を見る。それは悲しみ、苦しみ、色んな負の感情に満ちた顔だった。

「遠い所に行ってな、しばらく会えないんだよ」

終夜は心配そうな顔で見ている結衣に気が付き直ぐにいつもの顔に戻し応えた。

だが、その顔の奥には何とも言えない悲しみが隠された表情だった。

「あ…：そうなんだ…：」

結衣も終夜に深く聞くことが出来ず、そう応えるので精一杯だった。

「あんまり、気にするなよ。それじゃ、帰るぞ。絶も心配しているだろうからな」

終夜はもう一度結衣の頭をポンと叩き、結衣に笑顔を見せて言う。

それに結衣も「うんっ」と頷き終夜に笑顔を見せた。

そして、終夜と結衣は森の出口まで歩き始めた。

静かな森の中を終夜と結衣の2人で歩く。

太陽は完全に顔を出し、2人の歩く道を明るく照らす。

恐らく、6時をまわったところだろう。

だが、帰り始めた時は元気だった結衣の歩くペースが明らかに落ちている。

その異変に終夜が気が付き、結衣の顔を覗き見てみた。

…夢の世界に片足を突っ込んだまま歩く結衣の姿はそこにはあった。

それもそのはず、結衣は昨日の晩から一睡もしていなかった。

終夜の朝の鍛錬について行くつもりだったからだ。

ついて行くと言っても、終夜が何時に家を出て行くのか分からず、何時に起きれば良いのか全く分からない。

昨日も一昨日も起きた時には終夜はおらず、今日こそはと意気込み、徹夜で終夜の気配を読み、見事に終夜について行くことが出来た。

だが、その達成感と安心感と春特有の暖かさで結衣は夢の世界に片足をつっ込んでいる。

終夜は、はあく、と盛大に溜め息を吐いた。

「…結衣」

「なあゝに？」

呂律も回らなくなってきた結衣の前に終夜は後ろを向きながらしゃがみこんだ。

「…俺がおぶって連れて帰ってやるから、少し寝ろ」

「…えっ？」

終夜の発言に一瞬目を覚ましたが、睡魔には勝てず、結衣は終夜の言われるように終夜の背中に寄りかかりおんぶされる形になった。

(どうせなら、お姫様抱っこの方が…)

なんて思った結衣だったが、終夜の背中は心地よく、直ぐに夢の世界に墜ちていった。

幸せそうな結衣の顔を終夜は覗き、終夜の顔は自然に綻んだ。

ついこの間までは狂気に取り憑かれていた少女。

だが、今ではあの時の事が全て嘘だったかのよう、結衣は笑っている。

どこからどう見ても普通の少女。

急に終夜の顔が強張る。

(俺は一緒に居ていいのか?)

終夜の中で、何かが渦巻く。

（俺は《バケモノ》だ。バケモノの俺が結衣と一緒に居ていい資格なんてな…）

「…しゅ〜や。ずっとず〜っと一緒だよ…」

突然の声に終夜の身体が跳ねる。

結衣の顔を見してみるが、相変わらずの幸せそうな寝顔。つまり、単なる寝言。

「全く、結衣にはかなわないな」

終夜の顔も気が付けば笑顔になっていた。

そして終夜はその《幸せ》を背中に背負いながら、真っ直ぐ森の出口へ歩き出した。

終夜の顔は終始綻んでいた。

終夜は結衣に救われていたのかもしれない。

兄と呼んだ人と別れてからはずっと終夜は独りきりだった。

学校でも、いつも周りに壁を作り独りであり続けた。

「自分は《バケモノ》なのだから」

そう自分に言い聞かせ続けた。

実際にその高い壁を乗り越えて来る人間なんていなかった。

そう、つい最近までは。

1人はクラスメートだった。

今まで、全く関わりのない彼だったが、とある事件をきっかけに友達になった。

今では、週に何日も家に押しかけて来て一緒にご飯を食べるようになった。

友達の彼、優一は終夜の《力》を知っている。

それを知りながらも優一は終夜の友達になりたいと言った。

そして、現在に至っている。

そして、もう1人。

終夜の壁を乗り越えて、そしてなおかつさらに身を寄せる少女がいた。

今、終夜が背負っている、少女、結衣だ。

終夜のことを一番に考え、終夜の支えになろうとしている。

いや、終夜の支えになっている。

終夜も結衣のことを終夜のなかで本当の家族になりつつある。

終夜も、結衣と暮らし始めて、全てが変わった。

孤独じゃない、と思えるようになった。

毎日が笑顔で溢れている。

まさに幸せだった。

終夜にとって結衣は大きな存在になっていた。

それを嬉しく思い、結衣をもう一度背負い直す。

幸せの重みを噛み締め歩き出す。

終夜は笑顔を浮かべながら、歩いた。

だが、それがいけなかった。

違うことを考えていたために、森を出たことに気が付かず、小さな道路を横断してしまった。

盛大な音に終夜は一瞬で現実に戻り、音の方を向く。直ぐそばまで自動車が迫ってきていた。

恐らく、終夜の前で止まるもう間に合わないぐらいの速度で迫って来ていた。

終夜の筋力が人間を遥かに凌駕していようともう間に合わない。

終夜は直ぐに結衣を正面に抱えて、自動車に背を向け結衣を思い切り抱き締めた。

（俺はどうなっても構わない。だから、結衣だけは！！）

終夜は自分の身が壊れようと、目の前に居る幸せを教えてくれた少女だけは救うと心に決め、襲いかかつて来るであろう衝撃に備えた。そして、直ぐに衝撃が終夜を襲った。

終夜は僅かの時間を出せるだけの力を足に込めたが、意図も簡単に身体が宙に浮いた。

しかし、終夜の身体が宙に舞い、身体が飛ばされたのは、終夜の右側だった。

終夜の左側からは凄まじいブレイキ音が鳴り響く。

そして、そのブレイキ音が終夜から離れていく。

終夜の身体は確かに宙に浮いたが、大した衝撃はなかった。

終夜は閉じていた目を開けた。

「怪我はないか？」

短めの銀髪をした無表情の青年が、終夜と結衣を抱えて歩道に立っていた。

そして、直ぐに終夜達を降ろす。

「えっ、ああ、大丈夫です」

頭が混乱していたためか、普段使わない敬語が終夜の口から飛び出した。

「そうか…次からはしっかりと左右の確認をしてから道路を渡れよ」
青年はどこか優しげにそう言う。

「助けてもらったことは礼を言わせてもらう。でもなんで助けた？
下手したらあんたが危なかったんだぞ」
未だに頭は混乱していたが終夜は思ったことを口に出した。

「失敗はない、と私の頭の中でそう結論を出せたからやったまでだ。
それに、」

無表情の青年は終夜を見つめ、

「目の前で人が傷付くのはみたくない」

無表情の顔でも、どこか優しさがにじみ出していた。

終夜はそう思った。

その言葉を最後に青年は急に耳の後ろ側に人差し指と中指を当て、
急に黙り込んだ。

「すまん、呼ばれているので失礼する」
指を離れた青年はそう言うと言いついてしまった。

終夜は必死に落ち着かせて頭で考えた。

恐らく、いや、確実に間に合わないと思っていたのだが、あの青年は、その僅かな時間で結衣を抱えている終夜を抱えて歩道まで駆けた。

絶対に間に合わないと思っていたのだが、ひよっとしたら、混乱してよく分からなかっただけかも、と結論づけた。

そして、終夜の顔が急に引き締まる。

「大丈夫か、結衣!!」

思い出したかのように、終夜は未だに抱き締めている結衣の顔を見た。

真っ赤な顔をした結衣の顔があった。

大丈夫か!？、と言いかけて終夜は口を詰むんだ。

「終夜が抱き締めてくれた。終夜が、終夜が…」

結衣はそう呟き、最後には「きゃっ」なんて言いながら頬に両手を当てた。

結衣の無事を確認すると同時に終夜は大きく溜め息を吐いた。「終夜から私を抱きしめてくれたっていうことは…そういうことなんだよね」

未だに自分の世界に入っている結衣を終夜は無視しながら結衣に怪我がないか見る。

どこをみても怪我をしている様子はなく、ホッと一息を吐く。

「うう、終夜からの熱い視線を感じるよう」

顔を真っ赤に染めながらも嬉しそうに語る結衣をシカトして、終夜は回れ右をして歩き出そうとする。

単純にめんどくさいと思ったからだ。

だが、終夜は一步を踏み出せなかった。

終夜の居るところまで、道路の真ん中あたりから2つの黒い線を見つけたからだ。

恐らく、摩擦の痕。

そして、反対側の歩道はひび割れ、陥没している。

それを付けたのは先ほどの青年だろう。

しかし、ありえない。

人間の力ではない。

下手をしたら終夜を超える身体能力。

だが、終夜は嬉しかった。

(目の前で人が傷付くのはみたくない)

どこか優しさがにじみ出ていたあの笑顔。

あの青年は力を間違った方向には使わない。

それだけで終夜はどこか嬉しかった。

「終夜、どうしたの？大丈夫？」

結衣の一声で終夜は世界に戻って来た。

どうやら長い間、考えていたらしい。

「いや、大丈夫だ。帰るぞ」

終夜は、結衣の顔を見て、微笑みながらそう言った。

結衣は何故か顔を赤らめた。

「…終夜がどこか優しい…。ってことはやっぱり終夜も私のことです」
結衣がまた自分の世界に入って行ってしまったので、終夜は一人で

歩き出した。

「…それじゃさ、終夜、き、き、きき、キスして、ってお願いだから終夜置いてかないで〜」

少ししてから結衣も走って終夜に追いつき、一緒に家に帰った。

「ふうん、朝から大変だったんだねえ」

優一が終夜の作ったラーメンを食べながら言う。

「まあ、俺としてはもう一度会って礼が言いたいんだけどな」
終夜もラーメンを食べながら話す。

時刻は12時半。

終夜の家で、優一と一緒に昼飯を食べながら朝あったことを話す。

「それで、あれは一体なんなの？」

優一はそう言い指を差す。

「終夜は私のことを…きゃっ／＼／」

優一の差した指の先で結衣はきゃっきゃっ言いながら転がり回っている。

その頬はだらしなく緩んでいる。

「…知らん」

終夜は溜め息を吐きながら答えることしか出来なかった。

第2話 3

「まあ、僕には関係ないけどね」

溜め息を吐いている終夜を横目で見ながら優一はラーメンを食べる。

「あのなあ……。お前は目の前で困ってる友人を助けようとか思わないのか？」

「全然。だって見てて楽しいじゃん」

終夜は優一を睨みつけるが、優一はどこ吹く風で呆気なくそう応える。

「…そうか。ならこれからはお前の飯は作らないからな」

「ええっ！！謝るからそれだけは勘弁して下さい」

優一は必死の形相で謝る。

優一も終夜の料理の腕前は知っている。

その美味しい料理が食べれなくなるのは心底嫌らしい。

「あ、ああ。飯はちゃんと作ってやるから」

あまりの優一の剣幕に終夜はただそう言うことしか出来なかった。

その時、鈍い音が終夜の家の中で響いた。

音のした方向を見てみると、先ほどまで転がり回っていた結衣の動きが止まっている。

頭の所にはタンスの取っ手があり、そこに頭をぶつけたらしく、「きゅ〜」と言いながら結衣が延びていた。

「まあ、これで静かになるか。それで優一、一体何があったんだ？」
急に終夜の顔が引き締まり、優一の顔を見る。

「…やっぱり終夜には隠せないかあ」

おどけたように優一は両手をひらひらさせながら応える。

優一が昼から来ることは今までなかった。いつも昼過ぎに来ては夕飯を食べて帰る。

だが、今日は昼から来て、一緒に昼飯を食べている。

しかも、どこか疲れた顔をしていた。

「それで、一体何があった？」

「…うん、でも話し始める前にちょっと呼びたい人が居るんだ」

優一はそう言うと、右手を胸に当て目を閉じた。

「サクヤ、ちょっと起きて、出て来てくれる？」

優一はまるで、言い聞かせるようにそう呟いた。

終夜は不思議そうな顔で優一を見ているが、直ぐに変化が起きた。

優一の腹の部分から、少女が眠そうな顔で這い出てきた。

「ゆういちい、わたしまだ眠いんだけど」

終夜の驚いた顔をまるで気にしないように、眠そうな声で、しきりに目をこする白い少女、サクヤがいた。

目の前に現れたサクヤに呆然と見ている終夜。

そんな珍しく驚いた表情した終夜を見ることができて優一は少し嬉

しく思えたりしていた。

「眠いところごめんね、サクヤ。彼がさっき話した僕の大切な友達の終夜と結衣だよ」

その言葉を聞き、サクヤは眠そうな顔を無理やり整えた。

「えっと、はじめまして。終夜さん、結衣さん。私は優一の妻のサクヤです。以後お見知りおきを」

サクヤは上品にそう言い微笑んだ。

数秒の時間が流れる。

サクヤは「あれっ？」と、言いながら首を傾げている。

終夜は先ほどよりもさらに驚愕の顔を浮かべている。

「ねえ、優一」

先ほどまで気絶していたはずの結衣が優一の顔を真っ直ぐ見ながら言う。

「優一ってロリコンだった？」

「結衣！！それを言うてはいけない。そこは優一の自由だろう！！」

「でも、ロリコンは犯罪だよ。どう見たってサクヤは中学生だよ！！」

「優一は特殊性癖を持つ人間だが、俺達の友達だろう。そこは受け止めなくちゃ駄目だ」

「2人で勝手に盛り上がってないで僕の話しを聞けえ！！」

勝手に盛り上がっている2人の頭にスパーンと心地よい音が鳴り響く。

優一の手にはスリッパが握られていた。

「と、言うこと、分かった？」

優一は今朝あった話、あの白の世界のこと、サクヤのこと、サクヤの力のことを話した。

途中、終夜と結衣が暴走するところがあったが、そのたびスリッパを使い落ち着かせた。

「ああ、何とか分かった」

「うん、私も」

2人は頭をさすりながらもそう答えた。

最初の爆弾を投入したサクヤに至っては優一の話しの途中で夢の世界に旅立っている。

そのおかげで、話があまりこじれずに出来たのである意味良かった。

もちろん、終夜の家に来る前に家族にサクヤのことは説明済み。

難関かと思われたが意外にあっさりOKを両親に出され、一緒に暮らすことが決まった。

妹の理彩もなんだかんだで年の近そうな家族が出来たと喜んでいた。ちなみに、サクヤは優一の妹、理彩の部屋を2人で使うことに決まった。

サクヤは優一と一緒にいいと駄々をこねたが優一と理彩に断固とし

て反対され渋々そう決まった。

「それで、優一。サクヤの言ってた優一の嫁っていうのは本当？」
結衣は真剣な顔をしている。

その隣の終夜も真剣な顔をしている。

「ああ、あれはサクヤの出任せだから気にしないで」

優一のその言葉に、2人は心底安心した顔になった。

「ふわあゝ、ゆういち、話終わった？」

サクヤは欠伸をしながら起きた。

「あ、うん。終わったよ」

サクヤが起きたことに多少驚きながらも優一は答えた。

「なら、終夜さんと結衣さん…とあと1人、いや、そのハサミさんに質問があるの？」

終夜と結衣の顔が驚きに染まる。

優一も同じように驚いた顔をしている。

もう1人、つまり絶の事だ。

優一は絶の事はまだサクヤに話していない。

なので、普通に考えたら分かるはずがないのだ。

絶は一見すると、ただの大きいハサミに過ぎないのだから。

そして、サクヤは言葉を続けた。

「あなた達は優一の味方？それとも…敵？」

サクヤからは、先ほどには考えられないほどの圧力が放たれていた。あまりの圧力に結衣の顔は真っ青になり震えている。

絶も圧倒的な力の差を感じ取ったのか喋ることが出来ない。

「いや、俺達は違う。ただの友達だ。ただの大切な友達だ」

しかし、終夜はその圧力にも屈することなく、サクヤの目を見ながらそう答える。

しばらくの間、サクヤと終夜の睨み合いが続いたが不意にサクヤの顔が綻んだ。

「分かりました。私はあなた達を信じます」

サクヤは微笑みながらそう言った。

しかし、また直ぐに険しい顔に戻り、サクヤは結衣のみを睨み付けた。

「結衣さんは優一のことを狙ってたりするんですか？優一のことを好きだったりするんですか？」

サクヤは先ほどと同じ圧力を加えながら結衣に尋ねる。

しかし、今回の結衣は違った。

「そんなことないよ。だって私が好きなのは終夜なんだから。終夜しか好きにならないんだから」

結衣はサクヤに負けず劣らずの圧力で答える。

しばらく2人で睨み合ったあと、2人は勢い良く握手を交わす。

「結衣さんとは仲良くなれそうです」

「うん、私もそう思う」

2人は先ほどまでの圧力は消え失せ、笑顔で握手していた。2人の少女が固い握手を交わす中、男3人は円を作り話し合っていた。

「…優一。サクヤは一体何物なんだ？」

「えっと、僕もよく分からないんだ」

優一は軽く俯きながらそう答える。

優一もサクヤのことをあまり知らない。

何故なら、サクヤとまともに話したのは今日が初めてなのだから。

「ねえ、絶。サクヤにも終夜と絶と同じような《力》があると思うのだけど、どれくらいのものか分かる？」

優一は、サクヤにもとある《力》があるというのは薄々感じている。いた。

そして、その力が終夜や絶と同じようなものだと言ったことも。

しかし、どれほどの力かまでは優一には分からない。

「…そうだな。話しておかねばならないな。あの少女の力の強さを」

いつもど通りの無機質の声。

だが、何故かそれは重々しく部屋に響いた。

思わず、優一は息を飲み込む。

「…あの少女は、サクヤは、私の力を遥かに超越した力を持っている。終夜以上のだ。あの少女が本気を出せば、恐らく日本は消え失

せるだろう」

終夜は黙って目を瞑り話を聞き、

優一は驚きで開いた口が塞がらなかった。

「まあ、そうだろうな。あの時の圧力はそれだけのものを物語っていたからな。だが優一。お前は どうするんだ？サクヤはとても危険な存在だぞ」

「僕は……」

突然、終夜は目を開き、優一を真っ直ぐ見据え、圧力をかけ、そう問いただす。

優一はサクヤがここまでの力を持っているとは思っていなかった。あまりの衝撃に優一は呆然とするしかない。

「さあ、どうするんだ？優一。サクヤは危険な存在だ。最悪お前の周りの人間を巻き込む可能性があるんだぞ。もしも、ここで答えが出せないのなら……俺が、サクヤを……この場で排除する」

「そんな……そんなのってないよ……！」

あまりにも淡々と続ける終夜にそう答えるので精一杯の優一。

だが優一の心の中は大いに揺すぶられていた。

(僕だけの問題じゃないんだ。下手をすれば終夜も結衣も、そして僕の家族も危険な目に……一体どうしたら……)

優一の頭の中で色々な思考が蠢きあつ。優一の頭の中が色々な思考が蠢き合っているその時、
終夜の横から、あるものが飛び出して、優一に飛びついた。

「えへへへ、ゆういち」

サクヤは嬉しそうに微笑みながら、優一の胸へ頭をこすりつける。

優一の目には、あまりにも小さな存在に見えた。

(私は存在してはいけないの)
あまりにも悲しそうに語る少女、サクヤの顔が優一の頭に浮かぶ。

「終夜、答えが出たよ」

優一は先ほどとは違う表情で終夜の目を見る。

「ゆういち？」

サクヤは不思議そうな顔をしながら、優一の顔を見る。

優一はその視線に気付き、サクヤに笑顔を浮かべ、サクヤをぎゅつと抱き締める。

「それでも僕はサクヤと一緒にいるよ」

「それがどういう意味だか分かっているのか？周りの人を危険にさせる、傷付けるかもしれないということだぞ？」

「そんなことは、僕がさせない。僕がサクヤを止めてみせる」

「無理だ。サクヤが暴走すれば……」

「僕は誓ったんだ！！サクヤを幸せにするんだって。ずっとそばに居るんだって！！」

優一は感情を爆発させて、終夜に向けて叫ぶ。息は上がり肩で息をしている。

「…やっぱり、お前はそうやつだよな」

だが、終夜はどこか優しそうな顔をしていた。

ポカンとした表情で優一は終夜を見る。

「…分かった。俺も優一の力になるう。もしも時は俺がなんとかする。だからな、優一、サクヤのそばに居てやれよ」

「えっと、僕はサクヤと一緒にいていいってこと？」

「俺は言っただろ。優一にどうするかって。優一が決めたことなら俺も手伝うさ」

終夜はそう言い、立ち上がった。

「えっ、終夜どこいくの？」

「新しい友達に飯を作りに行くだけさ」

終夜はそう言うキッチンへ向かい、料理を作り始めた。

「ねえ、優一。サクヤ大丈夫？」

結衣の一言で我に帰り、サクヤを見る。

「えへへへへへへ」

顔を真っ赤に染めながら、最高の顔で笑っているサクヤが優一の胸の中にいた。

その笑顔を見て、どこか優一は嬉しく感じたのだった。

…それと同時に若干気味が悪いとも思ってしまったのは別の話。

「はむはむはむはむ」

「なんか、凄く変な声出しながらラーメン食べるよね。サクヤってあと、箸の使い方上手くなってるし」

軽く呆れながら優一は終夜お手製ラーメンを啜るサクヤを見る。

優一がサクヤをなだめている時に、終夜が「ほら、出来たぞ」と、言いながらラーメンをサクヤの前のテーブルの上に置いた。

サクヤはいきなり目の前に出された食べ物「ラーメン」に多少戸惑いを見せた。

いや、正確には《箸》にだった。

サクヤは《食べる》と言う行為は知っていたが、《箸》の名前と使方は知らなかったなので、目の前に出された箸をどうしたら良いのか分からず、

「ゆづいち、《これ》どうしたらいいの？」と、聞く始末。

優一は直ぐにサクヤの言っていることを理解したのか、サクヤの手を取り、まず箸を持たせる。

そして、そのまま箸で麺を少し掴ませて、サクヤの口元まで持って

いき、

「それでは、ズルズル〜って啜るだけだよ」

その優一の言葉に頷きサクヤは口を麺に付け、啜る。

その後、少しばかりサクヤの動きが止まった。

そして、優一の手を振り払い、この「はむはむ〜」の部分へ戻る。

「まあ、良いんじゃないのか、こういうのも」

そう言う終夜の顔は、先ほどとは違い優しさで満ちている。

「まあね。でさ、終夜と結衣にお願いがあるんだ」

「なんだ？」

「うん、なに？」

「サクヤの服を買いに行くんだけど、一緒に来てくれない？」

優一の頼み事に結衣は喜び、終夜は顔を青くする。

「うん、いいよっ。終夜もいいよね？」

「いや、俺は…」

「いいよね」

「…はい」

最近終夜が結衣の尻に敷かれ始めているのではと思う優一だった。

「それじゃあ、サクヤが食べ終わったら行くぞ」

終夜は溜め息一つ吐きながらそう言った。

「只今参りました、博士」

とある建物の地下に2人の男がいた

「うむ、よく来た《type 01》。そろそろお前の力のデータが欲しくてな。2時になったらこここの全てをしる」

「《ここ》をですか？」

「そうだ、《人》も《もの》も一つ残らずだ」

「…了解しました」

「では、2時より開始してくれ。私は計測器の準備に入る」

そう言い残すと、博士と呼ばれた人物は闇へ消えた。

「私はどうしたら…」

誰にも聞こえないほど小さな声で、ある青年は無表情で呟いた。

第2話 4

「ふんふん」

鼻歌混じりにスキップをしながら歩く結衣。

その横で両手に紙袋をぶら下げた終夜と優一。

3人は今、少し大きなデパートで買い物中である。

ちなみに、サクヤは優一の《なか》である。

終夜のお手製ラーメンをお腹いっぱいになるまで食べた後、優一の精神世界に潜り込み眠っている。

終夜と優一の両手にぶら下げている紙袋の中身は勿論サクヤの服である。

…と何故か結衣の服も入っている。

「だから、俺は嫌だったんだ」

そう言いながら、終夜は大きなため息を吐き出した。

前にもこのデパートに来たことがあった。

その時は、終夜と結衣の2人だけだった。

理由は今回と同じ様なもので、結衣の服を買いに来ていた。

その時、終夜は嫌と言うほど思い知らされた。

女性の買い物は長いということ。

「結衣。俺達は少しあそこのベンチで休んでいいか？」

デパートなどによくある休憩所みたいな雰囲気放つスペースを指差しながら終夜は結衣に聞いた。

「ええ、うーん、まあ、いいよ」

結衣はしぶしぶながら終夜の要求を呑んだ。

「よっしゃ」と、小さくガッツポーズを取りながら、そのベンチに
一歩踏み出した。

その時だった。

時計の針が2時を指したのは。

まるで何かが爆発したようなとても大きな轟音と共に、終夜達の足元を揺らした

終夜達は顔を見合わせた。

「終夜、今のつて!？」

「落ち着け、恐らく《下》だ」

終夜達の居るフロアは二階。

先ほどの音と振動の原因は恐らく一階。

「でも、今の感じだとここの真下ぽくなかった？」

「ああ、恐らくそうだろうな。ただどな一階と二階の間には分厚いコンクリートがあるから、ここまで被害があるわけじゃない」

「でも、デパート全体で危ない感じで充滿してるけど」

現に、終夜達の周りの人達は急いで避難をしていた。

店員も必死に客の避難させるため誘導している。

「こういう時こそ、慌てるな、だ。それじゃ、俺達も避難する……」

その時、結衣の後ろ側の床に罅が入るのを終夜は見た。

その瞬間に結衣の手を引き抱き締める形でその場所から離れた。終夜と結衣が離れた瞬間に床の罅が大きくなり、人一人通れるぐらいの穴が空いた。

「優一、結衣を頼む」

「えっちょっと、終夜!？」

終夜は優一に結衣を渡すと、優一と結衣の前に一步出て、構えた。

勿論、紅い翼はまだ出してない。

人がまだ大勢居るからだ。

終夜は《バケモノ》であることを不特定多数の人物に知られたいくない。

たくさんの人に知れ渡った時、終夜はこの町を出て行かなければならなくなる。

「まだ、人がいたのか……」

終夜の前に空いた穴の中から、狐の面を被った背の高い男が出て来た。

手には何も持っていない。

ということとは素手で高さ2メートル以上ある天井にジャンプしてコンクリートを殴りつけて穴を開けたと、いうことになる。

(人間離れはしているが、俺よりは上回らないだろう)

しかし、その考えている時間がまずかった。

目の前にいる狐の面の青年の右手には、日本ではまず手には入ることとはないであろう武器、《銃》が握られていた。

銃は銃でも、連射性能、威力共に申し分ないほどのアサルトライフルである。

そして、その銃口を自分の右側へ向け引き金を引く。
ものすごい発砲音が耳をつんざく。

そして男は、その銃を発砲し続けながら銃口を右側から左側へ動かせた。

つまり横に薙払うように、銃を放った。

完全な通り魔的な犯行。

完全な無差別な攻撃。

終夜はその男の行為を直ぐに予測し、《あの紅いグローブ》取り出し、球を撃ち落とした。

しかし、その後ろにいる人達までは守れなかった。

「痛い……」

「誰か、助けてくれ」

「なんで、こんなことに……」

終夜の耳に入る悲鳴や助けを求める声。

（俺は、また守れなかったのか…？）

その時、終夜の頭にとある情景が浮かんだ。

遠い幼少期の記憶。

どこを向いても辺り一面火の海。

その火の海の中に助けを求める人達の姿や声。

そして、目の前で嘲笑う犯人の顔を。終夜には、目の前にいる男の付けている狐の仮面があ那时的犯人と重なった。

「お前が…お前がぁ」

その時の犯人は、沢山の人達を巻き込んで既に死んでいる。しかし、終夜の頭は混乱していたため理解が出来ていない。

終夜は溢れんばかりの輝きを纏った紅い翼を出現させ、思いつきり地面を蹴った。

「終夜っ！！」

結衣が悲鳴にも似た声を出して名前を呼ぶが、終夜は止まらず、そのままの勢いで男の頭を片手で掴み、そのまま、壁に叩きつけた。が、終夜はそこで止まらなかった。

叩きつけたのにもかかわらず、そのまま壁に押し込み、轟音を轟かせながら壁に穴を空けそのまま外に飛び出した。

優一と結衣は終夜の後を追いかけて、終夜の空けた穴をから顔を出し、

終夜を捜す。

「終夜…どこに行ったの？」

声を震わせながら結衣は必死に終夜を捜す。

ここは二階である。

いくら、二階であるとは言ってもそこその高さがある。そんな所から飛び降りて無事であるわけがないのだ。

「あ!!あそこだっ!!」

そう言つて優一が指を指すのは下ではなく上の方向。

そこには紅い輝きを纏つた翼で羽ばたきながら、高速で移動する終夜だった。

まだ、男の頭は離していない。真っ直ぐ飛んでいく方向は、今朝の森の方向。

「終夜、もしかして誰も巻き込まないために…」

終夜の頭は完全に混乱していた。

現に、終夜の本気力で男を掴んで壁を打ち抜いた。

だが、混乱していながらも、誰も巻き込まないように身体が勝手に動いていた。

「結衣、終夜の行った場所分かる？」

「うんっ分かる。早く終夜を追いかけてよう」

優一は頷き、結衣と共に駆け出した。

デパートのとある部屋で男が1人いた。

「何があった。状況を報告しろ」

「いきなり背中に紅い翼を生やした少年に捕まり、そのまま移動中です」

「紅い翼…だと？もしかや《あれ》と同じような存在か？」

「恐らく、そうだと思われまます」

「ふ、ふはははは。実に良い！お前の力その少年で試すとしよう」

「了解です。博士」

「では私もそちらへ向かう。…《あれ》と同じような存在か…楽しみだ」

不適な笑みを浮かべながら、博士と呼ばれた人物はノートパソコンを手に取り、部屋を出た。

あらゆる思いが、一つの場所へ歩みを進め始めた。

高速で空を飛行する終夜と狐の仮面の男。

終夜の下に見えるのは緑一色。

つまり、森の上。

仮面の男はズボンのポケットの中からあるものを取り出し、終夜の腕に刺した。

だが、終夜は動じることなく手の力を決して緩めない。

しかし、終夜に刺さったあるものは注射器だった。

手に力がこもっているのにも関わらず、注射器にはみるみるうちに終夜の血液が溜まっていく。

そして、血液がある一定の量になった途端、その仮面の男は注射器を引き抜き、再びポケットにしまった。

(あれ？俺は一体今まで何を…？)

しかし、終夜は注射器に刺された痛みで意識が戻った。

終夜は辺りを見回す。

遠く後ろには街が見える。

終夜の下には森が広がっている。

そして、終夜の右手には、狐の仮面の男。

そこで、全てを思い出す。

あのデパートの惨状を。

街からは遠く離れている。

再び、街に戻せばまたあの惨状の繰り返す。

そのことを理解した終夜はこの仮面の男をここで止めることにした。

「うおおおおおー!!」

終夜は叫びながら急降下。

辺りの木をなぎ倒しながら、仮面の男を地面に思いっきり叩きつけた。

終夜は理解していた。

仮面の男も《人間》ではないことを。

仮面の男が叩きつけられた場所は大きくめり込み、クレーターが出来ていた。

終夜は直ぐに先ほどなぎ倒した木の枝を2本拾い終夜の力を流し込む。

すると、ただの木の枝は形を変え、羽のような剣となった。

終夜は先ほど自らの手で作ったクレーターを見る。

そこは砂埃が舞い仮面の男の姿が見えない。

急に響き渡る発砲音。

終夜は慌ててものすごい勢いで飛んできた鉛玉を撃ち落としした。

しかし、先ほどのデパートで落とししたものよりも、桁違いの威力だった。

砂埃がゆっくりに晴れていく。

仮面の男は怪我一つなく立って終夜に大型の拳銃を構えていた。

「弾丸の威力…調整完了…」

そう言うと、仮面の男は躊躇いなく終夜へ銃口を向け引き金を引い

た。

あまりの速さのため回避は不可能。
なので終夜はその弾を打ち落とすのではなく、グローブのプレート
面で受け流そうと考え、右手を構える。

弾がグローブのプレートに当たり終夜から弾は逸らすことは出来た。
が、弾がグローブに当たった瞬間、プレートが粉々に砕け散り、終
夜の右手は後ろに大きく仰け反る。

（威力が先ほどよりもさらに上がっている？…ヤバい！！）

終夜はすぐに残された左手を構える。
しかし、銃弾は飛んでこない。

右手のグローブのプレートを修正しながら、仮面の男を終夜は見た。

仮面の男は銃弾を放った瞬間にその銃の反動で右手が後ろに大きく
持っついていかれ、そして、拳銃を握り締めたままの右手がぶらんと力
無くぶら下がっている。

仮面の男の右肩は脱臼していた。

終夜はその光景を目の前にして驚くことしか出来なかった。
それだけの反動のあるものを躊躇なく放ったことと、
そして、自分の肩が脱臼しているのにも関わらず、平然としている
ことに。

仮面の男は左手をおもむろに右肩に手を置いた。
そして、とても大きな骨のこすれる音を何度も上げさせながら右肩
を入れ直した。

「右肩の調整：完了。引き続き、データ収集に入る」
あまりにも事務的に仮面の男はそう言い、再び、拳銃を両手で構え、
終夜へ向き直した。

両手で持つことにより、反動を小さくするらしい。

そして、再び仮面の男は拳銃の引き金を引いた。
呆気にとられていた終夜は咄嗟のことに行動が遅れた。

先ほどと同じように、銃弾を逸らすことはもう不可能。
先ほどと同じように右手を持っていかれる
弾を連射されたら、右手は間に合わないだろう。

「頼むから、保つてくれ！！」

終夜は両手に握られていた双剣を交差させ構える。
終夜の右手の剣の腹に銃弾が当たる。
終夜の剣はガラス細工のように粉々に砕けた。

しかし、左手の剣は罅が入る程度に済んだ。

だが、仮面の男は拳銃を再び構える。
両手で持っていたため、先ほどよりは反動を消すことは出来たが、
それでも、大きく頭上に大きく仰け反る。

終夜はその隙を見逃さず、一気に横に駆け出した。あの拳銃の威力
はとてつもなく高い。

あれほどのものを何度も何度も受けるのは不可能。

そう考えた終夜は全力で地面を蹴る。

全て、避けてしまえばいい。

どんなに威力が高くても、当たらなければ意味がない。さらに言えば、相手の武器は銃だ。銃である限り《弾》が存在する。

終夜は木々の間を駆け抜けながら、新しい木の枝をまた広い、羽の双剣を作る。

もうスピードで駆けながらも、仮面の男からは離れすぎないようにしなければならぬ。

何故なら、仮面の男が標的を終夜からまた、あの街の住人へ移す可能性があるからだ。

「本当にやりにくい相手だな」

終夜は思わず、率直に思ったことを口に出してしまった。

その時、終夜の背中に嫌な汗が流れる。

終夜は高速移動を止めた。

その直後、発砲音と共に終夜の目の前にある木々が粉々に吹き飛んだ。

先ほどよりもさらに威力が高まっている。

そして、恐るべきところは、

終夜の動きを完全に読み、正確に打ち抜いていること。

たまたま今回は運良く当たらなかったが、次、避けられるかどうかは分からない。

「なら、」

終夜はそう呟きさらに速度を上げる。

木々を蹴りながら縦横無尽に駆け巡る

終夜の身体は普通の人間の動体視力では捉えられないほどの速さである。

終夜はその速さを保ったままなるべく、音のしないように走る。

そして、しばらく走りまわった後、終夜は高い木の上で仮面の男が今どんな状況かを見る。

恐らく、終夜の位置は特定されてはいないだろうと思ったからだ。

終夜が仮面の男を見た時、

終夜と仮面の中の目と目があつた。

そして、また躊躇い無く引き金を引いた。

間違いなく、仮面の男は終夜の動きを全てを見切っていた。

思考の海に溺れていた終夜に弾丸が迫る。

終夜はそのことを思い出して再び双剣を目の前で合わせる。

しかし、今度は両方の剣がガラス細工のように簡単に砕け散った。

それでも、なんとか弾丸を逸らすことには成功したようだった。何とか逸らすことが出来た弾丸は終夜の横の木々を薙ぎ倒していった。肩で息をする終夜だったが、直ぐにあることを思い出す。

先ほどとは違い両手で拳銃を撃っているということ。

仮面の男は反動で上に持ち上がっていた両手を再び構え直し、終夜に銃口を向け引き金を引く。

終夜の眉間を狙った弾丸。

終夜をそれを、頭を後ろへ逸らすことでギリギリの所で避ける。

終夜は頭への一撃を避けた後に仮面の男を真っ直ぐ見つめ、動きを止める。

また仮面の男は構え直し、引き金を引き続ける。

胸、足、手、肩、至る所へ狙いをつけ引き金を引く。

終夜はそれを全てギリギリの所で避ける。

弾丸は真っ直ぐにしか飛ばないのだ。

つまり銃口の直線上にしか飛ばない。

弾丸の速さと威力はとてつもなく高いが、連射することが出来ないこともあり、終夜なら、ギリギリ避けることが出来る。

走り回るのを止めたのは、その動きをなんらかの方法で仮面の男が読み取っているからだ。

ならば、避けることに全神経を傾けて、相手の弾切れを狙う。

しかし、何発避けても拳銃の弾がなくなる様子はなく、何発も放ち続ける。

終夜の頬に嫌な汗が流れる。

(まさか、弾切れを起こさないのか!?)

終夜がそう考えた直後、仮面の男の動きが止まる。

来るべき時が来たと終夜は全力で地面を蹴り仮面の男へ近づく。

「一つの銃で駄目ならば、二つにするまでだ」

仮面の男はそう呟くと右手のみで拳銃を構える。

そして、いつの間にか現れた二つ目の拳銃を左手で構える。

右手の拳銃から弾丸が飛び出す。

突然の出来事と前進していたこともあり、胸目掛けて飛んできた弾丸を身体を無理やり捻ることでなんとか避ける。

しかし、直ぐに左手の拳銃から弾丸が飛び出した。

この崩れた体制から避けることは不可能。

双剣も破壊されている。

「保ってくれ、俺の右手!!!」

終夜は叫びながら右手の弾丸の前へ突き出す。

弾丸が右手のグローブへ触れた瞬間プレートが吹き飛んだ。

その衝撃を受け右手から血が溢れさせながら反動で後ろへ回される。

しかし、なんとか銃弾を逸らすことが出来た。

終夜は右手の痛みを歯を食いしばって耐え、前へ踏み込む。

(チャンスは今しかない!!!)

速度を一気に最大まで上げ、駆け出した。

仮面の男は銃の反動で両手は上へ持ち上げられている。左肩は脱臼しているが、右肩は何とか脱臼せずにいる。

上へ持ち上げられた右手を下ろし、再び構え直し引き金を引こうとする。

「うおおおおおつ！！」

構え直した右手を終夜は右足で回し蹴りで終夜から標準を外し、そのままの勢いで左手を打ち出す。

打ち出された左手は仮面の男の顔へ食い込み、木々を巻き込みながら後方へ吹き飛んだ。

吹き飛んだいった仮面の男の周りは砂煙で見えない。

「何とか、なつたか…」

終夜は肩で息をしている。

何とか一撃を当てることが出来た。

全身全霊の込めた一撃を。

はぁ、と息を吐き出しながら終夜は座り込んだ。

最初の地面へ叩きつけた時よりも遥かに強い力を仮面の男へ叩き込んだ。

恐らく、もう二度と動くことはないだろう。

「俺は、《また》人を殺してしまったのか…」

終夜はそう呟くと、両目から一筋の涙が流れる。

例え、無差別に人を傷つけ、殺した人間だとしても、命を取って良

いいことはない。

例え、自分自身が殺されるかもしれないとしても。

終夜は全てを救ってみたかった。

全てを救いたかった。

だが、自分自身の手で《再び》命の根を摘み取ってしまった。

自分自身の手を《人殺し》という風に汚してしまった。

「やはり、俺は《バケモノ》。人間の近くにはいけない存在なのかもな」

終夜はそう言い、涙を流しながら自嘲気味な笑みを見せた。

「このままいつそ、何処かへ消えようか」その時、結衣の泣き顔が目に見えなかった。

結衣との過ごした日々が頭に浮かんだ。

バケモノである終夜自身に再び幸せを与えてくれた結衣の顔が浮かんだ。

その時だった。

「各部損傷は有り。しかし、戦闘続行可能。高周波ブレードによる攻撃を開始する」

あの仮面の男の声が辺りに響いた。終夜はその声に驚き、声のする方を見る。

砂煙が晴れていき、そこには仮面の男が立っていた。

頭から血を流しているが、それに全く動じる様子なく佇んでいる。

そして、仮面の男は両手を前に突き出した。

小さな銀色の粒子が集まり、気が付けば仮面の男の両手には、片手で持つには大き過ぎる剣が握られていた。

終夜は一瞬、相手が死んでないことを喜んだが、直ぐに再び木の棒を2本握りしめ羽の双剣を作り出す。

あのままの男はあの剣を《高周波ブレード》と呼んだ。

《高周波ブレード》とは刃が物凄い速度で振動を起こし、切れ味が普通の刃よりも遥かに超越する。

仮面の男は先ほどのダメージをもとせず、終夜へ向かって駆け出した。

そして、振り上げた右手を終夜へ振り下ろす。

終夜はその攻撃を逆手に持った剣で受け流そうとするが、受け流す前に仮面の男の刃が終夜の剣をまるでバターにナイフを入れるかのように、ゆっくりとかつスムーズに切っていく。

その様子を見た終夜は慌てて左手の剣を横薙に払おうとするがそれも仮面の男の左手の剣によって防がれ、さらに切り込まれていく。

ちっ、と短く舌打ちをして終夜は切り込まれていく双剣から手を離し、両手で相手の腹に向かって打ち出す。

仮面の男はその衝撃で後ろ方向へ吹き飛ばされるが、空中で一回転をして着地をする。

高周波ブレードに終夜の双剣はバター当然の状態である。

もし、あれで切り裂かれれば恐らく死に致るだろう。

終夜は切れ込みの入った双剣を仮面の男へ投合し、一気に駆け出す。仮面の男はその飛んできた双剣を両手の高周波ブレードで捌く。

捌ききつた瞬間、終夜は一瞬で仮面の男の後ろへ回り込み、回し蹴りを浴びせ、吹き飛ばした。

その間に再び双剣を作り出す。

高周波ブレードには終夜の双剣は適わない。しかし、あの高周波ブレードは少し大き過ぎる。

なので、あの刃を全て回避し、手数で押し切る方法をとる。

そして、隙があれば重い一撃を当てる。

それが終夜の考えた作戦だった。終夜は仮面の男へ向け全力で地面を蹴る。そして、一気に間合いを詰める。

それに合わせるように仮面の男も右手を振り下ろすが、終夜はそれを紙一重で回避する。

終夜が回避したと同時に仮面の男は左手の剣で横薙に払うが、終夜はその剣の刃の横、つまり剣の腹に両手の双剣を叩きつける。

刃の部分でない所を叩いたにも関わらず、終夜の双剣は粉々に砕け散ったが、なんとか叩き落とすことを成功した。

そして、右手の双剣の残された柄を投げ捨てる同時に身体を半分捻り、その戻す勢いを使いながら、仮面の男の腹に右手を打ち込む。

全体重と捻りの反動を使った拳は物凄い力を纏っており、仮面の男は身体を「く」の字に折り曲げたまま飛んでいった。

そして、何本もの木々をへし折りながら吹き飛んでいき、木を折る勢いがなくなると、木に叩きつけられズルズルと地面へ降りてきた。

終夜は双剣を作り直しながら仮面の男へ近付く。

今の一撃はよほど効いたのか、仮面の男はすぐに起き上がろうとはしなかった。

「何で、あんなことをしたんだ？」

終夜は仮面の男の前に立つとそう切り出した。

もしかしたら、何か特別な理由があるかもしれないと思ったからだ。

しかし、終夜の思いも打ち砕かれる。

「データ収集だ」

あくまで機械的に何の感情も表さず口にする仮面の男。

「データ、収集だと？」

「そうだ、今、私達が行っているプロジェクトには必要なデータ、つまり私の戦闘データが欲しかったのだ。本当は日本の警察相手に探るつもりだったのだから」

「そのためだけに、関係ない人達を傷つけたのか？」

「ああ、私達にとってはとても大切なデータなのだ」

「…お前は、悪いことをしたと思わないのか」

「思わない。いや、何も感じない。私はあの御方の望み叶えるだけだ。ただそれだけのために生きている」

「…ふざけるなっ!!」

感情の抑揚も何もない、まるで何の感情もないような話し方で自分の考えを述べる仮面の男に終夜の感情は爆発した。

「たったそれだけのためにお前は人達を傷つけたのか!! 罪悪感も何も感じずにっ!!」

「俺はそんなの認めないっ!! 認めてたまるかっ!!」

終夜は右手を力いっぱい握りしめ、仮面の男の顔面へ叩き込んだ。その衝撃で狐の仮面は砕け散っていった。

第2話 6

カラン、と音を立てて終夜は双剣を手から落とした。

「…なんで、あんたが…」

終夜が見た狐の仮面に隠されていた素顔。それは、今日の朝出会った銀髪の青年だった。

「出来れば私も会いたくなかった」

銀髪の青年はそう言い、終夜を睨みつけた。

「私はあの御方のためなら何でもする。それだけのことをあの御方は私にしてくださった。」

「一体、何を…？」

想像もしてなかった人と再開し、いきなり話し始めた青年に終夜は困惑した。

「私は昔、大事故に巻き込まれて身体の大部分を失った。そんな私を救い、今まで育てて下さったのだ、あの御方は。ならば私はあの御方のために何でもする。例え人を傷つけること、殺すことも構わない。私は何も感じず、ひたすら任務を果たす」

先ほど同じような言葉。

しかし、終夜は怒鳴ることは出来なかった。

「だったらなんで、あんたは涙を流しているんだ？」

何故なら、青年の顔は涙で埋め尽くされていたから。

「私は何も感じない。感情を捨てたのだ。そして私は与えられた任務をこなす。お前と戦い戦闘データを手に入れる」

そこまで言うと、再び頬に涙が流れた。

そして、その流れた涙が地面に落ちた瞬間、青年は高周波ブレードを構え終夜へ向け駆け出した。

「（私は誰かが傷付くのはみたくない）」

終夜の心の中に目の前に迫る青年の言葉を思い出す。

振り下ろされる剣を何とか回避し、終夜は距離を取る。

「あんたは感情をまだ捨ててはいない！！その涙がその証拠だ。あんたはこんなこと望んじやないんだ」

「だまれ。私はtype 01。あの御方の為だけに生きる。私の望みなど知ったことか」

「もう止める！！こんなことしてもあんたが苦しいだけだ」

「それでも構わない。あの御方の役に立てるのであれば」

青年はそういうと再び終夜へ向け駆け出した。青年はあつという間に終夜に接近し、両手の剣を振り下ろす。

轟音と共に舞う砂埃。

「だったら…」

砂埃はすぐに晴れ、青年の一撃を紙一重で避けた終夜が呟く。

「だったら、俺が止めてみせる！！あんたの《心》を救ってみせる！！」

そついうと、終夜は右手に最大限の力を込め、振り下ろされた剣の横方向から拳を打ち出す。

終夜のグローブのプレート部が青年の剣に触れた途端に罅が入る。圧倒的な力の差。

青年の武器はとても高い力を持っている。だが、終夜は引かなかった。

「例え、この身砕けようとも、俺は…俺はあんたを救い出す！！」

終夜はグローブに罅が入っているのにも関わらず、さらに一步前に足を踏み出した。

そして、さらに拳を前に打ち出す。

「うおおおおお！！」

終夜の声と共に、終夜のグローブは粉々に砕け散る。

しかし、砕け散ったのは終夜のグローブだけではなかった。

青年の持っていた2つの剣、その2つ共が剣の中間部分でポッキリ折れていた。

肩で呼吸をする終夜、
武器をなくした青年、
肩で呼吸をしていながらも、武器を失った青年に自分は負けるはず
ないと終夜は思っていた。

「救う…だと？」

そういうと、青年は右手を握り締め、終夜の顔に打ち出した。
何ともないただの人間の一撃。
そう考えていた終夜は間違っていた。

終夜の顔にのめり込む一撃。
そして吹き飛ばされる終夜の身体。
何度も何度も地面を転げ回り、何とか止まる。

「みる。この強化骨格と人工筋肉により人間の限界を超えた身体能
力を。私はもう人ではない」

終夜はあちこち悲鳴を上げる身体に鞭打ち、青年の顔を見る

「私の名前は type 01。人間を超えたアンドロイドだ」

それは、何処か悲しそうに見えた。

「それに、私の力はこれだけではないぞ」
青年はそういうと、右手を前へ突き出した。

その時、銀色の小さな粒子が青年の右手に集まりだした。

青年の右手に粒子が集まり、集まった粒子が霧散すると、青年の右手には先ほど終夜が折った剣が握られていた。

「ナノマシンだ。目にも見えない小さな粒子が集まり、この高周波ブレードは形成されている。先ほどの銃もナノマシンで作ったものだ。ナノマシンは私の考えた通りのものを作り出してくれる」

先ほどの銃は威力を限界ギリギリまで引き上げ、創り出されたものだった。

もちろん、弾丸もナノマシンでできているので弾切れも起こらない。

「そして、私の体内にも同様のナノマシンが流れており、強化骨格や人工筋肉の動きを助長している。このようにな」

言葉が終わると同時に青年は終夜に肉薄し、回し蹴りを浴びせる。終夜は再び身体や頭を打ち付けながら転がっていく。

「分かったか。もう私は人間ではないのだ」

青年は終夜を睨み付けながらそう言う。右耳の後ろに指を当てた。

私だ。聞こえるか？ type 01

青年のナノマシンの力の一つ。
ナノマシン独自の無線だった。

右耳の後ろに指を当てることにより特定の人物と会話が可能。

なんでしょう？博士

データ収集は終わった。後は、そこにいる少年を排除しろ

…殺すと言うことですか？

そうだ。彼は危険すぎる。下手をすると私の研究の障害にもなるかもしれないからな

…了解です

「人間じゃない？いや、違う。あんたは人間だ」

青年は通信を終え、前を見ると終夜が頭から血を流しながらも、真つ直ぐ青年を見ながら立っていた。

だが、限界が近いのか足はガタガタと震えている。

「あんたには、まだ心が残っている。心がある限りあんたは人間だよ」

「貴様に何が分かる」

青年は吠えたと右手に持っている剣を横薙に払う。

鮮血が飛び、終夜の頬に一筋の赤い線が通る。

「分からないな。だが、これだけは分かる。あんたは今、悲しんでいる。悲しみ続けている。なら、俺はあんたのその悲しみの連鎖の終止符を打つ。悲しみの連鎖を救ってみせる」

「戯れ言を。ならば私は、お前を…殺す。あの御方もそれを望んでいるからな」「《あの御方》なんて関係ない。あんたは一体何がしたいんだ？」

振られ続ける剣を避けながら終夜は喋り続ける。

「言っているだろう。私に意志はない。あの御方の願いが全てだ」

「いや、違う。あなたはただ自分の心を押さえ込んでいるだけだ。その証拠があんたの頬に流れる涙だ。…あなたは本当はこんなことしたくなかつたんだろ？」

「…違う。私は…あの御方の意志に従う機械、アンドロイドだ。もはや《人間》と呼べる代物ではない」

「いや、先ほども言った通り、あなたは人間だ。それに俺を殺す隙なんていくらでもあった。でもあなたは俺を殺さなかった。いや、殺せなかった。あんたの中にまだ心がある証拠だ」

「何を言っている。私はあのデパートで沢山の人達を殺したのたぞ」

「いや、殺しちゃいないな。せいぜい怪我人が出たぐらいだ」

「終夜は少し冷えてきた頭であのデパートでのことを冷静に思い出した。」

青年が撃ち出された銃弾は斜め下方向へ撃ち出されており、当たったとしても足にしか当たらない。

足を撃ち抜かれて即死する人間は殆どいない。

さらに、あのデパートの近くには大きな病院もあるため直ぐに治療出来る。

「あんたにはまだ《心》があるんだ」

「「終夜っ！！」」

終夜はこの場にはしないはずの声のした方向を見た。

少し離れた木のしたで肩で息をする結衣と優一の姿があった。

「…なんでお前達がここに？」

「それはこっちのセリフだよ。終夜ひとりで勝手に行っちゃうんだもん」

結衣は頬を膨らませながら終夜に駆け寄る。

「…そうか、ならば私も覚悟をする」
銀髪の青年はゆっくりと語り出した。

「心を捨てる覚悟と…人を殺す覚悟を！！今から、ここにいる人を全て殺す」

青年はそういうと、剣を突き立てながら優一へ向け走り出した。

結衣の近くには終夜がおり、優一は離れた所にいた。

あまりに突然だった為終夜は出遅れた。
友の優一へ刃が迫る。

終夜は誰かが死ぬのは見たくない。
ましてや、大切な友ならなおさら。
終夜は全力で走った。

優一は目の前に迫る刃に驚き目を閉じた。しかし、痛みが来ることはなかった。

「いやあああああつ!!」

結衣の悲鳴が聞こえた。

優一は恐る恐る目を開ける。

目の前には刃の切っ先。

終夜の身体を刃が貫いていた。

刃の突き刺さった身体から鮮血が溢れ出す。
その刃は終夜の心臓を捉えていた。

急に青年の持っていた剣が霧散する。

それと同時に両膝を着き、うつ伏せに倒れる終夜。

「終夜っ！終夜っ！！」

結衣が駆け寄り、終夜を抱き起こす。

終夜の胸部に穴が開き、とめどなく血が流れていく。命が流れていく。

「終夜…お願い、目を開けてよう…」

結衣は大粒の涙を流しながら終夜を抱き締める。

しかし、終夜は目覚めない。

終夜は動かない。

もう既に、終夜は絶命していた。

こんなはずでは…なかった

青年は確かに優一へ刃を向けた。

しかし、命を奪うつもりはなかった。

ある程度の大怪我を負わせ、終夜達を撤退させるつもりだった。

終夜が優一の所へ来る前に、事をなすつもりでいた。

しかし、終夜の身体能力は青年の計算を上回った。

一度駆け出した力は慣性の力を纏い急に止まることは出来ず、結果、終夜を殺害してしまった。

これでもう、私は後戻りは出来ない

また助けられた。

優一は最初に助けられた時のことを思い出す。
あの時も迫り来る刃を身体を使って優一を護ってくれた。
そして、今回も。

しかし、もう、終夜は、動かない。

何故なら、死んで、しまったの、だから。

(なんでこうなってしまったんだ!!!)

優一は声にならない声を出して涙を流す。
自分のことを「バケモノ」と呼び、意外と料理が上手くて、ぶっきらぼうながらも優しくかった終夜はもう動かない。

(なんで?何で?ナンド?)

優一の目にとある人物が目に映る。

(ソウカ、アイツガスベテイケナインダ)

優一の右手には結衣と出会った時に出した黒塗りの湾曲した剣。闇を纏い、その軌跡を闇に葬る闇の剣。

そして、もう左手には、光を纏った真っ直ぐに伸びた剣が握られていた。

「オマエガイルカライケナインダ」

優一は一瞬で青年に近付いた。

優一に気付き、ナノマシンによって高周波ブレードを作り出すが、優一の回し蹴りを側頭部に受け、派手に転がっていく。

どうした。 type 01

少年と一緒にいた人物に蹴り飛ばされました。人間の力を凌駕しているため先ほどの少年と同類かと

そうか、くくくつならばお前の力を存分に試すでしょう

了解

青年は高周波ブレードを作り出し、優一めがけ構えた。優一が2つの剣を横方向へ振りかぶりながら青年目掛け駆け出す。

青年は先ほどよりも小さな高周波ブレードを両手に構える。

高周波ブレードとは、常に高速で振動している剣で、切れ味が鋭いと言ったが、実は「切る」のではなく「削る」ことである。

ナノマシンと言うごく小さな物質がそれぞれ振動する事により普通のものよりもさらに、細かく高速の高周波ブレードを作り上げている。

先ほどの終夜の双剣をも簡単に削り、砕いた。

それだけの剣を優一目掛け突き付ける。

優一は身体をひねり、それを戻す勢いをつけ黒と白の双剣を横薙に振り抜く。

それにあわせるように、青年も高周波ブレードを振り抜く。

高い金属音と共に2人の双剣の刃同士がぶつかり合う。

優一の剣も終夜の剣と同じく削られ、壊され…

なかった。

「なに？」

優一の黒の剣も白の剣も両方とも青年の高周波ブレードに切れ込みを入れていく。

まるで、ナイフでバターを切り裂くように切り込んでいく。

そして、切り込みを入れた所から、

黒の剣は切り込みから闇を吹き出し、高周波ブレードに纏わりつく。纏わりつかれた所から地面に落ち、風化させていく。

そして、白の剣。

こちらも切れ込みをいれた所から光が溢れ出し、焼き尽くし、空气中へ霧散させていく。

そして、その闇に飲まれたナノマシンと光に焼き尽くされたナノマシンが機能しなくなっていることを青年は知り、直ぐに高周波ブレードをナノマシンに分解し、その全てを身体能力の向上へあて精一杯距離を取る。

その距離、後ろへ20メートル。

既に人間の力を凌駕していた。

の、だが。

「ガアアアアアア!!!」

極限まで見開かれた目。

狂気に満ちた表情で、

青年までの20メートルという距離を一瞬で詰め、優一は回し蹴りを青年の腹へ叩き込んだ。

避けることも出来ずに、

ガードすることも出来ずに

その一撃を受け、青年は何本もの巻き込みながら吹き飛んでいった。

青年が吹き飛んだ先に優一は駆け出した。

そして、直ぐに青年の姿を確認すると、優一は地面を勢いよく蹴り一瞬で近付き、両手の剣を振り下ろす。

青年は直ぐに優一が追いかけて来ているのを気が付いており、両手が振り下ろされたのを見た。

そして、直ぐに体制を立て直し、振り下ろされる両手を受け止めた。

この2つの剣は危険だ

先ほどの高周波ブレードの様子を間近に見て、危険かつ不思議な力を持っていることは分かった。

ならば当たらなければいい

青年はそう考え、両手を受け止めたのだった。

が、そこで思考が止まってしまったいけなかった。

両手を振り下ろせないと分かると優一は右足で青年の顎を蹴り上げた。

顎から脳へ衝撃が伝わり、青年はたたらを踏む。

そして、優一は地面に下ろした右足を軸に半時計回転をし左足を青年の脇腹へ叩き込む。

その一撃を受けた青年は再び吹き飛んだ。

優一は既に人間の力を遥かに超えていた。

にゅっと音と共に白い頭が優一の腹から飛び出す。

そこから手をバタバタさせながら何とか這い出て、優一の前に立ちはだかった。

「ゆーいち、ダメだよ。もう止めて。これ以上その力を使えばゆーいちが力に飲み込まれちゃう」

白の少女サクヤが優一の前で両手を広げて立ちはだかった。

目を開けて見た

自分の周りには炎が燃え盛っていた

赤い、朱い、紅い炎が

しかし、不思議と熱くない

むしろ、暖かい

あまりの暖かさに

だんだん眠くなってきた

「今までご苦労様、本当によく頑張ったね」

「誰だ？」

まだ多少眠かったが突然の声に俺は聞き返してしまった

「もう十分だよ。後はゆっくり寝なよ。目を覚ましたらもう君を縛るものはなくなる。君は《バケモノ》じゃなくなるんだ」

訳が分からない

何を言っているんだ？

「君はもう十分苦しんだんだ。もう何もかも忘れて自分のことだけ考えなよ。自分の幸せを考えるんだ」

「君はもう、苦しまなくていいんだ。君には幸せになる権利があるんだ」

幸せ？

俺の幸せって何だ？

物心着く前に《あの》火災事件が起きて、俺は《バケモノ》になった荒れに荒れまくった俺の前に兄さんが現れて

兄さんに救われた

そして、兄さんの夢をついだ

みんなを救うって夢を

そして、出会ったんだ。

あの2人に

俺の大切な友、優一

そして、俺に幸せを覚えてくれた、結衣

「なあ、俺の幸せだけ考えろって言ったよな？」

「うん、そうだよ」「ならば、俺を《あそこ》へ戻してくれ。結衣の…結衣の隣へ」

「それは…出来ない」

「何でだ？」

「今すぐには無理だよ。少し君は眠って何年かしたらまた逢えるさ」

「駄目だ。俺は今すぐ結衣の所へ戻りたいんだ」

俺は胸に手を当てる

結衣の声が聞こえる

俺の名前を呼ぶ結衣の声が聞こえる

泣きながら俺を呼ぶ結衣の声

ならば、俺はそれに応えなければならぬ。

結衣に泣き顔は似合わない

結衣は笑顔が似合うんだ

俺は、結衣の笑顔が、好きなんだ

「…どうしてもか？確かに戻ることは可能だよ。でもね、さらに君は苦しむことになる。悲しむことになる。それに、二度とこの場所には戻れない。ラストチャンスなんだよ。」

君が《バケモノ》でなくなる最後のチャンスなんだよ。君が幸せに

なれる最後のチャンスなんだよ」

「別に、構わないさ。だってな、俺の幸せはあいつの隣に立ってあいつの笑顔を見ることなんだから」

「何故君は辛い道ばかり選ぶんだ！もう良いじゃないか、他の人なんて！君はもう充分すぎるほど地獄を味わったじゃないか！！まだ君は地獄を味わうつもりなのか！！」

「それでも、俺は、あいつの隣に居るって決めたんだ。例え、あいつの隣が地獄だったとしても、あいつが笑ってくれるなら、俺は頑張れる」

「…なんで、そこまで…」

「俺にとっちゃあいつは、結衣は大切な、人、だからな」

「…分かったよ。ここからの出方を教えてあげる。…君を呼ぶ声に向かって走るんだ」

「ああ、分かった。…それでアンタ、名前は？」

「ただの《バケモノ》って名乗っておくよ」

「じゃあ、《バケモノ》さんよ。俺は行くな」

俺は走り出した

結衣の声の聞こえる方向へ

ただ真っ直ぐに

「…どうかお願い、終夜。君の歩くその先にある《真実》を乗り越

えて。そうしたら君は…」

誰よりも強くなれるから

結衣は大粒の涙を流していた。動かなくなった終夜抱き締めひたすら涙を流していた。

「終夜、お願いだから目を開けてよう」一筋の涙の粒が終夜の頬に垂れた。

その時だった。

終夜の身体が炎に包まれる。

紅い炎に包まれる。

その炎に驚き、小さい悲鳴を上げながら結衣は終夜を放した。

炎はみるみる大きくなり、直ぐに霧散していった。

そして、その炎の中に立っている人物がいる。

大きな紅い翼を携えて、

髪は紅く腰のあたりまで伸びていた。

「ただいま、結衣」

「終夜っ！！」

他ならぬ終夜だった。

終夜の名前を何度も呼びながら抱き付いている結衣の引き離し、終夜は周りの状況を確認した。

「なんだ…これは？」

ところどころの地面は抉れ、

木々は数え切れないほどへし折れ、

砂煙の中には身体のおちこちから白色の液体、恐らく血液を流し生きてはいるものの動くことの出来ない銀髪の青年。

そして、有り得ないほどのドス黒い殺気を放ち、終夜の知っている顔とはかけ離れた表情を浮かべる優一。

両目から大粒の涙を流しながら優一の前に両手を広げて立ちほだかるサクヤ。

「終夜…」

結衣は終夜の服の袖を握り締めた。

全て、俺のせいなんだな

「大丈夫だ…」

終夜はそう言っていると右手を握り締めた。

だったら、俺は…

「俺がみんな救ってみせるから」

俺は此処に帰って来た理由の一つなのだから

終夜は結衣を安心させるため笑顔で結衣に話しかけ、結衣に握られていた服の袖の手をゆっくりほごいた。

「じゃあ、行ってくる」

そして、結衣の頭をポンツと叩くと終夜は駆け出した。

サクヤは分かっていた。

優一の力は暴走しつつある事を。

そして、

その力に飲み込まれ始めていることも。

つい最近出来た友達だが大切な友達だった人物がいた。

その友達は目の前にいる人物の手によって胸を貫かれた。それも助けられる形で。

優一は悲しかった。

苦しかった。

目の前にいる青年に大きな憎しみを抱いた。

そして、手に入れた力を酷使用する。

力を使えば使うほど優一は力に飲み込まれていっていた。

優一の精神世界が揺らいでしまうほどに。
そして、力に飲み込まれ続けたその先にあるのは精神崩壊。
優一が優一でなくなる。

なので、サクヤは止めたかった。

愛する人失いたくなかった。

手放したくなかった。

サクヤに外の光を与えてくれた優一が居なくなるのは考えたくなかった。

「お願いだよ、ゆういちい……。もう、止まってよう」
涙ながらの懇願も優一には届かない。

優一はサクヤを押し退けるために右手を振り上げた。
しかし、振り下ろされることはなかった。

「もう、やめるんだ、優一」
何故ならその右手を終夜が掴んでいたのだから。

終夜は優一の瞳を覗き見る。

優一の瞳は光を失い、黒い感情が渦巻いている。
行き過ぎた悲しみが行く先を失い、ただただ暴走している。

その暴走した結果がこの有様だった。

暴走の矛先となった相手はボロボロ。

そして、力をむやみに振り回し続けた代償なのか、優一の身体も悲鳴をあげていた。

普通、人間の筋力は脳である程度力を抑えられている。

何故なら、100%の筋力を使うとその筋力自体が痛んでしまうからである。

しかし優一は違う。

あまりの悲しみに、

あまりの悔しさに、

脳というリミッターを外してしまった。

そして、100%を超える力を振り回し続けた優一の身体の筋肉はとうに限界を超えていた。

身体の限界を超えた優一は立っているだけでも身体が痙攣を起し、足元はおぼつかない。

双剣を握り締めた両手には血が滲み、震えが止まらず、今にも落としてしまいそうである。

それでも、優一は止まらない。

止まることなんて出来ない。

あの悲しみやあの悔しさが全てなくなるまでは止まらない。

全てを吐き出して仕舞うまでは止まらない。

止められない。

例え、大切な存在のものが懇願しても届くことはない。

あの時の俺と同じ目をしているな…

終夜も一度、力に飲まれ、力に溺れ、全てを吐き出そうと暴走した

ことがあった。

自分を憎み、

自分の力を憎み、

周りの人間を憎み、

ただただ悲しくて、

ただただ悔しくて、

ひたすら、辺りに溜まりに溜まった感情を吐き出し続けた。

そして、ある人物に救われた。

「大丈夫だ。俺が救ってやるから」

見ていてくれ。兄さん

終夜は心の中で呟いた。

「ウガアアアツ!!」

優一は叫びながら、止められた手を振り払い、止めた人物、終夜に拳を振り下ろす。

優一の意識は既に闇の中。

誰の為に怒っていたのかも、

何が悲しかったのかも、

全て忘れて、ただただ力を振り回す。

泡のように弾けた感情をただただ吐き出し続ける。

弾けた泡が元通りになることはない。

振り下ろされた拳を終夜は避ける動作すらせず、もろに直撃する。人間の限界を超えた力の拳は、《バケモノ》である終夜にダメージを与えるには十分で、終夜はたたらを踏んだ。

しかし、終夜は直ぐ体制を立て直し、優一に近付く。

それに驚いた、優一は直ぐに回し蹴りを放つ。

回し蹴りは終夜でも受け止めきることが出来ず、青年と同じように吹き飛び、数メートル引き摺られて、止まった。

それでも、終夜は直ぐに立ち上がり、優一の方へ歩みを進める。

優一の方へ歩く終夜の顔は、優一の暴走に悲観した顔ではなかった。優一はまるで子供を見守る親のようなただただ優しい笑顔を浮かべていた。

「ゆーいち、もう止めてよう……」

サクヤの懇願する声が辺りに響く。

終夜はあの後も何度も何度も優一に近付き、優一に殴り飛ばされたり、蹴り飛ばされていた。

終夜の身体のうちこちらから血が溢れ、地面を赤く染めていた。

終夜と同じように、優一も拳から血を流し、肩で息をしていた。

終夜はあちこちから血を流しながらも先ほどと全く同じように笑顔を浮かべ、優一へ近付く。

ドウシテアイツハハンゲキシナイ？

優一は終夜の側頭部へ蹴りを放ち、終夜は木々を巻き込む吹き飛ばす。

ドウシテアイツハトマライナイ？

それでも、終夜は直ぐに立ち上がり、優一へ歩みを進める。

ドウシテアイツハホエンデイル？

ずっと、同じ笑顔を浮かべ、終夜は近付く。

ワカラナイ、ワカラナイ、ワカラナイ！！

優一は終夜に恐怖を感じ目の前に双剣を突き出した。

ズブリ、と音と共に双剣は終夜の身体を貫いた。

それと同時に《光》の炎と、《闇》の炎が終夜の身体を包み込んだ。背中から突き出た2つの剣は終夜の血で赤く染まり、血を地面へ滴り落ちて地面を赤く染め上げる。

《光》の炎と《闇》の炎が終夜の身体を焼いていく。

それでも、終夜は止まらなかつた。

2つの剣が身体に突き刺さっていこうとも止まらなかつた。

そして、優一の直ぐ前まで来ると、終夜の身体に纏っていた黒の炎と白の炎は終夜の身体から溢れ出た、紅い炎で掻き消えた。

「優一……」

「ドウ、シ、テ…」

終夜の呼びかけに少し反応を示した。
終夜は優一の肩に手を置いた。

優一は暗い暗い闇の中にいた。
闇の空間に独り佇んでいた。

憎イ憎イ憎イ

カナシイカナシイカナシイ
コロセ、コワセ、スベテハカイシロ
スベテハキダシテシマエ

そこは負の感情が渦巻いていて、
優一もその感情に従い、
ただただ暴れ続けていた。

友を失ったことを忘れてしまおうと、
この悲しみを忘れてしまおうと。

その時だった。

優一は肩に暖かい何かが触れたのを感じ取った。
優一の視界が移り変わっていく。
暗闇の世界から、光のある世界へ変わっていく。

優一はあまりの眩しさに目を閉じる。

そして、ゆっくりと目を開け、目に映った光景は、「終夜、僕、は、なん、てことを」

優一の握られていた双剣に身体を貫かれながらも、優一の目の前に立ち、肩に手を乗せた終夜の姿だった。

紅い翼はひとまわりも大きくなり、腰のあたりまで髪の毛の伸びてはいるが紛れもなく終夜だった。

「僕、は、ぼくは……」

優一の手にはサクヤを外に出すときに使った双剣。

そして、その剣を通じて優一の手も終夜の血で濡れていた。

その時だった。

優一の2本の剣の先から再び《白》と《黒》の炎が溢れ出し、終夜の身体を焼き尽くす

優一はそれを目の当たりにし、焦り、どうにか抑えようとする。

しかし、優一の2つの炎が収まることはなかった。

《白》と《黒》の炎に焼かれても、

身体を貫かれ、血で地面を濡らしながらも、

それでも終夜は微笑んでいた。

「くそつ、止まれ！！止まれよ！！」

優一は必死に炎を止めようとするが、全く衰えることなく燃え盛る。

スベテヲヤキツクセ

スベテハカイシロ

一度は収まったはずの音が優一の頭へ響く。

「終夜っ！！僕は、僕は！！」
優一は頭の中に響く声に意識を引っ張られ、錯乱し始めた。
その時だった。

「落ち着、け、ゆっい、ち」

身体を貫かれ上手く話すことの出来ない終夜が微笑んだままでゆっくりと言葉を紡ぎ出す。

「《力》を、恐れ、るな。自分を信じ、ろ。お前、なら、きっと大丈夫、だから」

そして、終夜の身体は前へ傾き優一の肩へ頭が乗る。

もしもの時は、俺が全て受け止めてやるから

とても小さな声だが、優一の耳へ入るのには十分だった。

全て受け止めるだって？既に満身創痍、いや、死にそんな怪我をおっているのに

ドクン

なんで、そうやって終夜は自分を平気な顔で犠牲にするんだよ

ドクン

なんで、僕のためにそこまでするんだよ

ドクン

だったらもう、やること一つじゃんか

「止まれっ！！止まれよっ僕の力っ！！これ以上……」

優一は握っていた剣の柄から手を離し、燃え盛る刀身に手を伸ばす。

「僕の大切な友達を傷つけるな！！」

そして、その燃え盛る刀身を握り締めた。

スベテヲ憎メ

スベテヤキツクセ

スベテハカイシロ

その瞬間、意識が刈り取られそうになるほどの狂気が優一を襲う。全てを忘れて、何もかも破壊したいとの気持ちが増大していく。

しかし、刀身を伝う血の感触で思い出す。

「うるさいっ！！」

優一は狂気の声を振り払う。

「何対してあなた達が憎んでいるかは僕には分からない。でもね……全てを破壊なんてさせない。僕の大切なものを、人を、傷つけるなんてさせるもんか」

徐々に炎の勢いは弱まっていく。

「僕はあなた達を恐れない。僕は逃げ出さない。これ以上、僕の大切なものを傷つけるなら僕はあなた達を許さない」

「分かったかあ!!」

優一が叫んだ時には、《白》と《黒》の炎は消えていた。白と黒の炎は消えた瞬間に白と黒の双剣も消え去った。

とりあえず終夜を包む炎は消えた。

だが、終夜の傷が消えた訳ではない。
終夜が無事な訳ではない。

終夜の身体には2つの風穴が開いており、止まることなく、血が溢れ出る。

そして、終夜は後ろへ倒れた。

「終夜つ!!」

双剣の刀身に手を触れたので優一の手のひらからも血が溢れ出ていた。

だが、圧倒的に出血量が違う。

優一は痛みをかみ殺しながらも終夜のそばへ近づく。

終夜の身体に手が触れる瞬間、終夜の身体を紅い炎が包み込んだ。

その色は、終夜の背中から生えた翼の色と酷く酷似していた。

その紅い炎に優一は驚き、尻餅をついた。遠くで見ていた、結衣とサクヤもただただ驚き、終夜を見ることしか出来なかった。

そして、終夜はその紅い炎の中で、
身体に風穴を開けたままの終夜が

ゆっくりと膝をついて座った。

その時、終夜の身体に異変が起こる。
先ほど優一が突き刺した傷にさらに紅い炎が集まり、傷口をなぞるように炎が動く。

そして、傷口をなぞった炎の通った後には、傷口なんて初めからなかった言わんばかりの身体があった。

傷が消えた後、終夜がゆっくりと立ち上がる。
まるで、紅い炎の中から生まれたと言わんばかりの姿だった。

「やっぱり…そうだったのね」

背中の子な紅い翼を広げた姿まるで、

「あなたが、火の鳥、《不死鳥》だったのね」

終夜の包んでいた炎が徐々に小さくなり最後には消えた。

つまり俺は死ねなくなっただってことか

終夜の姿を確認して駆け寄る、結衣と優一。

それでも、俺はこの道を選んだんだ

終夜は右手を握り締め、真っ直ぐ見据えた。

だって、こいつらの笑顔が見たかったのだから

終夜はその右手を離し、笑顔でこちらへ走り寄ってくる2人を迎えた。

2人が駆け寄ってくる。

が、終夜に飛びついてきたのは何故か一人だけだった。

「しゅうやあ〜」

涙と鼻水でぐしゃぐしゃの顔になりながらも終夜の胸に顔を擦り付ける結衣。

ならば、優一はどこに行ったのか？

「お〜い、大丈夫か優一」

優一は終夜へ駆け出して直ぐに転び、全く動かなくなった。

「身体が、動かない〜」

優一の悲痛の声が辺りに響く。

それもそのはずであった。

優一は人間の使用するはずのないほどの身体中の筋肉を酷使した。

許容範囲を超えた力の反動として優一は身体が動かない。

動かすことが出来ない。

だが、不幸中の幸いにも、筋肉の断裂などはなかった。

せいぜい、全身の筋肉痛ぐらいだった。

そんな、動けない優一を見て、終夜と結衣は笑いあった。

今回は終夜が優一の暴走を止めたので筋肉痛程度ですんだ。
終夜が止めていなかったら、恐らく身体中の筋肉が断裂し、骨は軋み、
もしかしたら、取り返しのつかないことになっていたかもしれなかった。

優一は筋肉痛で痛い身体を何とか起こし、終夜のそばまでゆっくりと歩いてきた。

「ありがとう、終夜。おかげで助かったよ」

終夜の横まで歩くと直ぐに座り込んだ優一が頭を下げた。

「気にするな。俺は自分のしたいことをしたまでだ」

その時、終夜の前を白い何か横切り、優一へタツクルをかます。

「ゆーいち、大丈夫？」

「今の、タツクルが、大丈夫、じゃないかも……」

恐らく泣いていたのだろう半分鼻声でサクヤは優一の胸に飛び込む。

優一の無事を嬉しくしたことだったが全身筋肉痛の優一には強力過ぎる一撃だった。

「ごめんなさい…でも、本当に良かった」「うん、ごめんね。心配かけて」
優一は優しくサクヤの白くて柔らかい髪を撫で、新しく零れる涙を優しく拭う。

「なんてザマなのだ。type 01」

その時、一人の男の声が辺りに響いた。

終夜達は声の聞こえた方向へと目を向けた。

その目を向けた先に、白衣を着た一人の初老を迎えたであろう男が立っており、銀髪 of 青年を見下していた。

「すみません、博士」

青年は動かすのも大変であろう身体を何とか動かし、片膝を着いた。身体をあちこちからは恐らく青年の身体を巡る血液なのだろう白い液体が流れていた。

「そのような言葉が聞きたいのではない。お前はその程度の《物》であっただけのことだったということ」

「申し訳御座いません、博士。もう一度私にチャンスをご覧ください。次こそは…」

「…《チャンス》だと？」

その言葉を吐き出すと、初老の男は額に手を当てて笑い出し、

「そんなものあるわけないだろう。私のなかではもうお前を《破棄》する事は決まっているのだよ」

「…そ、んな」

「当たり前だろう。使えない《道具》など持っていても邪魔なだけだ。そうなったら、普通は《捨てる》だ…」

「…ふざけるな」

終夜の小さいながらも怒りに満ちた声が辺りに響いた。

「ふざけてなどいないさ。《バケモノ》君。君だってゴミは捨てると教わっただろう?」

「違う、こいつは《物》なんかじゃない。人間だ」

「ならば、《バケモノ》君。君はコレを見ても人間と呼べるのかい?この白い血を流す、感情も捨てた人間を」

「ああ、言えるさ。こいつは人間だ。それにこいつの心はまだ消えていない。」

「そうか、まあ今となってはどうでも良いことだが、な」

その言葉を最後に初老の男はどこからか出したパソコンに何やら打ち込んだ。
その時だった。

強制破棄システムを起動します

恐ろしいほど機械的な声が響きわたった。

「なっ!?!」

終夜達から驚きの声が漏れ、
銀髪の青年は顔を青くする。

青年の少し前の所へ白銀の粒子ナノマシンが集まりだす。

「早く君たちも逃げたまえ、まあ、もう間に合わないだろうがな」
そこまで言つと、初老の男はくくくつと笑つ。

「お前、一体何をした?」

「簡単だ。その《道具》を焼却処分するための物さ」

「《焼却処分》だと?」

「そつだ。…ナノマシンは原子レベルの大きさでな。好きな物質を
作ることが出来る」

それは、終夜は終夜も知っている。

実際に青年はナノマシンを使って色んな武器を作り出していた。

「…例えば、半径50キロを焼き尽くす小型の《核爆弾》とかな」

その言葉を聞いて終夜達の顔も青くなっていた。

半径50キロ、それは終夜達の街を焼き尽くす範囲に入っている。

「っざけるな、直ぐに止めろおっ!!」

終夜は拳を振り上げ、初老の男に殴りかかるが、終夜の拳は初老の男の身体をすり抜けてしまう。

「無駄だ。私はもう安全な所にいるからな」

あっけらかんと、初老の男は応える。

そして銀髪の青年の前まで移動し、ゆっくりと話始めた。

「昔の話聞かせてやろう、type01。かなり前から私のナノマシンの計画は進んでいた。完成間近の事だ。とある夫婦に私の計画は邪魔されたのだ。《ナノマシンは危険だ》などと言い出した。そして、周りの人間も奴ら夫婦の意見に賛同し私の計画は駄目になったのだ。」

そこで一旦区切ると初老の男はまた言葉を紡ぎ出す。

「…私は心底恨んだよ。あの夫婦をな。そして私はある作戦を考え実行し、事故に巻き込んだように見せかけ、奴ら夫婦に復讐を果たしたのだ。だが、その夫婦には子供がいた。直ぐに殺そうと思ったが、すぐに私は考えを改めた。この子供をナノマシン計画の最終段階である人体実験に使うとな。そして、その子供は年をそんなに取っていないかったこと、奴ら夫婦の代わりに面倒を見ていたせいか私になついていた。」

「今まで役に経ってくれてありがたかったぞ。type01」

そう言った初老の男は歪んだ笑みを浮かべていた。「type01。お前が私に懐いてからな、私はあることを考えたのだ。どうせなら、

お前を使ってナノマシン計画を完成させようとな。そのためにお前の《感情》を消した。あくまで、私の言うことだけを聞くようになる。そしてお前の感情を見事に消すことができ、お前は私の《道具》になったのだ。私はナノマシン計画の最終段階である《人体実験》に踏み込んだ。そして私のナノマシン計画は完成したのだ。」

ぎりつと歯軋りが響く。

音の主は終夜だった。

それでも初老の男は話を続ける。

「欲しいデータは揃った。だからもうお前は要らないのだよ。私の前から……」

「ふざけるな……」

ピリピリとした空気が辺りを覆う。

「お前はそんなことの為に……そんなことの為に……!!」

終夜は叫びながらひとまわり大きくなった紅い翼を羽ばたかせ、右手を上には振り上げる。

その際に終夜の紅い翼の羽が宙に舞い、空中で動きを止まった。

そして、その羽達は大きくなり、終夜が使っていた剣へと形を変える。

「こいつを利用したのかっ!!」

終夜は声と共に右手を振り下ろした。

振り下ろすと同時に宙に止まっていた剣が一斉に初老の男目掛け飛んでいき突き刺さる。

その余りの衝撃に土煙が辺りを覆う。

「そうだ。私は最初からそのつもだったのだよ。《バケモノ》君」
何事もなかったように初老の男は晴れた土煙の中から現れた。
それもそのはず、初老の男はここにはいない。
あくまであれはホログラムであり、実態はないのだから。

「さて、《焼却処分》の準備もそろそろ終わりそうだ。」
初老の男の口は歪んだ三角を描き、

「それではさらばだ」
その言葉を最後に初老の男は掻き消えた。

初老の男が言った通り、凝縮されたナノマシンは光を外に放ち始めていた。

「そ、んな…」

ドサツと、音を立てながら銀髪の青年は両膝を着いた。
既にその瞳の中の光は消え去り、
絶望で染まりきっていた。

信じていた人に騙されていた。
自分の恩人だと思っていた人に裏切られた。

type 01と呼ばれた青年は一筋の涙を流すこともなくただただ
佇んでいた。

「ふざけやがって!!」
終夜は怒りに身を任せ、地面を力いっぱい殴りつける。

「終夜！！それよりもあのナノマシンをどうにかしないと！！」優一の一声に終夜は我に帰り、ナノマシンを見る。ナノマシンは10センチ程の球体状に圧縮され、光が中から漏れ出していた。すべてを焼き尽くす光が。

終夜は両膝を着いている青年の元へ駆け寄った。

「あんただったら《あれ》の止め方が分かるだろう？頼む！！教えてくれっ！！」

「私は、ワタシは…一体どうしたらいい？何を信じて生きていけばいい？博士の言うとおり私は死ねばいいの…」

青年の言葉が最後まで紡ぎ出されることなく青年の頭は横にぶれた。

「…死ねばいい？ふざけるなよ」

ぶれた理由は終夜が青年の顔を殴りつけたからである。

「人の命は誰でも平等だ。人の命は《モノ》なんかじゃない。あんたは《道具》なんかじゃない。あんたは《人間》だ」

「なら私は何を信じたらいいい？誰の命令を聞けばいい？何に縋ればいいのだ？」

「そんなこと俺が知るか。だがな、何かに縋る必要はないと俺は思う。誰の命令も聞かなくていい俺は思う。そんなこと考えるなら、《誰か》の為じゃなくて《みんな》のために動けばいい。」

「みんなのため…」

「そうだ。あんたは誰か1人の為だけに生きて来たんだよな。それだったら1人に限定するのではなく、周りのみんなのために動いてやってくれ。誰を信じるとか、誰に縋るとか、そんなのは後回しだ」

そこまで言うと、一旦終夜は言葉を切り、

「あんたは誰かを救うことが出来るだけの力を持っているのだから」

「《救う》…？そのために私は何をすればいい？」

「それはあんたが考えることだ。…と言いたい所だが、今はあれの止め方を教えてくれ」

終夜は先ほどよりも光を放つナノマシンを指差しそう言った。

《焼却開始まで30秒前です》

無機質な声が響きわたった。

勿論、声がしたのはナノマシンのほうからだった。

「分かった。私が、《あれ》を止めよう」

青年は右手をナノマシンのほうへ手を伸ばし、ナノマシンの制御しようとする。

ナノマシンを自由自在に扱っていた青年なのでナノマシンを止めることも簡単なのだろうと誰もが思っていた。

…だが、

「…っ！？制御できない!？」

青年の顔を歪めながら、そう言葉を吐き出す。

その一言に優一達は驚きの声をあげる。

終夜は少しの間俯き直ぐに頭をあげ、

「なら、俺が《あれ》を持ってここから急いで離れる」

その一言に更に驚き、声も出せない優一達。

「無理だ。あれの焼却範囲は半径約5キロメートル。残された時間でそれ以上離れることは不可能だ」

だが、直ぐに終夜の考えは却下される。

「なら、一体どうしたらいいっ!?!」

《焼却開始まで後、10秒です》

終わりへのカウントダウンは鳴り響いていた。

「そろそろか」

初老の男はパソコンの画面は見ながら呟いた。

「まあ、あいつはなかなか役に立ってくれたな」

男の口が三日月状に歪む。

「さて、私を最終段階に移るとするか」

おもむろに立ち上がり、とある人ひとり入りそうなカプセルの前に立つ。

そのカプセルの中には液体が入っており、そしてその液体の中に人と同じ位の大きさの真っ赤な狐のような生物が入っていた。

「ふふふ、はははははー！」

男の笑い声が部屋に響く。

そのせいか男は気が付かない。

先ほどまで見ていたパソコンの中にあつたはずの何かがなくなつていたことに。

《焼却処分専用ナノマシン》が真っ白に上書きされ、削除されていたことに。

《焼却開始まで、後10秒です》
残酷なまでに無機質な声が響く。

《ナノマシン》を止める方法はもう残されていない。

「くそっ！！俺は…俺はまた誰も救えないのか…」

終夜の悔しさに満ちた声と同時に地面を殴りつける音がした。

他のみんなも同じような顔をし、絶望に染まった表情をしていた。

ただ1人を除いて。

「ねえ、優一。《あれ》はあなたにとっては要らない物？」

「えっ？」

いきなりの声に驚く優一。

声を出したのは他でもない、サクヤだった。

「いや、確かに要らない物だけど…」

「なら、《あれ》消してもいい？」

サクヤはナノマシンを指差しながら優一に尋ねる。

「寧ろお願いしたいとこだけど、でもどうやって？」

「分かった。じゃあ優一。少し私から離れてて」

優一の全ての質問に答えることなく優一が少し離れるのを見てからサクヤは右手をナノマシンに向け伸ばす。

《焼却開始まで、後5秒です》

絶望へのカウントダウンが始まったその時だった。

サクヤの右手首に白いリングが現れ光を放つ。

そのリングを中心に白い半透明状の花びらのようなものがいくつも形成され、右手の前にこちらも白い半透明状の小さな砲台が現れ、球体を作り出す。

「優一。見てて、これが私の本当の《力》…」

まるで囁くようにサクヤは呟いた。

バチバチと光の球体は更に大きくなり、サクヤの右手から放たれる。

「無理だ！…どちらにしても爆発するだけだぞ！…」

突然のことに銀髪の青年は狼狽え、声を上げる。

《焼却開始まで、3…2…》

カウンタダウンをしていたナノマシンにその光の球体が激突する。その瞬間、強烈な光が辺り一帯を照らし、終夜達はその光に手を翳してよける。

強烈な光は数瞬後に収まり、終夜達はゆっくりと目を開ける。

そこにあつたはずのナノマシンは姿を消しており、右手をゆっくりと降ろすサクヤの姿があつた。

「…消えた？」

誰が発したのかは分からないがそんな言葉が零れた。

数秒前までは破壊の光を辺りに撒き散らしながら輝いていたナノマシンが跡形も残らず消え去っている。

まるで存在が消えたかのように。

「…有り得ない。まさかこんなことが…？」

銀髪の青年は目の前の状況が理解が出来ず呆然としている。

「サクヤ…今のはいったい何？」

優一はサクヤに近付くために一歩踏み出したその時だった。

あの砲台のような右手を消して下げ終わったサクヤの身体がグラリと揺れ後方へ傾く。

その瞬間、優一は駆け出した。

一步地面を蹴る度に先ほどの青年との戦いでボロボロになった身体に悲鳴をあげる。

だが、そんな痛みもお構いなし優一は駆け抜け、

「サクヤっ!!」

地面とサクヤの間に滑り込む形でサクヤの身体を受け止める。

「ゆー、いちい？」

弱々しい声でサクヤが答えた。

「サクヤ、大丈夫!？」

優一は肩で呼吸ながら尋ねる。

「ごめんね、ゆーいち。この力使うとスッゴク疲れちゃうんだ。だからね、」

「少しだけゆーいちの胸で眠らせてね」

そう言い終わると同時にサクヤは目を閉じた。

優一は一瞬最悪の状態が頭に浮かび狼狽えながらもサクヤの様子を見て胸が規則正しく動いていること確認し、ホッと胸をなで下ろした。

「なあ、あんた。ナノマシンがどうなったのか分かるか？」

終夜は呆然としている青年に訪ねる。

「い、いや、私にも何が起こったのかは分からない。ただ、あのナノマシンがどこかに飛ばされたわけでもなく、壊されたわけでもな

く、ただ《消えた》」

「はあ？」

終夜は意味が分からず首を傾げる。

「破壊されたのなら何かしら跡が残る。飛ばされのならナノマシンの反応は残るはず。だが、跡も残さず、反応も残さず、ただ《消えた》のだ。まるで…」

「初めから存在がしなかったかのように」

青年の言葉に終夜はただただ優一が抱きかかえる少女を見ることしか出来なかった。

第2話 終

「私の出来る事はもうない。ならば」

青年はおもむろに眩き、両膝をついた。

そして、首の前で両手を合わせる。

その両手に握られていたのは青年の中に残っていたナノマシンで作られた短剣。

それを勢いよく首へと突き立て…

「何をやっているんだ、あんたは」

れなかった。

終夜がその短剣の刃の部分を握り締めていたから。

「何故止めるのだ。私は何も出来なかったのだぞ。やはり誰かを救うことなど無理なのだ」

「確かに何も出来なかったかも知れないけどな、何も死ぬことはないだろ」

「そうだよ。死んだら何もかも終わりだよ」

いきなり聞こえた声に多少終夜は驚きながらも声のした方を見ると涙目の結衣が立っていた。

「死んだら、話をする事も出来ないし、温もりを感じることも出来ない。何もかも終わっちゃうんだ」

結衣は青年の横に中腰になり青年の握り締めている短剣の指を一つ一つ外していく。

「終夜は誰かの為に生きろって言うけど、私はそうは思わない。私はただ生きていて欲しい。誰かの役に立たなくても。誰かを救うことが出来なくても。ただただ生きていて欲しい。それが…」

「私の願いかな」

涙目を両目に堪えながら微笑む結衣の顔はただただ美しかった。

(ごめんな、結衣。それでも、俺は…)

結衣の言葉一つ一つは目の前の青年にだけ向けられたものではなかった。

その言葉は終夜にも向けられていた。

それを理解していた終夜は心の中で1人謝っていた。

「それでも、私は…」

「…それなら」

青年が否定の言葉紡ぎきられる前に結衣は再び話し始めた。

「私達のために生きて。あなたが死ぬと私達は悲しいの。だから、お願い」

結衣は、青年の手を取り目の見る。

青年の瞳は動揺が広がっていた。

「私の名前は結衣って言うの。ねえ、あなたの名前は？」

「…type01」

「そうじゃなくて、本当の名前は？」

「…いや、私は博士にずっとこう呼ばれていたから本当の名前など分からない」

「…」

「えっ？」

2人の声が重なる。

「なんていいんじゃないか？」

終夜は何故か納得した顔で話していた。

「なんで一なの？終夜？」

突然提案した終夜に結衣は理由を訪ねるが、

「…なんとなくだ」

ボソツと終夜は呟いた。

適当な感じを醸し出している終夜を結衣はジトツとした目で睨み付けていたのだが、

「か…分かった私はそう名乗るとしよう」

とうの本人である銀髪の青年は気に入ったらしい。

「なら、ハジメさん」

少し誇らしげな顔をしている終夜の顔見て、はあくっと軽く溜め息を吐き、再び気を引き締めながら話し始める結衣。

「あなたはこれからいったい何がしたいの？」

結衣の質問にハジメは眉間にシワを寄せ考えるが、

「私にはやりたいことがない。それどころか、何をすればいいのかわからない」

ハジメの頭は自分のことを考えることが出来なかった。

今までずっと博士と呼ばれるあの男の言うことをひたすら聞いていたおり、常に博士のことを、成果のことを考え続けた。

その結果自分のことを考えることを止めてしまった。

「ならね、一さん。私達と一緒に暮らしてみない？良いでしょ、終夜？」

「ああ、別に構わないぞ。居候が1人が2人になるだけだ」

ハジメの顔が驚きに染まる。

「ひどい！！わたしは居候なんかじゃないよ！！…あつ、あとついでに絶のこと忘れちゃ駄目！！」

「立派な居候だろうが。後、絶は人言うよりハサミだろ。というかお前、絶のこと殆ど忘れてたよな」

「そ、そんなことないもん…で、どうハジメさん」

軽口を叩き合う結衣だったがすぐに本題に戻す（話題を逸らす）結衣。

「…何故お前たちはそこまでする。仮にも私はお前を殺しかけたのだぞ」

「そんなの関係ない」

「終夜がそう言うのなら私も気にしない。それに、私達はハジメさんのしたいこと、やりたいこと、つまり生きる意味と一緒に探したいの。だって名前教えあつたらもう私達はもう《お友達》だもん」
結衣は屈託のない笑顔でそう語った。

「ともだち？友達とはいったいなんだ？」

ハジメは首を傾げる。

「うん。友達の定義がよくわからないけど、」

結衣はハジメに微笑みかける。

「私は一緒に支え合って、一緒に楽しく生きることが出来るそんな存在の人のことだど私は思うよ。だから、私達がハジメさんを支えてあげる。一緒に生きる意味を探してあげるの」

「…私は人間ではない。アンドロイドだ」

「そんなの関係ない。俺だって《バケモノ》だ」

終夜は自嘲的な笑みを浮かべながらそう言うのだが、

「もうっ！！2人ともそんなこと言わないで！！私から見たら人間だし、それにそんな些細なこと関係ないよ」

結衣の逆鱗に触れ、いそいそと小さくなる終夜。

「で、どうかな？ハジメさん、一緒に暮らしてみない？」

直ぐに怒りを落ち着かせハジメに右手を差し出す結衣。
しかし、

「…断る」

「えっ!?!」

結衣の手は握られることはなかった。

「…なんでっ！？ハジメさん!？」

「…友達だからだ」

理解が出来ず、首を傾げる結衣と終夜。

「友達だからこそ、私は結衣達に迷惑はかけられない」

「そんな迷惑だなんて…」

「それに…きつとこの《現状》を知った博士が私の元に来るだろう。恐らく私は破壊するために」

博士の考えたナノマシンによる核爆発はサクヤの力によって免れたが、それを知った博士は再びハジメの元に訪れ、何があったのを聞き出し、ハジメを破壊するだろうとハジメは考えた。

「私は友達である結衣達をもう巻き込みたくない」

そう言つとハジメは地面を勢いよく蹴り後方へ飛び、木の枝の上に乗る。

「そんなっ！？ハジメさんっ!？」

「だが、安心してくれ」

「私はきつと生きる意味を見つけ、ここに戻って来る。それまではさよならだ」

そう言つたハジメの顔はどこか微笑んでいるように見えた。

そして、次の瞬間に再び跳躍し森の奥へとハジメは姿を消した。

「バイバイ…ハジメさん。また会う日まで」

軽く涙を両目に抱えた結衣がハジメの行った方向を見つめ小さく呟いた。

「終夜」

突然の声に終夜は声の主の方へ振り返る。

そこには、片手でサクヤを抱きしめ、もう片方の手を振りかぶる優一の姿があった。

その次の瞬間、終夜の視界はぶれ、尻餅を付く。

目の前の優一は恐らく身体中が疲労していたのであろう、肩で息をしていた。

その時終夜は理解する。

優一に殴られたのだと。

「なんであんなことをしたんだ!!」

優一の精一杯の怒鳴り声。

あんなこととは、ハジメが優一へ攻撃した時に終夜がその間に入り、自分の胸にハジメの持っていた剣を突き刺したこと。

「確かに僕は助かったよ!!でも、終夜は下手をすれば死んでいたのかもしれないんだ!!」

優一の豹変に結衣も優一の名前を呼び落ち着かせようとするが、優一の叫びは続く。

「終夜が死んだら、残された結衣は、絶は一体どうするつもりなん

だ！！どれだけ僕達が悲しむのか分からないのか！！」

「ゆ、優一」

終夜はただただ呟く事しかできない。

「君の、終夜の命はそう簡単に捨てて良いものじゃないんだよ……」
最後の優一の声は掻き消えてしまいそうなほど小さかった。

そして、優一の頬には光る雫が流れていた。

「…優一の気持ちはよく分かった」

終夜の声に優一と、また優一と同じ思いであった結衣が終夜の顔を見る。

「…けど、駄目だ。俺はまた目の前で死にそうな、殺されそうな人を見て、見捨てる事が出来ない。きつと自分の身体を盾にしても守るし救うだろう」

「な、なんで、終夜」

驚くべき発言を聞き、すでに涙声の結衣。

「何故なら、人を救うこと、人を守ることが俺の夢なんだ。」

そこでいったん区切り、

「《バケモノ》である俺の生きる道なんだ」

終夜はきっぱりと言いつつ放った。

「でもだからって自分の命な投げ捨てなくなつていいじゃんか！！」
優一は再び吠える。

「終夜の命は一つしか…」

「それにな、優一…」

優一の声を手切り、終夜は言葉を続ける。

話す終夜の右手には、羽をかたどったような一振りの剣が握られていた。終夜はその剣を逆手に持ち替え、自らの胸に深く突き刺し、引き抜いた。

「「っ!?!」」

突然目の前に起こった出来事に2人は声をあげることすら出来ない。

終夜の胸には死を逃れられないほどの傷があり、今なお終夜の命の源である血液が滝のように流れる。

「何をやっているんだ?! 終夜!」

いち早く、状況を飲み込んだ優一が吠えながら、終夜へ歩みよる。

「…いや、いい。黙って、見てて、くれ」

しかし、終夜は優一を血まみれの右手で制する。

優一がそんなのお構いなしと終夜へ近づいていこうとした時、終夜の身体がどこから出たのか分からない炎に包まれる。

真紅の炎は終夜を包み込むとさらに勢いよく燃え上がり、渦を巻く。

「終夜!」

悲鳴に近い結衣の声が辺りに響く。

その時、終夜の右手が炎の渦の中から飛び出し、右手で炎を薙払い、炎を消す。

「心配するな、俺は大丈夫だ」

「大丈夫なわけあるもんか！！あの怪我で大丈夫なわけない！！早く傷を…」

優一は終夜へ駆け寄り終夜の身体を見て、息を飲み込んだ。

「傷が…消えてる…？」

終夜の身体にあつた死を逃れられないほどの傷はきれいに無くなつていた。

とは言うもののあの出血量では到底助からないはずなのだが、終夜は元気そのもの出で立ちだった。

死が確定していたにも関わらず、終夜は死ななかった。
つまり終夜は、

「…《不死》の身体。死ねない身体に俺はなつてしまったらしい」
終夜はすっかり髪が長くなつてしまつた頭を掻きながら答える。

「俺は死なない。それなら、俺の命なんて軽いものだろう？俺の命と比べたら、周りにいる人達の命の方が俺から見たら大切なんだ。だから、俺はどれだけ傷付こうとも、どれだけ死のうとも、誰かを救い続ける。そのためだけに俺は生きている。それが俺の生きる意味だ」

終夜は笑顔で答える。

終夜は歪んでしまっている。

誰よりも自分を下に置き、自分のことを後回しにし続ける。

そして、《不死》の体になったことにより更に終夜の思考は歪んでしまった。
歪みきってしまった。

余りにも歪んでしまった終夜に結衣達はただただ立ちすくむだけだった。

「無理、よ。今のあなたには、無理」

突然の喋り声に3人は声の主の方を見る。

「あなたは、誰も、救えなんかしない」

先ほど、優一の手によって寝かされていたサクヤが頭を起こして、息を絶え絶えの状態で喋っている。

「…どういう意味だ？」

終夜は苛立ちを隠さず、周囲に撒き散らしながらサクヤに理由を求めめる。

「自分の事を、自分の命を軽く考える人に誰かを救うことなんて出来ない。あなたのその行く先で待っているのは、《真》の絶望。それにあなたは…ゴホツゴホ」

そこまで言うとサクヤは咳き込んだ。

優一がその様子見ると同時に駆け出し、サクヤを抱き上げる。

「サクヤ、大丈夫かい？」

「…うん、って言いたいけど、そろそろ、限界みたい…だから、優一の中で」

「うん、分かった。ゆっくりおやすみ」

そして優一の中に潜り込んでいくサクヤ。

何故だかよく分からないが、優一の世界の中の方がサクヤの回復が早い。

サクヤ曰わく、愛の力だとかなんとやら。

そしてサクヤは何かを思い出したかのように身体を引きずり出し、優一の耳元まで口をもっていき、小声で囁く。

「終夜はこのままいけば必ず《真》の絶望に出会うことになると思うよ。終夜がもし《真》の絶望に出会うことになることになると…」

そこでサクヤは一旦言葉を区切り、呼吸を整える。

「終夜は恐らく耐えられない。きっと死を選ぶと思うの。」

「っ!？」

思わず息を呑む優一。

そんな優一の顔見て、サクヤは微笑みかける。

「だから私達で終夜を支えていこう。終夜を救うの、優一」

そう言い終わるとサクヤは優一の中に潜っていった。

「…そうだね、サクヤ」

優一は固く握り拳を作る。

身体中の異常的な疲労で身体ふらつくがそれに揺るがない、強い誓い旗を優一は立てた。

「終夜を、救うんだ…!!」

「…終夜」

優一がサクヤの元へ駆け寄って行く姿をただ見ていた終夜は突然の
声に多少驚いた。

正確には、声がしたことに驚いたのではない。
その声が余りにも震えていたことに驚いた。

「どうして…そんなこと言うの？」

終夜は声の主は見なくても分かっていた。

結衣である

だが、決してそちらの方を向こうとはしなかった。
どんな顔をしているのか分かっていなかったからだ。

「ねえ、終夜。応えてよ」

「どうしても何も、俺はこの不死の身体になっ
ていなくても、同じ生き方を選ぶ。同じ道を選ぶ。あの言葉は俺の本心だ。俺の命は、
バケモノである俺の命は…っ!？」

突然の受けた背中の衝撃に終夜は思わず言葉を切る。
結衣が背中側から抱き付いたのである。

「やめてよう。そんな言い方しないで」

長い髪の生えた終夜の背中に顔を押し付けているからか、声は若干どもっていた。

「終夜の命はそんな軽いものなんかじゃない。終夜は、私からしたらとても大切な。他の何かとは比べられないくらい大切な。だから、そんな生き方しないでえ」

しゃっくり混じりの話し声に、背中が濡れてきていることから結衣が泣いていることを理解する。

結衣の泣き顔は終夜は嫌いである。

結衣と対立して、結衣が泣いてしまった時、大抵の場合は終夜の方が折れる

「それでも、俺は変わらない。俺は俺の選ぶ生き方をする」

だが今回の終夜は折れなかった。

「なんでえ…なんでよ。何がそこまで終夜を動かすの?」

「…誓ったんだ。俺が、俺が《あの人》の変わりにあの人の目指した夢を追いかける。あの人の分まであの人生き方をする」

終夜の声は余りにも真っ直ぐで強かった。

誰の否定も受け付けない

そんな語彙も含まれていた。

「でも、でもお」

終夜の背中で結衣は泣きじゃくる。

終夜は溜め息を吐き、

「分かった。分かった。なら結衣の前だけではその生き方をしないことにする」

そう言い終夜は結衣の身体を正面に持つてくる。

結衣の顔は涙で目の周りが赤くなっていた。

「本当？」

「ああ、約束するよ」

ポンポンつと終夜は結衣の頭を叩き結衣の身体を離し、優一の方へ歩いていく。

「…ならずつとずつと一緒にいるからね、終夜」

結衣は終夜には聞こえないぐらい小さい声で呟いた。

終夜は優一の横まで歩いて寄るがサクヤの姿は既になく、凄く疲れしていた様子から優一の中に入り休んでいることを終夜は知る。

サクヤの先ほどの発言、つまり《真の絶望》について聞いておきたかった終夜は少し残念そうな顔をするが、もう一つ気になっていたことを確認することにした。

「…優一、身体の方はもう大丈夫か？」

優一は終夜が倒れていた時にハジメと闘っており、終夜が止めに入った時には既に優一の身体はボロボロだった。

特に筋肉の疲労が激しく、優一の身体のいたるところの筋肉が震えている。

しかし、そうなるのも無理はなかった。

ハジメと闘った時の優一の動きは人間の出せる力を遥かに凌駕していた。

終夜が声を掛けたのにも関わらず、優一の反応はない。筋肉の疲労で震えている右手を握りしめ、何かを呟いている。

「おい、優一！！大丈夫か！？」

終夜は心配になり大きい声で優一に呼び掛ける。

「…あ、終夜。…うん、僕は大丈夫だよ。」

そう言い、優一は立ち上がろうとするが前につんのめる。倒れる寸前のところで終夜は優一を掴み、肩を貸す。

「…無理するな、俺が肩を貸してやる」

「…もう貸してもらっちゃってるけどね」

優一は苦笑いで終夜に返す。

「…で、終夜。そろそろ翼しまつたら？」

「ああ、そうだな」

ずっと出しっぱなしだった翼を終夜は身体の中に収める。どのように収まっているのかは誰にも分からないらしい。

そして、翼が終夜の中に収まりきった瞬間に終夜の髪の色はいつもの色に戻り、更に長くなってしまうた髪も元通りになっていた。

「…なんか終夜の身体って面白いね」

「確かに、俺も髪まで元通りになるとは思っていなかった」
いつの間にか、終夜の横を歩いていた結衣が終夜の身体の変化に思わず呟いた。

終夜自身も髪まで元通りになるとは思っていなかったらしい。

「それじゃ帰ろっか」

優一の一言に2人は頷き、歩き出す。

「ねえねえ、買い物続きはあ〜？」

「…知らない」

「知らないじゃない。またいつか埋め合わせしてもらっからね」

「あれ？もともとサクヤの買い物じゃなかったっけ？」

「というか、買った服はどこにやったんだ？」

「やばっ置いて来ちゃった!!」

「あのなあ…」

軽口を叩き合う3人だったがそれぞれの心に確固たる誓いが出来ていた。

それぞれの願いが出来ていた。

第2話 終（後書き）

第2話、これにて終了です。、、

これでストックがきれてしまったのでこれから先の更新はさらに遅くなるかも…です（滝汗）

でも、必ず書きますのでこれからもよろしくです）（

ご感想、ご批判いつでもお待ちしておりますm（）（）m

幕間 1 (前書き)

今回は本編とは一切関係ありません。
時期としては、第一話と第二話の間の話となります。

幕間 1

午前4時。

太陽も昇り始める前の時間に、終夜はいつも目を覚ます。

目覚まし時計などは一切使わず、誰かに起こしてもらおうわけでもなく、終夜は1人で目を覚ます。

朝の鍛錬をするためにいつもこの時間に起きているので習慣化してしまっただけらしい。

大きな欠伸を一つして、終夜はおもむろに布団から出ようとする。

そして、布団の中に何やら違和感を感じ、終夜は布団を引っ剥がした。

そして、大きな溜め息一つ。

終夜の視線の先、つまり布団を引っ剥がした所にあったのは、

「…むふふ」

幸せそうに寝言をたらしながら、物凄い笑顔で夢の世界に旅立っている途中の終夜の学校指定のジャージを着た少女の姿がそこには合った。

終夜は思わず頭を抑え、一つ一つの事柄を思い出す。

少女の名前は結衣。

昨日の事件(?)で出会い、終夜と共に暮らすこととなった少女である。

昨日の夜

終夜と共に久しぶりの食事をとった結衣と晩御飯を食べたあと、結衣がお風呂に入りたいと言い、風呂場へ直行した。

終夜はそれを苦笑いで見送りながら食器を洗っていた。

最後の食器を仕舞ったところで終夜は思い出す。

結衣の着替えが無いことを。

それに気が付くと同時に風呂場のドアが開く音。

「終夜っ！！どうしょっ！！私、着替えもってないよっ」

そう言いながらバスタオル一枚の結衣が終夜の前に駆けってくる。

「ちよっ、ちよっと待ってる！！」

終夜はなるべく結衣の方へ見ないように自分のタンスを開き、無難な学校指定のジャージを取り出し、結衣に投げ渡す。

「とりあえず、それで、代用しておいてくれ。服は明日買いに行くから」

「うんっ!」

結衣は何故か嬉しそうな顔をして脱衣場目掛け駆けていった。

その背中を横目で見つつ、終夜は溜め息を一つ落とす。

結衣には、終夜に対して羞恥心などは無いらしく、平気な顔をしており、終夜の方がどこか疲れた顔をしていた。

結衣は終夜と同年代の女の子であり、さらに言えば、美少女の類に置ける少女である。

だが、精神的には幼い。

これは、五年もの長い間、一人で狂気に吞まれ続けた反動でもあり、全てを忘れた少女の頼りにできるのが終夜しかいないため、結衣は終夜に対してどこか依存しているところがある。

その依存が結衣の幼児退行を進めているのかもしれない。

終夜がそう考えをまとめていると、終夜の背中に衝撃が伝わる。

「えへへ、しゅちやの匂いがする」

終夜の背中で終夜のジャージを着た、とろけた顔の結衣が緩い声をあげていた。

「はいはい。分かった、分かったから俺も風呂に入らせてくれ」

終夜は結衣の手をほどき、風呂場へ向かうが、結衣に今度は手を握られる。

何度目か分からない溜め息を吐きながら、終夜は結衣の顔を見やる。

その結衣の顔を見て、終夜は驚いた。

顔は真っ赤に染まり、どこか恥ずかしそうである。

結衣にもこんな顔ができるのが終夜からしてみたら意外だった。

…だが、驚愕するのはまだ早かった。

そして、本当の驚愕が訪れる。

「ならば、終夜……一緒に風呂入る？」

部屋の中にピシィと音が広がった気が終夜にはした。

「…結衣はさつき入っただろ？」

あんぐり開いていた口を何とか終夜は動かした。

終夜には、部屋の中の空気がどんどん重くなっている気がした。

…主に、窓側の大きなハサミが置いてある所を中心に広がっている。

もちろん、結衣は気付きもしない。

「別に、私は何回でも入ったっていいし…それに…終夜と一緒に入りたいんだもん…ねえ、ダメ、かな？」

結衣は潤んだ瞳で、上目遣いで終夜を見上げて尋ねる。

結衣の容姿と相まって、その破壊力は抜群だった。1000人の男子高校生がいれば、99人がそのまま結衣と入ってしまうだろう。

しかし、終夜は

「断る」

4文字の日本語でバツサリと切り捨てる。
1000人の中の唯一の1人だったのだ。

終夜は、ガーン、と音が聞こえて来そうな表情をした結衣の肩に手を置き、耳元で呟く。

「そついえば、絶が話があるそうだぞ」

その言葉に結衣は、絶の方へ向き、顔を青ざめた。
絶の周りには黒いオーラがまとわりついている。

「結衣…少し、《お話》をしようか…」

あまりにも冷たい無機質の音が部屋に響く。

終夜は静かに手を合わせ、脱衣所へ向かう。

入る寸前の所で「終夜も後で話が」と言っていたので終夜は聞こえない振りをして急いで入った。

終夜は自分の態度に絶が不機嫌になったかもしれないと今更になっ

て恐怖が募り、ドアに耳を当て、ドアの向こう側の声を盗み聞く。

「だいたい結衣は……」

どうやら結衣の説教が始まっているらしく、終夜はホッと胸をなで下ろした。

「私の影が薄過ぎる」とか、「私ももっと出番を増やせ」などなど文句を言っていた気がしたが、そこは聞かぬふりをして、さっさと風呂へ入った。

風呂を済ませた、終夜が髪をタオルで拭きながら扉を開ける。

そして、そのまま冷蔵庫へ直行し、良く冷えたコーヒー牛乳を取り出し、一気に飲み干し、瓶を洗う。

瓶を流し台の上に置いて、終夜は思い出した。

(あれ、絶の説教は終わったのか?)

終夜は、先ほどまで結衣の居た部屋を覗き込んで見る。

絶の周りを覆っていた黒いオーラは既に消え失せ、普通の状態であることが分かった。

しかし、結衣の姿は見当たらない。

「なあ、絶。結衣はどこに行ったんだ?」「もう眠いと言っていた

からな。そのこのベッドで寝かしてあげたのだ。…全く、いつまで経っても結衣は子供だな。」

絶の声は機械的で無感情に聞こえるはずなのだが、最後の一言には、まるで親が寝ている子供を見ている時に似た雰囲気の流れ出ていた。

案の定、結衣はどこか幸せそうな顔をしながら眠っている。

「…で、俺はどこで寝ると…?」

結衣の寝ているベッドは終夜の普段使っているベッドであるので、終夜には寝る場所がない。

「まさか、一緒に寝るとは言わないな」

終夜の呟きに絶が物凄く早さで反応し、それとなしか、黒いオーラが出始めている。

「いやいや、それはないから。…そういえば確かこの辺に、とっ、あつたあつた」

終夜は冷や汗を額に浮かべながら直ぐに否定して、押し入れの中に頭を突っ込み、布団を取り出した。緊急時の来客用の布団である。

そして、冷蔵庫の前に布団を敷く。

終夜の住んでいる部屋は1Kであるため、他に部屋がない。唯一の救いは、キッチンと部屋の間引き戸タイプの扉があること。この扉のおかげで同じ部屋で寝ることは避けられそうだった。

寝る準備が終わった後、終夜はもう一度部屋に戻った。

それで、色々、絶と話してこっちで寝たはずなんだけどな。

回らない頭でそんなことを考えながら、コーヒーを作ったずずつと啜る。

温かいコーヒーの風味が口に広がり、終夜の頭も徐々に冴えてくる。

昨日の夜は、結衣が先にベッドで眠っていた。

結衣が寝ている間に絶と話をして、終夜も眠りについた。

その時は、もちろん隣に結衣の姿はなかった。

つまり、終夜が寝た後、結衣が目を覚まし、終夜の布団の中に入り、寝たと言っことになる。

「…絶になんて言ったらいいんだ？」

其処まで思考が回った後、終夜は1人溜め息を吐き出した。

憂鬱な気分のまま洗面所へ行き、歯を磨く。

歯を磨きながら考えるのは絶のこと。

絶は神の禁忌、「人間に対して直接干渉する」と言う罪を構わず、結衣を救い、自らの姿をハサミへと変えられてしまった。

それから約5年間共に過ごし、絶なりに結衣を救おうとした。結果としては、両親を目の前で殺された結衣の心の闇までは振り払うことは出来なかったが、絶がいたおかげで結衣の心が完全に壊れることはなかった。

その5年と言う歳月を重ねたせいも、絶にとっては結衣はまるで娘のような感じなのだろう。

絶の結衣に対する言動はどこか父親染みでいた。

それも、娘を大事にする頑固親父的なオーラを持っていた。

それに対して結衣は、終夜と一緒に風呂に入る等々危ないところが多いので、これはこれでバランスが取れているかもしれない、と終夜は思いながら、顔を洗う。

タオルで顔を拭いて居るときに、台所つまり、終夜の布団のある場所から声と物音がした。

終夜は結衣が起きたのであろうと思い、洗面所の扉を開けた。

幕間 2 (前書き)

凄く短いです。m(| |)m
今回は趣向を変えて一人称視点です。

幕間 2

私は違和感を感じて、布団の中に手を這わせる。

そこには、私のずっと求めていてやっと手に入れた温もりがあるはず…。

いない。

いないいないいないいない。

ついさっきまでは居たはずなのに。

ついさっきまでその温もりを感じていたのに。

捨てられた。

そんな言葉が私の頭によぎる。

違う違う、と頭を振ってみても目の前には彼は、終夜はいない。

あんなに優しくしてくれたのに。

あんなにボロボロになってまで私を救ってくれたのに。

私は終夜にとってはいらぬ存在なの？

私は終夜にとって邪魔な存在なの？

だから、救ってくれたお礼がしたくて恥ずかしかったけど、背中を

流してあげようとしたのも、全力で断ったの？

私が、嫌いだったから。

私の両目から雫が流れる。

私はそれを拭いもせず、終夜の枕を抱き寄せ、顔を押し付けた。

終夜の温もりがまだ残ってる。

終夜の匂いがまだ残ってる。

「うっ…ひぐっ、しゅっやぁ」

私は声をあげて泣き喚く。

私は終夜の温もりが大好きだ。

私は終夜の匂いが大好きだ。

そうか、私は…

終夜の事が大好きなんだ。

昨日の感じた家族愛ではなく、1人の男として。

それを理解したら、更に涙が溢れてきた。

お父さんとお母さんは私とのつながりを無理やり、『死』と言う形で切り裂かれたけど、終夜は終夜自身の手で私から離れていった。

そう考えたら更に、涙が溢れてくる。

とめどなく、流れ出てくる。

ねえ、終夜、

私なんだってするから、

なんだってがんばるから、

あなたの思い通りに動くから、

「おねがいだから、帰ってきて、終夜」

「…一体何をしているんだ？結衣？」

私の中に雷が落ちた。

その雷はどこか暖かい感じがした。

先ほどは取り乱してしまってますいません。

終夜が私を捨てるなんて、よくよく考えたらありえないですね。

だって、私達、愛し合っているんですから。

あと、申し遅れました。

終夜の未来のお嫁さんの結衣と申します。

以後お見知り置きを。

「結衣。誰に向かって話しているんだ？」

「え〜っと、画面の前の…」

「分かったから。そういう感じの発言は控えてくれ。後、俺は結衣を嫁に貰った覚えはない！！」

「結衣は嫁にはやらん!!」

「絶!?!お前も起きてたのか!?!」

私の目の前で終夜と絶がなにやら言い合っています。

そんなに恥ずかしがらなくてもいいじゃない。
でも、私は嬉しいな。

もう気が付いた人がいるかもしれませんが、私の性格はこちらが素
です。

終夜や周りのと喋る時は若干、猫被って、キャラ作りをしています。

…えっ!?!何故かって?

それは簡単です。

そっちの方が終夜に好きになってもらえそうじゃないですか。
でも、だんだん、そっちのキャラに引っ張られていつている気がす
る…

まあ、いいや。

私は1人頭の中でそう結論ずけると、私は終夜の入れてくれたコー
ヒーを一口すすり、トーストをかじる。

うん、昨日晩御飯から気付いているけど、終夜の料理はすごく美味
しい。

それはもう、三つ星シェフが裸足で逃げ出してしまっくらしいの美味
しい。

まあ、終夜は自分の作る料理の凄さにきがついてないけどね。

このコーヒーだって、トーストだって、とっても大事に作っている。

「熱っ」

それが、とっても嬉しくて、私はついついドジを踏む。

猫舌なのについついホットコーヒーを口に含み過ぎてしまう。

私が舌を冷やそうと奮闘しているときに、私のコーヒーカップの横に水の入ったコップが置かれた。

「あまりにも熱かったらそれで冷やせよ」

そうぶっきらぼうに答え、部屋の中へ終夜は消えた。

…うん、やっぱり私、

終夜の事が大好き。

どこの誰よりも、

他の誰よりも、

ずっとずっと

ずーっと大好きだよ。

終夜。

幕間 2 (後書き)

一応まだまだ「幕間」は続きますのでよろしくです。、、
御意見、ご感想いつでもお待ちしております。

幕間 3

「あんなに泣かれてたら、言い出せないよな……」

終夜は1人部屋の中で呟いた。

結衣が目覚めていることに気が付き、何故終夜の布団の中で寝ていたのか問いただそうと思い、勢いよく洗面所のドアを開けた終夜だったが、開けた瞬間に頭が真っ白になった。

結衣が大粒の涙を流しながら終夜の枕に顔をこすりつけていた。

それも、涙を流しながら終夜の名前を呼び続ける。

その声はとても弱々しく、まるで全てに絶望したかのような声。

その光景を見せられた終夜は、先ほどの勢いは完全に消え失せ、

「……一体何をしているんだ？結衣？」

そんな素っ気ないことしか言えなかった。

その後、結衣に泣きながら抱きつかれたり、頬ずりされたり一悶着あったが、何とか落ち着かせ、朝食を取らせた。

「絶、今回のことはあまり怒らないでやってくれ」

「ああ、私も分かっている」

終夜は部屋の奥の窓の下に立てかけられている絶に声をかけ、絶もそれに返す。

今回のこととは、結衣が終夜の布団に潜り込み、一緒に寝たこと。

結衣は絶が居たとはいえ、今まで1人きりで過ごしていた。

だから、結衣は孤独を極端に嫌う。

故に、結衣は誰かの温もりを求める。

考えてみたら、簡単なことだったのだ。

終夜はそれを理解し、溜め息をつく。

「でも、俺は《バケモノ》だから、な……。あまり、俺に近付かないでくれ。俺には結衣の隣で生きる資格なんてないのだから……」

終夜の呟きは部屋の中に消えていった。

「終夜、歯ブラシ借りるね」

「結衣っ！？ちょっとまって！！今新しいの出すからっ！！！！」

少し部屋の空気が暗くなっていたのだが、結衣の一言で一気に吹き飛んだ。

終夜は直ぐに、部屋を飛び出し洗面所へ向かう。

「お前はどれほどの痛みを、どれほどの覚悟をその小さな身体で背負っておるんだ。だがな、お前は《バケモノ》じゃない。正真正銘人間だ。だから、結衣のことを頼むぞ、終夜よ」
無機質な声が部屋に響く。

しかし、その声が終夜へ届くことはなかった。

終夜が洗面所へ駆け込む。

そして、目の前に写り込んだのは、『終夜』の歯ブラシを口に突っ込む直前の結衣の姿。

終夜は、自らの力をフル動員させ、神速の速さで結衣から自分の歯ブラシをひったくると、洗面台の上に置かれている棚から新品の歯ブラシを取り出し、結衣の口に突っ込む。

突っ込んだ歯ブラシには歯磨き粉がしっかりと付いている。

こんな、どうしようもないことに力を使うのは些か、無駄なのではと一瞬終夜の頭によぎったが直ぐに否定する。

むしろ、全力でやらなければ危なかった。

「むう、終夜との間接キスがあゝ」

シャカシャカと音立てながら歯磨きをしながら結衣は文句を言っている。

「…やはり、それが狙いだったんだな。…というより、そういうことって普通、コップとかでやらないか？」

終夜は片手で頭を抑え、盛大に溜め息を吐き出す。

そして広がる盛大な沈黙。

「…結衣？」

急の沈黙に少し怖くなったのか終夜は結衣の顔を覗き込む。

結衣はぼかんとした顔付きでポーっとしていた。

そして、数瞬の後に破られる沈黙。

「そつちなら間接キスはOKなの！？寧ろやりたい放題！？」

「…いや、だめだから」

結衣の顔から発せられる驚きと喜びに溢れた声を終夜は迷うことなく切り捨てる。

「ぶーぶー、と文句を垂れている結衣をシカトしながら、結衣の口に

入れられそうになった歯ブラシを終夜は自らの口に放り込む。
本当は今日起きてから二回目（そんなに時間を空けずに）の歯磨きだが、歯磨き粉までしっかり付いている歯ブラシを放置する事は終夜には出来なかった。

「今日は買い物に行くからな」

八ミガキを終え、一人で暮らすには少し広いぐらいの八畳の部屋の中央にテーブルを置き、窓側に座った終夜がそう切り出した。

「はいはい、質問」

「ん？なんだ、結衣？」

「いったい何を買いに行くの？って終夜っ！？何あからさまな溜め息吐いてるのっ！？」

終夜は結衣の言葉を聞くと同時に最近よく出るようになった盛大な溜め息を吐いた。

その溜め息に付いて結衣が抗議の声を挙げるが終夜は右から左へ受け流す。

「ねえっ！！聞いているの、終夜！？」

その態度が気に入らないのかさらに結衣は声を荒げる。

結衣による攻撃を一通り受けた終夜はもう一度溜め息を吐き出した。

「なら、結衣。今の自分の服装を試してみる。」

「終夜のジャージだね、うん。それがなんか問題あるの？」

「じゃあ、なんでそれを着ているんだ？」

「うーんと、私が終夜の匂いが好きだから？」

「違うだろっ！！結衣の着る服がないからだろ！？」

「でも、私は終夜の匂いが好きだよっ！！！」

「そんな事誰も聞いていないっ！！！」

このままだと結衣が暴走しそうなので終夜は答えを教えることにした。

「結衣の服を買いに行くんだよ」

女の子というのは買い物が好きである。

更に言えば《服》というカテゴリーは特に好きである。

終夜はそう思っていたので結衣も喜ぶと思っていた。

しかし結衣の出した受け答えは終夜の斜め上をいつていた。

「私、服なんて欲しくない」

「えっ？何でだ？結衣だって新しい服欲しいだろ？」

「ううん、いらぬ。だって新しい服買ったら終夜の服着れないじゃない。」

「…そんな理由かよ」

終夜は盛大な溜め息を吐き出した。

結衣がその溜め息に文句を言っているが終夜は無視をした。

これでは話が終わらない。なので終夜は切り札のカードを切ることにした。

「結衣が可愛い服を着ているところ、俺はみたいんだけどな」

とても小さい声で呟くように終夜は言った。

さっきまで溜め息に対する文句を言っていた口の動きが止まる。

効果あり、と踏んだ終夜は畳みかける。

「結衣にはこんな男っぽい格好じゃなくて女の子らしい可愛い服を着てほしいんだけどな」

「…服」

ああお「ん？」

「私の昨日着てた服どこにあるの！？」

「あ、ああ。それならそこに洗って畳んで置いてあるぞ」

「じゃあ、着替えるからちょっと待ってて。着替え終わったら早速

買い物行こう」

「あ、ああ。分かった」

雰囲気が変わった結衣に少し驚いたが買い物に行く方向に話が纏って良かったと、終夜は安堵の息をき出した。

あまり、こういうやり方は終夜は好きではない。

結衣の気持ちを利用したやり方は。

結衣は終夜に依存している。

依存しているから終夜に好かれようとする。

終夜が、ひとりだった結衣に近付いてしまったから。

結衣を《救う》と言う形で結衣に触れてしまったから。

そして、結衣は依存という感情を《恋愛》という形に置き換えてしまった。

勘違いしてしまっている。

恐らく、終夜以外の人が結衣を救っていたら、結衣はその人のことに同じ感情を抱くだろう。

そこから始まる恋愛もありだと言う人もいるかもしれない。

だが、終夜は認めない。

その感情が向けられるのが自分である、と、言うことを。

(でも駄目なんだよ、結衣。俺の手は…)

そして終夜は自嘲じみた笑みを浮かべた。

「それじゃ、買い物に行こう。終夜」

にこやかな笑みを浮かべ着替え終わった結衣が玄関のドアを開け終夜へ右手を差し出した。

「ああ、そうだな」

終夜は家の戸締まりをして結衣の手を取ることなく歩き出した。

(俺の手は…紅く汚れているのだから)

終夜は悲しそうな雰囲気を放ちながらもついて来ている結衣を確認すると歩き出した。

幕間 3 (後書き)

遅くなってごめんなさい m (| |) m
ケータイがスマホになったので文字が打ちづらい…
これからも遅くなるかもです (^ | ^ ;)

終夜はデパートの一角に設けられた休憩所のベンチに深く腰掛け天を見上げている

《天》と言つてもデパートの天井の白いコンクリートな訳なのだが、終夜は天を見上げたい気分だった。

終夜がこのような状態になってしまった理由が終夜の横に置いてある沢山の紙袋である。

勿論、その中身は服である。

買い物に来る前までに一悶着あつたのだが、いざデパートに来てみると結衣のテンションが急上昇した。

目の前に広がる服などに目を輝かせていいるところをみると、やはり、結衣も女の子なんだなあ、なんて

終夜は思っていた。

そこまでは良かった。

問題はその後である。

結衣は服を一つ一つ手に取り、「この服、私に似合うかな？」と、聞いて来るのである。

終夜は服のセンスがよくわからない。

なので終夜は、「ああ」「や」「うん」などといった曖昧な返事しか返すことしかできない。

勿論、結衣もそれで納得するはずもなく、三、四度生返事を繰り返したところで、「ちゃんと一緒に考えてよっ！！」と、涙目で大きすぎる声で言われ、周りの人達に冷たい視線の集中放火を喰らい、

終夜も真剣に考える。

元々服に関して対して興味がなかった終夜なので考えたところで大した案など浮かぶ筈もないのだが、とりあえず、終夜が見て結衣に似合いそうな服を探す。

腰まで伸びた綺麗な黒髪。

それとは対照的な白い肌。

顔立ちも整っており、まさに大和撫子を再現したような感じの少女。

(着物とか似合うかもな)

と、頭に浮かんだ終夜だったが、洋服売り場に着物なんて有るわけもなく、直ぐに考えを打ち消す。

しばらくの間考え、ようやく終夜の手が動く。

結衣の綺麗な黒髪がより際立って見えるように明るめの空色のワンピース。

それだけでは今の季節では寒いため、その上に羽織るための白色のカーディガンを掴み、

「俺はこれがいいと思うぞ」と、言って結衣に手渡した。そこで、終夜の集中力は切れた。

「後は自分で選んでくれ」

「ええ、もつと選んでよ」

「俺が選んではっかりも駄目だろ。後は結衣が選べよ。」

「終夜に選んでもらうことに意味があるんだよ!！」

「だから、俺は選んだらろう?」

「そうだけど、一着だけじゃん!！」

「それに、結衣がどういう服を選んで来るのか少し楽しみだったりするんだよ」

実は、これは本当だった。

結衣が自分でどういう服を選んでくるのか少し興味があった。

「む、まあ、一着だけとはいえ選んできたし、いいよ。後は私が選ぶよ」

渋々ながらも納得してくれた結衣に終夜はホッと息を付く。

「でも、お金は大丈夫なの?」

「それなら大丈夫だ。少し多めに持ってきたからな」

「そうじゃなくて、私の服でしょ?私がお金を全く払わないで買ってもらうなんてなんか悪いよ」

結衣の頭がしゅん、と、うなだれる。

本当に申し訳ないと思っているようだった。

「そんな事気にするな。これは俺から新しい《家族》へのプレゼントなんだから」

終夜はそう言いながら、結衣の頭に手を置き、優しく頭を撫でる。

「だからな、結衣。俺に遠慮なんてするな」

「……うんっ！！じゃあ、終夜をギャフンと言わせる服選んでくるからっ！！」

「ギャフンってなんだよ……」

本当に嬉しそうに、満面の笑みで結衣は売り場へ駆けていった。朝の行動を見ていると遠慮のひとつかけらもないように見えるが、こっぴどいところでは結衣は気を使う。

なので終夜は《家族》という言葉を使った。

結衣がそれを欲しているのは気付いていたから。

そして終夜は、溜め息を吐く。

これは結衣に対するものではない。

終夜自身に向けたものである。

終夜は結衣に《家族》と言ったが、それは断じて違うと考える。

終夜は《バケモノ》だから、家族になんてなれない。なれる筈がない。

本当なら結衣の隣に立つ資格もない。

それでも終夜は結衣に向かって嘘を吐く。

結衣を傷付けたくない、という偽善から嘘を吐く。

そして、ひとつ嘘を付くことに終夜の心の中に重くのしかかる。
終夜はそんな自分がたまらなく嫌になる。

(だけど、今だけでも結衣が笑っていてくれるなら、いいかな)

終夜はそんなことを思いながら結衣のあとを追いかけてようと、歩き始めた時だった。

突然飛び出して来た人と正面から激突。

終夜は少しバランスを崩した程度だったが、ぶつかった相手は終夜よりも小さかった為、尻餅をつく。

終夜は反射的にそのぶつかった相手に手を差しのべる。

「ごめんなさい、って終夜じゃん」

「すまない、って結衣か」

終夜とぶつかった相手は結衣だった。

結衣は差し伸ばされた手を取り、立ち上がる。

「…まさか、もう選んできたのか？」

「うんっ！そうだよ」

「……………ギャフン」

「…なにそれ？」

結衣の手には四、五着の服があり、終夜が考えに耽っていた僅かの間に結衣は服を既に選び終えていた。終夜の選んでいた時間の数倍早い。それに驚き、自分でも思ってもいなかった、言うことになるとは思わなかった言葉を終夜は口にしていた。

「それだけでいいんだな？」

「うん、いいよ」

「んじゃ、レジにいけますか」

とりあえず、一呼吸を入れ、終夜はレジのある方向へ足を向けるが、結衣に手を捕まれ、止められる。

終夜は急に止められ、バランスを崩しかけるがなんとか立て直す。

「ん？どうした？」

「えっと、あのね。私だけ服買うのもなんだから、終夜の服も選んであげる」

「別に、俺は買わなくてもいいんだが…」

「駄目、だって終夜、そんなに服持っていないでしょ」

「それはそうだが…」

終夜は確かに服をそんなに持っていない。

終夜自身、あまり服に興味がないため、学校の制服を入れても数着

しか持っていない。

「大丈夫、私が選んであげるから」

そう笑顔で言い切られ、終夜は渋々了解した。してしまった。

そこからだった。

終夜の地獄が始まったのは。

何故か目を輝かせた結衣が紳士服コーナーに入った途端に目に入った終夜に似合いそうな服を数着を一瞬で選び、終夜に手渡し、試着室へ終夜の手を引つ張り連れて行く。

試着室に終夜と選んだ服を押し込む。

余りにも早過ぎる状況変化についていけずに戸惑う終夜に結衣は、「んじゃ、着替えたら出てきてね」

と、笑顔でそう言うのと試着室のカーテンを閉めた。

そして、そこからはずっと結衣ペースで運んで言った。

着せ替え人形かのように終夜に次々に服を着替えさせ、服を決めていく。

そして、結衣の納得できるまでの服を選び終える頃には終夜の体力は0になっていた。

そして、レジを済ませ冒頭部分に戻る。

結衣は下着コーナーへ行った。

流石に終夜と一緒に下着を買うのは結衣でも恥ずかしらしく、1人で行くと言い1人で行った。

終夜はそれにホツとするとどっと疲れが出てベンチに深々と腰掛け、

缶コーヒーを啜る。

そこで、フーツと一息付いた時だった。

デパートの休憩所に設けられた窓から《それ》が見えたのは。

幕間 5 (前書き)

今回は、新登場した人から見た視点となっております。

あたしには少し変わった《力》がある。

それはあたしが生まれたときからある。

あたしの力、それは、人の動きが読める。

読めると言っても、読めるのは動きだけじゃない。

(こいつ、どうしてやるうか)

声が聞こえるのだ。

聞こえると言っても、小さい声が聞こえるのではなくて、《心》の
声が聞こえるのだ。

なので、相手の動きが読めるのだ。

人はこの能力を《サトリ》と呼んでいるらしい。

最初の頃は大変だった。

色々な人の《声》が私の耳に飛び込んできて大変だった。

喜び、悲しみ、憎しみ、愛、希望、絶望、ありとあらゆる感情が私
の中に流れ込んできた。

そのせいで私の心は壊れかけた。

それもそうよね。

なにがなんだかよくわからない幼児の私の中に色々な感情が一気に
流れ込んで来るのだから。

そんな時、あたしを助けてくれたのは何時でも兄さんだったの。兄さんはあたしにいつも暖かい感情を向けてくれていた。勿論、父さんも、母さんも同じだった。だから、あたしは今、生きているのだとおもえる。

それからあたしは、必死にこの力をコントロールをしようと必死になって特訓した。

あたしの頑張りが実ったのか直ぐにサトリの力をコントロールする事が出来た。

まあ、そのせいで精神年齢はかなり高くなってしまったのだけど。

だけど、あたしの力はそれだけではなかったらしい。

サトリの力をあたしが使う時、あたしの両面は朱く染まる。

それだけなら問題ないのだけど、違った。

あたしの目が朱く染まっている間だけだけど、あたしの身体能力は人間を遥かに凌駕するの。

素手でコンクリートを砕き、少し走れば、車を追い抜く。

自分でもびっくりするほどの力。

まるであたしが人間ではないのかのよう。

家族のみんなには、まだ、あたしの秘密の力の事話していない。拒絶されるのが怖いから。独りぼつちが怖いから。

だから、あたしは、この力を封印して生きていたの。
隠して生きていたの。

でも、私の考え方は変わったの。
あの人に出会ってから。

あたしは、この力を使って、
あの人のようになりたいって思ったの。
あの人のように、《正義の味方》のようになりたいって思ったの。

だから、あたしは…

「嬢ちゃん、余り大人をからかったら駄目だよ、まあ、泣いて謝ってももう許さないけどな」

あたしの目の前の男があたしに向かって言葉を放つ。

どうやら、考え事に集中し過ぎていたらしい。
気が付いたら、デパートの外の通りの裏路地にまで連れてこられてしまった。

あたしの目の前に立つ男達は不適な笑みを浮かべてこちらを見ている。

その男達の思考を読んでみると、案の定、気持ちが悪いやうな考えしかない。

正直言つて吐き気がする。

まあ、連れてこられた所が人通りの少ない裏路地なのはあたしにと

つては好都合なんだけど。
そんなこと考えながらあたしは髪を左右に纏める。
いわゆる、ツインテールってやつ。

何故あたしがこんな気持ち悪い男達と一緒にいるのか？

それはあたしの目に入ってしまったから。

あたしの目の前で良からぬことをしようしてたから。

あたしの目の前で、私と大して年の離れてない女の子に手を出そうとしてたから。

あたしは、正義の味方になりたい。

いや、なる。

だから、そんなこと考えている悪は許さない。

「オイ、聞いてんのか、こらー!!」

そう言いながら、男達の1人の痩せた背の高い男があたしに手を伸ばす。

あたしは、その声と同時に《力》を解放する。

あたしの目は朱く染まり、目の前の手を伸ばす男の動きを直ぐに読み取り、身体を捻りながら手を受け流す。

受け流した手を掴み、あたしの方へ思い切り手を引く。

男は前屈みになりバランスを崩したのを確認すると、あたしは男の両足を蹴り上げ、唯一身体を支えていた足が地面を離れる。

そして男の体は一瞬宙に浮き、腹這いに落ちる。

うっ、と短い唸り声を上げる。

ここでこの男が諦めてくれれば良いとあたしは願ったがそんなこと

はなかつたのであたしは蹴り上げた足を更に高く上げ、その男の背中目掛け叩き込む。

あたしのかかと落としを食らった男は悲鳴を上げながら、意識を失った。

まあ、意識を失うことはしょうがない。

何故なら人外の力で放ったかかと落としは男の寝ている地面のコンクリートに罅が入るほどの力なのだから。

その光景をポカンとした表情で見ている男達。

なにが起こったのかまだ理解出来ないようだ。

「っ！！やっちまえお前らっ！！」

男達のリーダーみたいな男が声を上げるが、他の男達は動かない。それどころかあたしを指さしながら、震えている。

「《朱眼の二尾の悪魔》だ…！！」

男達の1人がそう呟くと男達に動揺が走る。

「まさかっ！？あれは単なる噂じゃなかったのか!？」

「でも、あの噂通りの出で立ちに、人間離れた能力は間違いないだろっ!？」

人の事を指差しながら《悪魔》は酷いと思う。

それにしても《二尾》って何？

二つの尻尾？

ああ、ツインテールのことか。

あたしがこうやって力を使う時はいつもこの髪型だからね。

まあこうやって悪に制裁を与えることを今まで結構な数やってきたから、こんな変な名前が出回っているのかな？

それでも、あたしのやることはもう決まっている。

とりあえず、目の前の男達に正義の制裁を与えることだけ。

あたしが身体を屈めて走り出そうとした時、

「…間違いない、本物だ…!!」

「オイ、ヤベエぞ!! 逃げろ!!」

悲鳴を上げながら逃げようとする男達。

勿論、あたしは逃がすつもりはない。

力をフルに使い、一瞬で男達に近付き、回し蹴りを放つ。

一瞬のことで全く反応が出来なかったのか、男はあたしの蹴りをもろに受け、壁まで吹き飛ばす。

仲間が吹き飛ばされたことに激情したのか、拳を振り上げながら男があたしに近付き、拳を放つ。

が、勿論あたしは力で既に相手の動きを理解していたので、片足を軸に回転するように相手の拳を逸らすと、更に回転速度を上げ、裏拳を叩き込む。

あたしの拳を受けた男はあたしの後方へ吹き飛ばす。

そして、そのまま回転したまま、近くにいたリーダーみたいな男の前まで移動し、そのまま足払いをかける。

あたしの全力の力と回転力が合わさり、男の身体はいとも簡単に宙に浮く。

宙に浮いたのを確認後、あたしもジャンプし、両膝を揃え、先に地面に仰向けに転がった男の腹部へそのまま落下。

男は苦悶の声を上げ、意識を失った。

パンパンとスカートに付いた埃を払いながら、あたしは立ち上がる。どうやら、この男で最後だったらしい。

辺りにはあたし以外立っている人はいない。

「おやおや、随分と元気なお嬢さんだ」

いや、違ったらしい。

少し離れた所に1人の男が、珍しいことにタキシードを着て、手にはステッキ持った男が立っていた。

「あなた一体誰？あたしに何のよう？」

「名前は名乗ることはしませんが、あなたに用はあります。」

タキシードの男はそこで口を三日月状に歪め、笑みを作る。

「あなたの美味しそうな血液を頂きます」

三日月状に歪んだ口からは、二本の牙らしきものが覗かせていた。

あたしの背筋に冷や汗が流れる。

本能がこの男が危険だと叫んでいる。

だけど、この男がここ最近起こっている連続殺人事件の犯人である可能性がある。

その連続殺人事件に殺害された被害者はみな、血液を全て失っているにも関わらず、辺りには血痕一つ見当たらないと言う不可解な事件なのだ。

「もしかして、ここ最近起こっている連続殺人犯なの？」

なので思い切って聞いてみた。

「ええ、私が美味しく頂きましたよ」

背中に更に冷たい汗が流れる。

余りの恐怖に息が詰まる。

だけど、目の前の男が犯人なのならあたしのする事は一つ。

「そう。ならあたしはあなたに裁きを与えてあげる」

あたしは正義の味方になるんだから、どんなに危険な相手でも裁きを下さなければいけないの。

あたしは何時でも迎撃できるように構える。

「…そうですか」

その言葉を皮切りに男の行動パターンが頭に流れ込んでくる。

あたしはその動きに対応しようと……

「ならば、あなたは充分痛めつけてから美味しく頂くとしましょう」

あたしが男の考えを読んで動き始める前にあたしの頭を男が掴む。

そして、男の考え通りにあたしは地面に叩きつけられる。

「ガハッ！！」

あまりの衝撃にあたしは肺の中の空気を全て吐き出す。

頭から叩きつけられるせいかあたしの頭はくらくらしており、片目が赤く染まっている事から、頭から血が流れていることがわかる。

強い。

あたしの想像以上に強い。

あたしがどんなに男の思考を読んでも、それ以上の速さで男は動く。こんなに早かったらあたしじゃ対応出来ない。

圧倒的過ぎる。

「おやおや、もうお仕舞いですか？なら、さつさと楽にしてあげましょう。私は少女をいたぶる趣味など御座いませので」

男は饒舌にそう語るとあたしの近くに歩み寄り、手刀を作る。

「それでは、おやすみなさい」

男はそう言つとあたし目掛け手刀を繰り出した。

幕間 6

あたしの目の前に手刀が迫る。

男の頭に浮かんだ光景は、その手刀であたしの胸を貫き、心臓をえぐり出し、噴水のように湧き出るあたしの血液を浴びて笑っている男の姿。

そしてその光景を、イメージを、実現するための手があたしの胸に掛り伸びてくる。

避けなきゃ、と、頭の中では動こうとするのだけど、頭を打った衝撃で動くことがままならない。

(ここであたし終わるんだな…)

そんな言葉が頭に浮かぶ。

自分でも、もう助からないということを理解したらしい。

ごめんね。お父さん、お母さん。

そして、お兄ちゃん。

あたし、ここまでみたい…

正義の味方にあたしはなれたのだろうか？

あたしは正義の味方になっていたのだろうか？

(せめて、もう一度だけ、あの人に会いたかったな)

歪んでしまったあたしの生きる道を教えてくれたあの人に、

あたしに夢をくれたあの人に、
名前も知らないあの人に、もう一度だ
け、

もう一度だけ会って一言言いたかったな…

あたしは、あなたのことを愛しています、って…

あたしはそつと目を閉じる。

せめて最後までは、《あの人》の姿を思い描いて終わりたい。

そして、目を閉じたあたしの耳に入ってきた音は、あたしの胸を貫く音……ではなくて、

「グギャツ」

あまりにも無様な悲鳴だった。

なにが起こったのか理解が出来ず、あたしゆっくり目を開ける。

身体を何度も地面に打ち付けながら転がったって行くタキシードの男。

そしてもう一つの光景。

(……うそ)

それを見たとき、あたしの身体に熱い何かが駆け巡るのを感じた。

あまりの光景にあたしの身体震えていた。

何度も、何度も目をこすり確認する。
でも間違いない。

あたしの目に入ったのは、

出会ったあの時よりも背は高くなったものの、背中からはあの時と同じ紅い翼を生やし、

あの時と同じ出で立ちで、

あの時同じ雰囲気醸し出した、

あたしの生きる道となった、

あたしに夢をくれた、

あたしが大好きで、愛おしい彼の背中が目の前にあった。

「お、お前は一体っ!?!」

タキシードの男も何が起こったのか解らず、あたしの目の前の彼に話し掛ける。

「俺か？俺は…」

声もあの時よりも少し低くなっているが間違いない。
やっぱり彼が、目の前の彼が《あの人》なんだ。

あたしの中で心臓が高鳴るのを感じる。

「俺は、《バケモノ》だよ」

たつぷりと時間をかけてその言葉を発した彼は悲しそうな顔をして
いた。

急に、胸の高鳴りが収まっていく。

何かがおかしい。

あの時の彼はここまで悲しそうな顔をしていなかった。

「それで、その《バケモノ》さんが一体何のようですか？」

いつの間にか、立ち上がっていたタキシードの男は、落ち着きを取
り戻し、口調も先ほどまでと同じようになっていた。

「そうだな、一つ聞きたいことがあるんだ？」

「はい、なんででしょう？」

「…連続殺人事件の犯人はお前か？」

彼がその言葉を発した途端あたりの空気が急に冷え込んだ。
そして、その冷え切った空気があたし身体に突き刺さる。
そして、この圧迫感。

「はあっはあっ…」

まるで、心臓を握られているかのような感覚にあたしの肺は上手く
機能しない。

これは、このプレッシャーは…殺気？

「今日はよくその質問をされますね…そうですね。私が全て美味し
く頂きましたよ」

タクシードの男はこれだけの殺気を受けながらも、平然と、更にまるで挑発するような口調で語る。

そこであたしは理解した。

これが《本物》のやりとり。

今のあたしじゃまるで歯が立たない。

あたしはまだまだ、弱い。

「…確かにあんたは悪いことをした。だけど、もう亡くなっていった人達は何をしても生き返らない。だから、その事に俺は何も言わない。」

「ほうほう」

彼の言葉にタクシードの男は興味深げに頷く。

だけど、あたしは、彼の言葉に反対したい。

だってこの男のせいで、何人もの人達が亡くなったのだから、それなりの罰を与えなくてはいけない。

裁きを与えなくてはいけない。

でも、今のあたしは、

「はあっはあっ……」

ただただ呼吸に集中する事しか出来ない。

そして彼は、話し続けた。

「だから、もう止めにしないか？こんなこと。もう充分だろ？」

「…いいえ、まだまだ足りませんよ。私は私が満足するまで血を頂きます。そうすることで私は《最強》の存在になれるのですから」

「それは絶対にしなくちゃいけないことなのか。…誰かの命を犠牲にしてまで」

「《犠牲》？何を言っているんですか？」

タキシードの男は楽しそうに、愉快そうに、口を三日月状にしているやらしい笑みを作る。

「彼らは私の《力》になれたのです。これは非力な《人間》にしてみれば光栄なことでしょう？《最強》の存在になる私の身体の一部になるのですから」

「そうか…なら、俺も、もう躊躇わない。俺は、あんたを止めてみせる。あんたみたいな考え方をしている奴の犠牲になる人をこれ以上増やす訳にはいかないからな」

彼は、そう言うなり、地面に落ちていた、恐らくあたしが倒した男達が用意していたのであろう、鉄パイプを二本、手に握り締めた。

彼が握り締めた瞬間、鉄パイプが紅い光が集まったかと思うと、鉄

パイプは一枚の羽根をかたどったような剣へと変化した。

そして彼は、右手を相手の方へ真っ直ぐ構え、左手をやや上方へもつていき逆手で構えをとる。

「私の名前は『ヴァン』と、申します。あなたの名前を教えてくださいませんか？」

「……天城、終夜だ。で、それがどうしたんだ？」

タキシードの男、ヴァンの言葉に困惑されながらも、彼、終夜さんは名前を名乗った。

終夜……うん、名前も素敵だなあ。

だなんて考えていた所にヴァンは不適な笑みを浮かべた。

「いえいえ、私が最強の存在になるための『礎』になってもらうのですから、名前ぐらいいは聞いておかなければいけないと思いませんか。……どうせすぐに忘れるのですがね」

ヴァンはそう言うと、ステッキを真っ直ぐ終夜さんに向け構えた。

「そうかよっ」

そして、その言葉を皮切りに戦いが始まった。

幕間 6 (後書き)

…幕間が予想以上に長くなってしまった気がしてきました(^ | ^) ;
)

地面を蹴る音がしたと同時に紅い光が駆ける。

あまりの移動速度にあたしの目には捉えることができない。

ほぼ一瞬で終夜さんの動きに合わせてるように、ヴァンが真っ直ぐ構えステッキで突きを繰り返す。

あたしはヴァンの放った突きが終夜さんの身体を貫く光景が頭に浮かび、恐怖し目を瞑る。

しかし、あたしの耳に入ってきた音は軽い金属音だった。

恐る恐る目を開けたあたしの目に映るのは、逆手に持った羽根の剣の刃の部分で上手く相手の突きの軌道をそらした終夜さんだった。

ヴァンのステッキが終夜さんの剣の上を滑る。

それを見た終夜さんはもう片方の剣を振り上げる。

そして、空気を切り裂く音と、カラン、と地面へ落ちた音が聞こえた。

終夜さんが切り落としたのはヴァンのステッキ。

切り落とされたステッキは、本来の半分の長さにまで縮んでいた。コレではステッキとしても、武器としても使えない。

つまり、ヴァンの持っていた唯一の武器を破壊したのだ。

「これで、あんたは何も出来ない。大人しく降参するん…っ!!」

終夜さんが話している途中に響く轟音。

終夜さんの身体が浮かび上がり、吹き飛ぶ。

一瞬の事であたしにはよくわからなかったけど、拳を突き出しているヴァンの姿を見て、殴り飛ばされたと言っことを理解する。

終夜さんは空中で一回転すると、両足で地面に着地。

それでも威力を消し切れなかったようで、数メートル後ろへ足を引かずられる形でなんとか動きを止めた。

「残念でしたね。私は《こちら》の方が得意でしてね」

そう言っヴァンがあたし達の方へ見せたのは、自らの両手。

先ほどまではあたし達、人間と同じような手をしていただけ、ヴァンの両手は少し変わっていた。

爪がずいぶんと伸び、両手全体を血のような赤色のオーラのようなものをまとっていた。

「まさか、あの攻撃を防がれるとは…ですが、あなたの武器はずいぶんと脆いですね。もうそちらの剣は使い物にならないようです」

ヴァンの言葉を聞き、あたしは終夜さんの剣を見た。

終夜さんの剣は至る所に罅が広がっており、今にも砕けてしまいそ

うだった。

でも、終夜さんは落ち着いていた。

「そうか…なら、俺も本気を出させてもらおうとするか」

そう言うと、罅の入っていない剣をヴァン目掛け投合。

いきなり武器を投げた事にヴァンも驚いたのか、物凄いスピードで飛行する剣をヴァンは身体を捻りなんとか避ける。

終夜さんはヴァンが体制を崩したことを確認すると、先ほどよりも早い速度で駆け寄り、もう一つの剣を振り下ろす。

「なかなかの攻撃ですが、まだまだですね」

ヴァンの余裕たっぷりの方が聞こえたと同時に、硝子が砕けるような音と共に終夜さんの剣が粉々に砕かれる。

「だから言ったでしょう？あなたの武器は脆いの…ッ！」

ヴァンの言葉が途中で途切れた。

気が付けばヴァンは身体をくの字に曲げ宙へ浮き上がっている。

そして、ヴァンのお腹には終夜さんの右手がめり込んでいた。

終夜さんが右手を引き抜くと同時に苦悶の表情をして前に屈み咳き込むヴァン。

「…やってくれましたね、ですがこの程度なん…ガッ！」

ヴァンが喋りながら顔を上げた瞬間に、ヴァンの横顔に終夜さんの蹴りが入り、派手に転がりながら吹き飛ばされる。

それでも、ヴァンはなんとか体制を立て直し、何とか地面に着地するが…

「悪いな、俺は実はこっちの方が得意なんだ」

ヴァンの目の前に移動していた終夜さんの両手には、紅色をした金属製のグローブが付けられていた。

紅い閃光が走り、ヴァンの顔が大きく歪み壁へ打ち付けられた。

まさに圧倒的。

早さも、力も、何もかもが終夜さんが圧倒している。

「畜生っ！！私は最強なのだ、最強の存在になるのだあつ！！」

終夜さんの連続攻撃を食らい完全に冷静さを欠いたヴァンが荒々しい口調で

身体を起こして、終夜さんに疾走する。

そして、終夜さん目掛け拳を突き出す。

終夜さんもそれに合わせるように拳を突き出し2人の拳が轟音を出しながらぶつかり合う。

「あんたは最強になんてなれない」

お互いの拳がぶつかり合い、拳を合わせたままの状態を終夜さんは語り出す。

「なにっ!？」

ヴァンの顔にすでに余裕など感じられないが、終夜さんの言葉にすくに返した。

「あなたは人の血を奪うことで確かに力を手に入れた、けどな…」
終夜さんの拳に更に力が入り、じりじりと押しやる。

「それはあなたの力なんかじゃない、あなたが奪った人達の力だ。
…誰かの力に頼った時点であんたは最強になんかなれないんだよっ
!!!」

その言葉を言い終えると同時に終夜さんの拳が紅く輝き、ヴァンの拳に纏われていたオーラを吹き飛ばした。
ヴァンの顔が驚きに染まったと同時に終夜さんの拳が顔面にのめり込み、終夜さんはそのまま、地面に叩きつけた。

終夜さんはその後直ぐに新しい鉄パイプを手に取り、再び剣を作り出して、ヴァンに突き付けた。

「…さあ、どうする?あんたがもう誰も襲わないと約束するなら命だけはとらない。だがな、まだ止めないと言つとなら…今ここであんたを、殺す」

手に持った羽根をかたどった剣の刃が光り、ヴァンを照らす。

「……分かりました。もう、誰も、襲いません」

ヴァンは悔しげに顔を歪めながら、そうゆっくり呟くように言葉を吐いた。

その言葉に満足したのか、終夜さんは剣を下げ、ヴァンを解放した。

その後、ヴァンはノロノロと立ち上がり、終夜さんへ背を向けた。

「約束は守れよ。俺はあんたも殺したくはないんだ」

「……分かってます。それでは、ごきげんよう」

ヴァンはそう言うと、姿を消した。

幕間 終（前書き）

遅くなってごめんなさい m () m
これにて幕間終了です

幕間 終

「なんで、逃がしたんですか？」

あたしの口が勝手に動き、その言葉を発していた。そのことにあたしは少し驚いたけど、これは本心で思ったことだから、寧ろちよつとよかったのかも知れない。

あの男、ヴァンは許されないことをした。人を殺したのだ。

ただ自分の為だけに、人を何人も殺したんだ。

その罰は、その罪は、償わなければならないのに、裁かれなければならないのに、

終夜さんは、あたしの瞳を真つ直ぐ見据えている。でも、あたしの感情は止まらない。止まらない。

「あの人は許されないことをしてきたんですよ？その罪は償わなきゃいけないのに、裁かれなければいけないのに、なんで逃がしたんですか！？」

あたしはふらつく身体を何とか支え、立ち上がり、終夜さんに怒鳴り散らした。

本当はこんなことしたくない。大好きな人に怒鳴り散らすなんてこと。でも、あたしは許せなかった。

あたしは信じられなかった。

罪を犯した咎人をなんの裁きも与えずに逃がしたことが。

「確かにあいつは、ヴァンは許されないことをした。けど、俺は裁きの執行人でも裁判官でもない」

終夜さんは、あたしの瞳を見てゆっくり言葉を紡ぎ出す。

「ただヴァンにもうこんなことは止めてもらいたかったただだ。誰かの命を弄ぶようなことは」

あたしは終夜の言っていることが理解できない。

「たった…それだけ、ですか？」

「ああ、そうだ」

「ふざけないでくださいっ!! あいつは何人も人の命をすでに奪っているですよ!! あいつの、たったあいつ一人の為にたくさんの人が悲しんだのですよ!!」

頭の中の理性が必死にブレーキをかけるが、上手く作動はしてくれず、あたしは更に大きな声で怒鳴り散らしていた。

「確かにあいつは、取り返しの付かないことをしてしまった。けどどな、あいつに裁きを与えて、何になるって言うんだ? 亡くなった人達が帰って来るのか? 悲しみが消えるのか?」

「それはそうですけど、あたしには分かりません!! 犯した罪は裁

かれるべきです！！あなたがそう言うのならあたしが、あいつを裁きます！！」

あたしはそう言うつと、ヴァンの去っていった方へ歩き出そうとする。が、終夜さんが両手を広げあたしの行く先に立ちふさがる。

「なんですか？退いてください」

「退かない。俺はあいつを、ヴァンを信じているんだ」

「信じる？信じたところで罪は消えません」

「…なら俺があいつの罪を償う」

終夜さんは確固たる意志を込めてあたしに言った。

あたしには訳が分からなかった。

「訳が分かりません。あなたは何を考えているんです？」

「何も考えちゃいないさ。俺は俺の本能のままに動いている」

「ああ、そうですねか！！ならあなたの心に直接聞いてみるとします
！！」

あたしはそう言うつと両目を朱く染め上げ、サトリの力を使い、終夜さんの心の中を見る。

あたしの目の色が変わったことに終夜さんの顔が驚きに染まるが関係ない。

あたしは終夜さんの心の中を覗いた。

その瞬間、あたしの目の前は真っ赤になり、そしてその後、終夜さんの心の中があたしの中に流れ込む。

でも、あたしの思っていたものとは違っていた。

普通の人達に比べ、終夜さんの心は違っていた。

普通の人に比べて、遥かに多すぎる思いが、強過ぎる思いが、あたしの頭に流れ込む。

悲鳴を上げる間もなく、あたしは両膝を着き前に倒れ込む。

そして、あたしは意図もたやすく意識を失った。

頭にひんやりとした物が乗せられて、あたしは意識を取り戻した。

取り戻したものの、おでこに乗せられたひんやりとした物、恐らくタオルなのだと思う物が予想以上に気持ちが良い、なかなか目を開けられなかった。

「あれ？あたしは…？」

それから、何とかだらけたい気持ちに打ち勝ち目を開け、あたしは何故、眠ってしまったのか、首を傾げる。

とりあえず、周りを見渡してみる。

天井があることからどこかの建物の屋内であることが分かり、あた

しの寝かせられていたベンチと同じベンチが規則的に並んでいる。

良く自分の記憶を漁ると、一つだけ思いたる節がある。

「あ、ここ、デパートの休憩所かあ」

「ああ、そうだよ」

思わず呟いた独り言に対し、あたしの真後ろ、それもすぐ後ろから返事が返って来たことにあたしは驚き、身体が跳ね上がる。

その時にあたしの頭に鈍痛が走り、思わずあたしは頭を抑える。手で抑えた時にあたしの頭に包帯が巻かれていることに気が付いた。

「大丈夫か？頭を強く打ったんだ、少し安静にしてろ」

言葉は少しぶっきらぼうだけど、その声はどこか優しさが滲み出ていた。

「あ、はい、大丈夫で…」

恐らく、頭の手当てをしてくれたであろう人の方へあたしは身体を向ける。

あたしの真後ろにいたため、全く気付かず、今までのあたしの行動を見られていたことに少し恥じらいを覚えながらも振り向いた。

そして、あたしはすべてを思い出した。

「おい、そんなに痛むのか？」

「なんで、ですか？」

「だって、お前涙が、」

そう言われて、あたしは涙があたしの頬に流れているを知った。

「いいえ、違い、ます」

若干、しゃっくり混じりの声で何とか返す。

「じゃあ、なん」

「なんであなたは」

相手の言葉を切り、あたしは話を続ける。

「そんな風に生きていますか！？」

あたしの一言に相手は驚き、立ち上がる。

あたしが意識を失ったのは彼の、終夜さんの心を覗いたから。

あまりじっくり覗くことは出来なかったけど、あたしは理解した。

終夜さんの思いを。

「…やはり、見たんだな、俺の中を」

それを言うと、終夜さんは再びあたしの横へ腰掛けた。

「見てしまったことはごめんなさい。……ですけど、あなたはつらくないんですか！？どうしてあなたは、そこまで出来るんですか！？どうしてあなたは……」

そこからあたしは言葉を発することができなかった。

あたしの両目からは涙が溢れ出し、まるで子供のように泣きじゃくった。

あたしが意識を失う直前に見た思い、それは、深い悲しみと、その思いだけでその人を殺してしまうぐらいの怒りと憎しみだった。

そして、その怒りと憎しみの向けられている先の全てが、

終夜さん自身に向けられていた。

普通の人なら直ぐに自ら命を絶つだろう。

だけど、その思いを鎖で締め付けている思いもまたあった。

誰かを助けると言う思い。

その思いだけが今の彼を、終夜さんを生かしている。

生かしていると言っても、それは脆い鎖で、すぐにも壊れてしまいうそなぐらいの物。

誰かのためなら、終夜さんは自ら命を捨てる。

自分の命の価値なんて無いものだと考えている。

あたしは、その事が悲しかった。
そんなに苦しいのにその事を一切表に出さずに過ごしている終夜さんがとても悲しかった。

あたしの涙は止まらない。

何度も涙を拭いても次から次へと涙が溢れる。

それと同じように、声も溢れ出す。

そんな時だった。

あたしの身体が背中から何かに押され、前に傾く。

あたしの目の前には、終夜さんの胸があった。

その事から抱きしめて貰っていることに気が付いたけど、あたしは終夜さんの胸で泣くことしかできなかった。

「もう、大丈夫です」

そう、あたしが言うと、終夜さんはあたしを離してくれた。

あたしは終夜さんの目と向き合う。

泣きながら、あたしはある決心をしたんだ。

「悪いが、俺は、この生き方を変えることは出来ない。俺にはこの

生き方しかできないんだからな」

「…分かってます。終夜さん、あなたは何言っても聞くような人ではないですからね」

あたしの言葉に終夜さんはホツとした顔を作る。

「だから、あたしが永遠に終夜さんのそばで支え続けます。ですので、終夜さん」

終夜さんの顔がみるみる変わっていくけどもうあたしも止まれない。あたしの気持ちを聞いてもらうんだ。

「あたしと結婚してください!!」

終夜さんの顔が固まった。

あたしの顔は恐らく真っ赤っかだろうな、なんてあたしが思い始めてから終夜さんの再起動が終了した。

「あ、あのなけ、結婚って言うのは好きな人とする事で」

「あたしは終夜さんのことがずっと前から好きでした!!」

「だけでも、お互いのことも何も知らない訳だし、」

「それは追々知っていけば良いとあたしは思います!!」

これは全部あたしの本心。
あたしは終夜さん以外の人と結婚する気も、お付き合いする気もない。

あたしの勢いに完全に終夜さんは押されてる。

このまま押し切るんだ！！

頑張れ、あたし！！

その時、デパート内の放送が響く。

「天城終夜様、お連れ様が一階サービスカウンターでお待ちです。至急お越しく下さい」

「悪い、呼ばれたから行くな！！」

終夜さんはそう言うともうスピードで走っていった。

頭を強く打つたにも構わず大きな声で話していた反動かあたしは終夜さんの動きに反応が出来ず、終夜さんは人混みの中へ消えていった。

「絶対、諦めませんから」

あたしは独り呟く。

これはあたしの決意。

こうやってまた出会えたんだからまた、出会える。

「理沙く、はあくやっと思つけた」

聞き覚えのある声にあたしは振り返る。

「もう、急にどっかに行っちゃうんだか……って頭どうしたの!？」

「ええっと、ちょっと派手に転んじゃって。でも、ちゃんと手当てしてもらったから大丈夫だよ、お兄ちゃん」

そう、この人はあたしの大切な家族、あたしのお兄ちゃん。

「なら、良いけど。んじゃ、そろそろ帰ろっか?」

「うん!!!」

あたしはお兄ちゃんの手を握り歩き出す。

「ずいぶんと機嫌が良いね。何かあった?」

「んふふ、秘密」

あたしの大切な人、未来の旦那さんが出来ました、なんてまだ言えない。

終夜さんの説得が終わってから全部話すから、それまで待っててね。

優一お兄ちゃん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1679w/>

紅い翼と白の少年

2012年1月6日01時48分発行